

すから、……」話がかういふ事になつて來ると、受答が出来ないので、石村がだまつてゐると、「御免なさいね、こんな陰氣な話をして、……」と蘭子は首を傾げながら「さうそ、石村さん、私、今日、郊外散歩に誘ひに來たの、」といつた。「えッ、今頃から、もう日が暮れますよ、」「だつて、自動車ならいいでせう、私の知つてる運転手が半日休みだから、何處へでも乗せて行つて上げるといつて、……表に待たしてあるんですから、……」「亂暴だなア、ぢやア、もう二十分ぐらゐ待たしてある譯ぢやありませんか、」といふやうな問答があつた擧句、彼等は出かけることになつた。

石村の下宿は、自動車の止まる大通から、狭い道を三つぐらゐ曲らねばならない所にあつた。その道を歩きながら「君は、初めて大阪のお宅で會つた時と殆ど同じ風をしてゐますね、分の厚い草履まで昔と變らないな、僕は君が下駄をはいてゐるのを見たことがない、……」「いやッ、男の癖に、」その云ひ方は阿由葉蘭子にしては有觸れ過ぎてゐますね、などと云つてゐるうちに、大通に出た。まだ自動車のめづらしい時分であつたから、石村が乗る前に「これですか、」といひながら、ふと車の中を見ると、座席の眞中に八つか九つの兄と妹の子供が小鳥のやうにならんで坐つてゐる。「君はするぶん亂暴なお母さんだなア。」

蘭子の知つてゐる運轉手は、半月程前に大阪から來たといふ者であつたから、本郷三丁目から明治神宮へ行く道を知らないので、石村が、車の中から、そこ左、そこ右、と教へると、彼の横に腰

かけてゐた新作は、そこ左、そこ右、などと口眞似した。ところが、妹の鯉子の方は、よほど無口な質らしく、石村が「何年生、」と聞いても、ただ「三年生、」と答へたきりであつた。

しかし、一の鳥居前で自動車から下り、玉川砂利を敷いた參詣道にかかると、二人の兄妹は、どの子供たちもするやうに、たちまち大喜びで駈競をはじめた。彼等は、二人の大人たちが歩いて行く前を駈け出して行つて、ふと立ち止まつて振り向いたり、さては萬歳を唱へたりするのである。腕白な新作は、いつの間にか話に夢中になつてゐる大人たちの後にまはつて、石村の突いてゐるステッキを取りに來たりした。

「さあ、競走しよう、」といつて、石村が突然駈け出すと、子供たちは歡呼の聲を上げて石村と共に走つた。

「母さんも競走しない」と新作は笑ひながら皆の行動を見てゐる蘭子を勸誘に行つた。

「さあ、しませう、」といつて、蘭子も駈け出した。さうして、彼等が參拜を終つて、元の自動車の所に歸つて來た時は、既に日が暮れかかつてゐた。そこで、「もうこの邊に外に行くところはないうか、」「もう日が暮れますよ、」その他の問答が自動車の前ではされたが、その問答の結末のつかないうちに、子供たちが寒がり出したので、取り敢ず自動車に乗つた。さうして、石村も蘭子も一度も行つた事がないといふだけの簡単な理由で、自動車を目黒の不動まで走らせることになつた。

明治神宮から目黒の不動まで。——まづ代々木の原を抜けて道玄坂の上までは知らないうちに
つてしまつたが、道玄坂から目黒の不動まで行く道は、誰に聞いても、方角だけは知つてゐても、
道筋を知つてゐる者は一人もゐなかつた。そこで、方角だけを便りにして、後は行當りばつたり
自動車すすめたが、そのうちに、道は次第に狭くなる。日は暮れる。大正十二年の頃であるから
町から郊外へ、郊外から町へ、無数の車と人が行き交ふ。そこで、彼等の自動車は、一臺の荷車の
ために一町以上逆行させられたり、傍の溝の中に車輪をもぐらせたり、或る四角では五分間以上停
車させられたりした。

初めのうちは、まるで東京を十里も離れたやうな感じだとか、あの林の向うは谷合になつてゐる
らしい、坊や、そら又あんなとこに富士山が見える、などと云つて、石村は、女子供を慰めたり、
自分自身を慰めたりしてゐるが、いつか日はとつぷり暮れ、窓の外は、たまに明りが二つ三つ見え
るだけで、一面の暗闇であつたから、さすがの石村も少し心細くなつて來た。それに、幌型自動車
であつたから、冷たい風が吹きとほすので、座席は田舎の停車場の待合室よりも寒い。それで、石
村は新作を膝の上に乗せて抱き、蘭子は鯉子を抱きしめて、子供たちを暖めるやうにした。

やがて、子供たちがそれぞれ寝入つたと思ふ時分、「私ね、石村さん、子供を二人つれて、どこか
活動寫眞にはひらうと思ひますの、」「成程、それはいい思附だ、活動俳優なら、子供ふたり、然も

男の子と女の子だから、非常に歓迎するかも知れませんが、」「私が朝木と別れても、どうせ邪魔が
はひつて、碌な手当をくれないでせうから、いざとなつて、……」といひかけた時、石村の膝の上
に寝てゐた善の新作が、突然、「母さん、早く歸らうよ、」といひ出した。

石村は、さつきの新作の微かに曇らした顔附で、この明治神宮へ行つた時のことを、假りに新作
は覺えてゐても、わざと、「知りません、」と云つたのではないであらうか、と思つた。さうして、
石村は、新作が既に故人になつた母の蘭子を餘りよく思つてゐないらしいことを不思議にも思ひ、
又さもあらうとも思つた。

しかしまた、石村はかうも思つた。

蘭子は、その長所を別にして、いろいろの缺點を持つてゐた。彼女は、誤解され易い性質を持ち
誤解され易い行動もした。しかし、今はさういふ事をも別にして、彼女が子を思ふ氣持は、柳一郎
と不和になつてからは病的なところもあつたが、それだけ眞剣で情熱的なところがあつた。

石村は、蘭子が十六七歳の頃から三十五六歳までの間に、彼女が愛し、彼女が愛された數多の男
を大抵知つてゐるが、その人たちの中で、彼女が最も愛した人に對する愛でも、彼女が子供を愛し
た愛に比べると、實に果ないものであつた、といへるであらう。しかし、子供たちには、それが却
て、と思つて、石村が、

「君たちが、青山のお父さんのところに、おばあさんと一緒に居られた時分に、お母さんが君たちを盗み出しに行かれた事があつたやうですが、それは覚えてるますか、学校の歸りなどを待ち伏せして……」と、聲をひそめて、新作の顔色をうかがひながら、いふと、

「ええ、それは知つてゐます、……床屋へ来たことがあります、……」といふ新作の聲は内證話をする時のやうに低かつた。――

石村はかういふ事を思ひ出したのである。

石村が蘭子に誘はれてあの夕方のドライブをしてから一年ほど後の或る日、突然、蘭子が本郷の石村の下宿をたづねて来た。石村が、一と月程前に大阪から手紙をもらつたことを思ひ出して、「いつ歸つたんです」と聞くと、「十日ほど前」と答へて、蘭子はこんな話をした。

あれから一週間程後、座員が青山の或る町に家を見つけて来たので、子供と女中をつれて越して行つたが、その家で朝木の母と一緒にくらすことになつた。その家で三月ぐらゐる暮らしたが、たうとう辛抱しきれなくて大阪へ行つた。それは、柳一郎が旅先から子供あてに毎日ほど便りをよこしながら蘭子には一度も便りをしない、それはまだ我慢できるが、その子供あての便りの端に、あの女が自分の名前で、「お父さまは今日、活動寫眞の撮影所を見にいらつしやいました、これからお手紙は京都へ下さいませ、おばあさまによろしくとお傳へ下さい、」などと書いて来たことが

二三度もあつたからである。

そこで、蘭子は、腹立ちまぎれに、大阪から、向う何年間の慰勞金、幾ら幾らなどといふ他人向きの言葉を書き立てた手紙を、返事がないので、何度も出た。それでも埒が明かないので、蘭子は上京したといふのである。

「それで、今どこに。」「知つてゐる人の家に、……はつきり話をつけようと思つて、人に仲にはひつてもらつてゐるの。」「それはまづいな。」などといふ問答があつた後で、「子供さんたちは、」と石村が聞くと、「それが、朝木のところに取られてしまつたんです、」と蘭子は悔しさうにいつた。

それから、彼女は、金もほしいが、それより子供の方がほしいので、この前に、子供の話を持ち出すと、學校があるからと云ふので、夏休まで待つてゐて子供を迎ひに行くと、何とか彼とかいつて渡さない、それで、今度はどうしても子供だけはつれて行きたい、と云つた。

「朝木君は子供を愛してゐるんですか。」「端で見てゐて憎らしいほど可愛がつてゐます。」「そんなら世間並に君は女の子の方を貰ふといふ事にしたら、」朝木は二人ともくれないと云ふんです、……しかし、私、どうしても子供と別れることは出来ないんです。」「それぢや、金の方の談判は思ひきつて、子供を貰ふ談判に全力を盡したらどうです、」と石村がいふと、「實は、この夏、連れ出した事があるんです、」といつて、蘭子はかういふ話をした。

去年の今頃、いつか明治神宮から目黒の不動までドライブした自動車の運転手に頼んで、子供が學校から歸るところを待ち伏せして浚ふ役をしてもらひ、蘭子は子供を受取つて連れて行くといふ段取にした。その日、蘭子は、特に借著^{かりき}までして、地味な装ひをし、或る町角のポストの陰^{かげ}に身をひそめ、耳を澄まして待ち受けた。そこは學校歸りの生徒たちの最も多く通る道であつた。やがて大勢の子供たちががやがやといふ聲や足音が近づいて來た。間もなく、かたまつて話しながら行く者、肩を組んで歩く者、ばらばらと駈けるもの、ひとり離れて歩く者、——それは蘭子にはただ子供の洪水のやうに見える。と、突然、その中から、二人の大人が何か争ひながら此方^{こちら}に向つて來るのが見えた。その二人を避けながら、洪水のやうな子供たちの目は皆その二人に集まつてゐる。蘭子もその方を見た。争ひながら、此方に向つて來るのは、あの運転手と書生風の青年である。蘭子の目は、その二人の大人を見つけると同時に、別れてから片時も忘れることの出來ない二人の子を見つけた。「結局、どうしたんです、」「お父さんに叱られますから、のの一點ばりで、朝木の書生が、つれて行つてしまつたんです。」——

かういふ事を知つてゐるだけに、「その事は思ひ出たくありません、」といふ意味にも取れる。新作が低い聲で云つた「床屋へも來ました、」といふ言葉に、一瞬間ではあるが、石村は何ともいひやうのない憂鬱な思ひに沈んだ。

そこで、石村は、氣を變へるつもりで、「ちよつと失敬、」といつて立ち上り、観客席の出入口の傍へ行つて、ドアを細目に明けると、折から、舞臺では、『不撓二十年』の幕が明いてゐて、朝木新作舞臺装置の前で、勇ましい姿をした五十人ばかりの男女の座員が、手に手に劍を持ち、それを上げたり下げたりしながら、

歩みはじめて、二十年^{はたとせ}すぎ

峠なかばで越し方見れば

頼もしいぞえ、祖國の空に

残るわれらの足の跡

右に藝術、左に大衆

かざすマアクは柳に蛙

若きわれらは日も夜も歩む

朝木ゆずりの半歩主義……

と行進曲を歌つてゐる。石村は、靜かにドアを締めて、元の長椅子の所に戻り、眩しさうな顔をし

てるる新作の傍に腰を下ろした。さうして少し落著いてから、

「變な事を聞くやうですが、君たちにはお母さんの記憶は大へん悪いですか。」

「ええ、いろいろの人が、いろいろの事で、たいてい母の事を、……」

「悪くですか」と、分つてはゐるが、石村が聞くと、

「ええ、……」聞きとれないやうな聲であつた。

「でも、……では、……鯉子さんは……」

「妹は、僕より、もつとひどいです。……それに、妹は、僕よりもつと無口で、口下手で、……偏屈です。」

石村は蘭子の話はこの邊で切り上げた方がよさうだと思つたので、

「お父さんは、」と聞いてみた。

「父は好きです。」

「僕は、朝木君とは、學校時代もさうだが、喜久井町時代は、毎日ほど會ひました。……僕の母もよく行つて、朝木君に頼まれて、ときどき唄を教へたり、また、朝木君たちに頼まれて、三味線をひいたり、唄をうたつたりした事があつたさうです、……」

「ええ、その時分のお話も、婆やがよくしてくれれます。」

石村は、先程から、新作の受答の中に『婆や』といふ言葉が何度も出る上に、その度に、婆やが「先生の事を……」とか、「その時分の事を……」とかいふのが、みな喜久井町時代の事であるのに氣がついた。と、ふと、山根の家の二階から見た、向うの家の、『深女形』のやうな顔をしてゐた婆やは、もしかすると、喜久井町の朝木の家で女中の代りをしてゐた、蘭子の姉（實は叔母）のお銀ではないかしら、と石村に思はれた。そこで、彼は、

「君の家の前に、山根といふ家はありませんか、」と新作に聞いてみた。

「僕たちは、今年の二月に、今の家に越して來たんですから、……」と新作はちよつと首を傾げてゐるが、「あツ、あります、たしか僕の向ひの家です。」

やつぱり、さうだ、どこかで見たやうな顔だと思つた筈だ、と石村は、目をつぶつて、切の長い目、小さいけれど恰好のいい鼻、薄い唇、平面——あの顔は、二十一二年前に、白髪と皺がなかつただけで、毎日ほど見た顔だ、と思つた。

「ところで、鯉子さん、いま何をやつて居られるんです。」

「……文學です。」新作は、自分の事のやうに極り悪さうに、口をつぼめて、やつと聞きとれる程の小さな聲でいつた。さうして、苦笑のやうな微笑をした。

「ほ才、文學、……」石村は獨言のやうにいつた。さうして、いつか山根の家の二階から見た、向

うの家の下の部屋で、老大な机の前に坐つて、毎晩一時か二時頃まで読み書きをしてゐた娘が鯉子であつて、彼女があつたやうに勉強してゐたのは文學であつたのか、と思ひ、また同じ家の二階でいつ見ても切切と繪を書いてゐた青年が新作であつたのか、と思ふと、石村はいはうやうのない或る感動を覺えた。

『不撓二十年』の幕はまだ締らないとみえて、開幕中の、人影のない、明るい、豪華な廊下は妙に深閑としてゐた。それに、彼等の話がかういふ場所にふさはしくない地味な話であつたから、話が途切れると互ひに手持無沙汰になつた。そこで、ふと、石村はかういふ事を思ひ出した。――

二十五六年前の四月の初め、石村が、或る私立大學の文科の學生であつた頃、或る日、同級の朝木柳一郎と、放課後の教室の窓にもたれて、ぼんやり校庭の青葉若葉を眺めてゐると、

「石村君、僕は役者になりたいと思ふんだが、……」と、突然、朝木がいつた。

「大賛成だな、君は、文科もいいが、役者の方がずっと向いてるよ、」と石村は言下にいつた。――

その時から半年程前、神田の或る牛肉屋の二階でクラス會が開かれたことがある。その時、詩吟とか手品とか其他いろいろ學生らしい隠し藝がいくつか出た後で、今度は芝居だといふので幕間が五分程あつた。別に舞臺はなかつたが、廣間の一方を幕で仕切つて舞臺の代りにしたものである。その幕間に、襷がけの女中が三人あらはれ、ほとんど部屋一ぱいに詰まつてゐる學生たちの間に、

一人の女中が「ちよいと失禮いたします、」といひながら、一本の線を引くやうに二尺ぐらゐの幅を明けて行く後から、他の二人の女中がその一本の線に三枚ほどの張板を敷きつめた。そのために、學生たちの席は、中央からやや左寄りの邊で、三枚程つないだ張板で二分された形になつた。やがて、學生たちがただ呆氣に取られてゐるうちに、突然どこかで、「チヨン、チヨン、チヨン、……」と拍子木を打つ音がしたと思ふと、後の隅の襖が明いて、左團次そつくりの清水一角があらはれ、張板の上をガツタガツタと踏みながら、幕の張つてある方に向つて、醉漢の足取で進んで行つた。本物の鬘をかぶり、本物の衣裳をつけ、本物に近い扮装をした清水一角が、堂堂と然も醉漢らしく、張板製の花道を蹣跚と踏んで行く姿に、學生たちは、しばらく、呆氣に取られ、見惚れ、呑まれた形であつたが、やがて、誰かが、

「あッ、朝木だ、」と叫んだ。

やがて、幕があくと、正面右手に、一角の姉のおまさが弟の歸りの遅いことを心配する獨白をしてゐる。そこへ歸つて來た弟はほとんど泥酔に近い状態で、家にはひると直ぐ管を巻きはじめ。姉は、泣きながら、嫌したり諫めたりした擧句、父の位牌で打擲して折檻までしたが、どうしても弟が聞き入れないので、愛想をつかして向うの部屋にはひつてしまふ。さて、一角が高鼻をかいて眠ると間もなく、陣太鼓の音が響きわたる。その音にたちまち目を覺ました一角は、耳に手を當て

「陰に聞え、陽に流るる、あれは正しく山鹿流の陣太鼓ツ、」といふやうな臺詞をいつて飛び起き、すぐ身仕度をして駆け出す。その間に、どういふ筋道があつたか石村はまるで忘れてしまつたが、槍を持った牧山丈左衛門が現れて、はげしい立廻りを演じるところがある。

その清水一角が、張板製の花道を酩酊しながら歩くところ、陣太鼓の音で飛び起き直ぐ身仕度をするところ、はげしい立廻りをするところ、主の急を知り勇躍して駆け出すところ、それから、誇張していふと、左團次流の抒情味と英雄調と悲劇的とを兼ね備へた聲音、——それ等のものが、その時の見物であつた、四半世紀程前の學生たちを、非常に驚かしたのであつた。が、石村は、それ等のものより、文科の一學生である朝木が、日頃顔を合はしてゐる同級生相手とはいへ、或ひは知る人知らぬ人に拘らず、衆人環視の中で、あのやうな事を、少しも臆面なく、むしろ得意になつて演じた事に、別の驚きと興味を感じたのであつた。——

石村が朝木に俳優になることを進めたのはこの清水一角を思ひ出したからである。そこで、

「君は、文學より……俳優の方がずつと天分があると思ふな、」と石村は同じやうな事をくり返して云つた。

すると、これも亦、教室の窓にもたれて、校庭の青葉若葉をながめてゐた朝木は、非常にいひにくさうに、

「實は、僕、つい先達てから、藝術協會にはひつて、その方へも通つてゐるんだ、」といつた。

「藝術協會、……それやいいね。藝術協會にはひつてゐるんなら、君、いつそのこと、その方だけに、文科なんか止めてしまつたらどうだ。一つの事に一所懸命になる方がいいと思ふな。」

「それがね、君、母ちゃんがどうしてもいけないと云ふんだ、……」

清水一角を演じた時は、あのやうな不敵ともいふべき度胸のあつた朝木が、二十一二にもなつて、『母ちゃん』といふのが、初めはちよつと可笑しく思はれたが、すぐ自然に思はれた。

青年時代の朝木にはさういふ所があつた。

「そんなら、お母さんには、兩方へ行つてゐるやうな顔をして、内所で、藝術協會にだけ行くことにしたら、……」

「でも、……、」といつて、朝木は、きまり悪さうな顔をして、特徴のある少し大型の綺麗な齒を見せて、微笑とも何ともつかぬ笑ひ顔をした。——

今、幕間の、人影のない、廊下の長椅子にならんで腰かけてゐる、二十一二歳の青年、新作が、「……文學です、」といつて苦笑のやうな微笑をした顔を見て、石村は、はからず、同じ二十一二歳の青年であつた頃の柳一郎が、「でも……、」といつて微笑とも何ともつかぬ笑ひ顔をしたことを思ひ浮かべ、父の柳一郎の笑ひ顔の方に却つて明るさと希望があり、子の新作の笑ひ顔に却つて控へ目

な所があるのを不思議に思つた。が、今さういふ事を深く考へてゐる餘裕がなかつたので、石村が「君は、芝居といふものに全く興味が無いんですか、」といふと、

「ええ、」と新作は深く頷いた。

「鯉子さんは、……」

「絶対に。」新作としては珍しく實にはつきり答へた。

石村は、新作といひ、新作の言葉をとほして想像される鯉子といひ、「二人とも全く父にも母にも似ない子だな、」と、新作のこの答への言葉を聞いたとき、咄嗟に思つた。

その時、幕が締まつたらしく、一度に方方の小さいドアが明いて、逃げ出すやうに人人が出て來たので、

「ぢやア、」といつて、二人はほとんど同時に立ち上つた。

大正四年の十月頃、石村が東大久保の下宿でごろごろしてゐると、突然、彼の母が上京して、その下宿をたづねて來た。まだ自動車のない時分であつたから、彼女は東京驛から東大久保まで人力車で來た。朝木が清水一角で同級生を驚かした時から二三年後のことである。

母が上京することは略わかつてゐたが、それが餘り突然であつたので、石村は、早速、その晩、喜久井町の阿由葉蘭子をたづねて、「この邊に手頃の家があつたら、すぐ知らしてくれませんか、」と頼んだ。すると、二三日後に、蘭子から通知があつたので、行つてみると、その家は、蘭子の家と通ひとつ隔てた露地の中にあつて、彼女の家まで歩いて二分ぐらゐの距離であつた。

蘭子の家も露地の中にあつたが、その露地は途中に二つの曲り角があつて、彼女の家はその二つ目の曲り角にあつた。露地が變つてゐるやうに、その家も風變りな家であつた。入口に天然木をそのまま使つた木が二本立つてゐた。それは門であつたが、戸が附いてゐなかつた。初めは、この門の右側の木に『阿由葉』といふ表札が出てゐたが、後に、左側の木に『朝木』といふ表札がかけられた。

この『朝木』の表札がかけられる前は、母おもひの柳一郎は、主に若松町の母の家に住んでゐたのであるが、新劇座が生れかかる時分から大勢の人が集まるのに都合のいい部屋があつたので、蘭子の家に住むやうになり、それと同時に『朝木』の表札を出したのである。それで、これから先きは『蘭子の家』と呼ばずに、『朝木の家』といふことにする。

さて、石村は、母と一緒に喜久井町に越して來たものの、初めのうちは極つた仕事がなかつたので、ほとんど毎日ほど朝木の家をたづねた。あの門をはひつて一間ほど行くと、格子戸の入口があ

る。玄關をあがつて右へ行くと、廊下つたひに八疊の座敷に出る。ところが、その頃、肝心の柳一郎が藝術協會の重要な一員として旅興行に出てゐる時が多かつたので、その座敷はほとんど無用同然であつた。そこで、石村は、いつも玄關を上ると、すぐ左側の茶の間にはひつた。さうして、火鉢のある時分はたいいてい蘭子が長火鉢の向側に坐つてゐるので、彼は彼女と長火鉢を挟んで差向ひになる位置に坐つた。

蘭子は、その頃、既に二十ぐらゐであつたが、不斷でも舞臺姿のやうな風をしてゐるので、年より若くは見えただけれど、見世物の娘のごとき妖怪めいた感じがあつた。丸顔ではあるが、眉毛の太い、目の大きい、唇の分厚い、低くはないが寸の短い醜くない程度の獅子鼻の、中高の、——口にいふと道具の粗い、——顔であつた。中で最も美しいのは黒目がちの目であつたが、それが可なり特徴のある戴眼であつた。その上、色が黒かつたので、厚化粧をする習慣があつた。

かういふ蘭子が、持て餘すやうな恰好で赤ん坊を抱きながら、然も何となく満ち足りたやうな顔をして、横坐りに坐つてゐるのを見ると、石村は、三四年前には戀愛を否定する説を吐いたり、二三年前には當時流行してゐたオイケンダのベルグソンの讀破したやうな事を云つたりしたので、思ひ出して、

「男の子は男親に、女の子は女親に似るといふ事を聞いてゐるけど、鯉子さんは君にそっくりです

ね、……子供といふものは可愛いもんですか、」と聞いてみた。

「さあ、可愛いといふより、……面白いもんだわ。」

可愛いといふことを面白いといふ言葉にまぎらしたので、石村がちよつと變な顔をして口を噤んでしまつたのに氣がつくと、蘭子は、すぐ、石村の氣をまぎらすために、

「樂燒の竈が出来たさうですね、」といつた。

「誰に聞いたんです。」

「お母さんに。……市造は香氣で困つて翻してらつしやいましたわ。……しかし、石村さんは昔から香氣なところがありましたね。」

「……樂燒の竈つて、あれは丸田君が勝手に拵へてしまつたやうなものなんです。丸田君の國の家の小作をしてゐた男が、原町でさういふ商賣をしてゐる、五圓を毎月一圓づつ拂へばいい、樂燒用の素燒の水挿や、皿、湯呑、花瓶などは、後でいつ拂つてもいいから、僕がみな持つて来てやる、などと云つて、僕が頼むとも何とも云つてゐないのに、いつの間にか、あの僕の家横の空き地に拵へてしまつたんですよ。」

「まあ、香氣な話やなア。」蘭子はときどき國言葉を出した。

石村の家のある露地は普通の一直線の露地であつたが、石村の家だけその一直線の中途を横には

ひつた袋道の中にあつた。家は、朝木の家と同じ平屋で、間敷も疊敷も同じであつたが、十一圓と八圓の家賃のちがひで、朝木の家より間取も悪く庭も貧弱であつた。ただ、臺所の横に可なり広い空き地があつた。石村の友人の畫家丸田が一人極めて樂燒の竈を据ゑたのはこの空き地である。この空き地は樂燒の竈を据ゑても、片隅に大きな山吹が繁り、家の中を通り抜けなくても入口の左手から土足で行ける便利があつた。

「朝木君が今度歸る時分には、僕も樂燒の燒き方を覚えるでせうから、歸つて來たら、僕もすすめますが、君もせいぜい燒きに來るように進めて下さい……金なんかいりませんよ。君もどうです、むかし二三ヶ月ぐらゐる研究所へ通つた事があるぢやありませんか。」

「繪は駄目。」

「ぢやア、又、哲學でもやつたら、……」

すぐ返事をしないで、蘭子が、下を向いたまま、一分ぐらゐるではあるが、黙つてしまつたので、子の寝顔でも見てゐるのかと思つて、石村も、ちよつと妙な氣持になつて、黙つてしまふと、しばらく経つてから、蘭子は、急に、めづらしく沈んだ調子で、

「石村さん、私、もう一遍、一遍だけでいいから、芝居がしたいの、」といつた。

これには石村も答へる言葉が見つからなかつたので、

「……朝木君が許さないんですか、……」と答へたものの、かういふ座形の言葉はいつてから、石村は氣持が非常に悪かつた。朝木のやうな本職から見れば、妻であるからとか他人であるからといふやうな問題なしに、蘭子を二度と再び舞臺に出すことは反對であるに違ひないし、石村のごとき門外漢が考へても蘭子が舞臺に立つことは恥を晒しに出るやうなものだと思へるからである。

女優としての蘭子は、その時はまだ、藝術協會の無名の女優として、ワイルドの『サロメ』で王の侍女の一人として出たのと、マアテルリンクの『内部』で影の娘として出たのと、二度きりである。然も、二度とも身動きもしない物もない役であつた。が、人生の劇場の女優としての蘭子は、特殊な中のそのまた特殊な劇場では、狭くはあるが相當以上に活躍した。それを歴史に譬へると、蘭子は裏面史のそのまた裏面史の一頁に活躍した女性であつた。彼女とさまざまの關係で交渉のあつた男性の中には謂はゆる名士が随分あつたが、みな特殊な社會特殊な職業の人人であつた。さういふ事で、蘭子は或る一部の方面では可なり有名ではあつたが、その有名は、Famous ではなく、notorious の方であつた。

蘭子は、また、彼女が一生の中で最大の望みであつた女優の才能にも、そのほかいかなる才能にも、恵まれてゐなかつたが、唯ひとつ、一時的ではあるが、ある種の男性たちの目を奪ふ魅力を持つてゐた。これを若し蘭子が天から與へられた魅力とすると、彼女は、一生、この魅力のために非

常な得をし、この魅力のために非常な損をした。それを上邊から見ると、さきに述べた彼女の道具の粗い顔立、彼女の一生の道樂であつた、毒毒しいほどの厚化粧、毛羽毛羽した衣裳などである。

しかしまた、その頃の蘭子は、まだ物質的の苦勞をした事がないからでもあるが、この人がと思ふほど無邪氣なところが随分あつた。殊に、この喜久井町時代の新作や鯉子が生れた二三年程の間は、彼女は一生の中で最も波瀾の少ない時代の一つであつた。

さて、今度は、石村が、蘭子の氣をまぎらすつもりで、ふと朝木のことを思ひ出したので、「朝木君はもう一人前に近い俳優になつてゐる譯でせうが、四五年前、僕が初めて學校で會つた時分とほとんど違ひませんよ、」といふと、その間、彼女の癖で、頭をかしげて首を細かく振り動かしながら、話を聞いてゐた蘭子は

「あの人、お母さんから毎日五拾錢づつ小遣もらうてはりまんね、」といつた。

「毎日五拾錢の小遣は羨ましいな。」

「どうして。煙草錢と電車賃引いたら、仕舞だつしやないか。」

「それが違ふんですよ。その日は仕舞になつても、明日また五拾錢もらへる、といふ事が羨ましいんですよ。」

その頃の石村は本當にそんな風に思つてゐたので、一日五拾錢、とすると、三五十五、月拾五圓

か、と思つたとき、ふと彼は蘭子が毎月ある人から極つて七拾圓づつ貰つてゐるといふ話を思ひ出した。この話は、朝木の家で女中がはりに働いてゐる蘭子の叔母のお銀から石村の母に傳はつたのが、いつとなく、石村の耳にはひつたのである。それを思ひ出すと、月の内の半分か三分の一ぐらゐる旅興行に出てるる柳一郎は、おそらく無報酬であらう、とすると、働いてゐる柳一郎の月給は拾五圓で、働いてゐない蘭子の月給は七拾圓といふことになる、と石村は考へた。すると、いま羨んだ柳一郎が何となく可哀さうな人間のやうに石村には思はれるのであつた。

しかし、かういふのは、諺にいふ『他人の疝氣を頭痛に病む』ことであつた。

ある晩、この茶の間で、長火鉢の向側に柳一郎がすわり、柳一郎と長火鉢を挟んで差し向ひに石村がすわり、柳一郎の傍に蘭子がすわつて、四方山の話に耽つたことがあつた。蘭子は當歳の鯉子を抱いてゐた。部屋の隅に小さい床が敷いてあつて、三歳になる新作が寝てゐた。話がちよつと切れた時、ちやうど寝いつてゐた新作が、片手を動かして、目をぱちぱちさせた。浅い夢でも見たらしく、それは直ぐ止んだが、眞先きにその方を見た蘭子は、

「この子はあなたそつくりね、」といつた。

この言葉は、突然であつたばかりでなく、傍に石村がゐるので、柳一郎は極り悪さと共に蘭子に對してちよつと不快を感じた。そこで、柳一郎は、どちらかといふと幾らか器量の悪い鯉子の方を

願でさして、

「それより、そつちの方がお前と瓜ふたつだよ、」といった。

「でも、目はあなただわ。」

そのうちに鯉子が寝いつたので、蘭子はお銀に鯉子の床を新作の床とならべて敷かせ、鯉子をその小さな床に寝かせた。さうして、手があくど、蘭子はお銀に耳打ちして使に走らせたり、自分は流元へ行つて茶の仕度などをはじめた。

その時の事であつた。石村が用をたして部屋に戻つて來ると、茶の間にひとり残つてゐた柳一郎が、實に眞面目な顔をして、後の壁に自分の横顔をうつしては、右手の横で頸筋を打ちながら、小さい聲で、祈るやうに、

「鼻、高くなれ、鼻、高くなれ、」といつてゐた。

石村は、後には何でもなくなつたが、これを初めて見た時は、かういふ所を見たのが悪いやうな氣がして、しばらく部屋の入口に呆氣にとられて立つてゐた。そこへ、いい按排に、蘭子が來て、石村の方を見て笑ひながら、

「あれ、鼻高くなる呪ひなんですよ、」と云つた。が、石村はそれに附いて笑へなかつた。

それから、石村は茶の間にはひつて一時間ほどゐた。「子供が二人とも寝いりましたから一時間

ほど、」といつて、蘭子が買物に出かけたので、二人の話の邪魔をする者がなくなつた。

その間に、柳一郎がかういふ事をいつた。

彼が今屬してゐる藝術協會は彼の恩師が主宰してゐるものであり、彼はこの劇團によつて俳優生活の第一歩を踏み出したのであるから、この劇團と別れることは情に於いて忍びないが、譯があつて、近いうちに二三の同志と一しよに脱退するかも知れない。さうしたら、日頃から考へてゐた新しい劇團を作りたい。

大體かういふ話をしてから、最後に、柳一郎は、

「石村君、僕は、さういふつもりで、僕自身の劇をやつてみたい。何年かかつてもいいから、これまでにない芝居をやつて見るつもりだ。石村君、今も、君の何某や彼某のやうな小説でない、君自身、君獨得の、これまでになかつた小説を作つて、世に出たまへ、」と云つた。

これは、同じ二十五六歳でも、石村のやうな性質の青年には、齒の浮くやうな言葉に聞えたが、柳一郎のやうなむきな青年には、一所懸命の言葉であつた。現に、石村は、生半可の返事はしてゐたが、彼自身も、自分に就いて云はれた事はそのつもりである。

そのうちに、藝術協會は旅興行を減多にしなくなつたので、柳一郎が喜久井町の家にある日が多くなつた。それがちやうど石村が樂燒の燒き方をやつと覺えた頃であつたから、柳一郎は毎日午後

一時頃になると、石村の家へ樂焼を焼きに行つた。

柳一郎は、花瓶、水差、湯呑、皿、その他、いろいろある中で、皿がもつとも好きであつた。繪が一ばん書き易かつたからである。石村は、中學時代に繪が得意であつたので、繪を書くことに可なり自信を持つてゐるが、朝木が樂焼用の素焼の皿に書く繪を見て、

「君は、役者もうまいが、繪の方もなかなか隅に置けないね。驚いたな。……しかし、それだけの腕がありながら、どうして柳と蛙ばかり書くの、」と聞いた。

すると柳一郎はかういふ話をした。

彼が繪を書くことが好きになつたのは尋常四年のときで、その時は、ほかの學科は少しも勉強しないで、繪ばかり稽古した。それも、ほかの繪は少しも描かずに、一本の柳の木を何度も何度も書きなほして、それを文部省主催の全國小學兒童圖畫習字展覽會に出品した。ところが、その繪が、畏くも、時の皇后陛下、後の昭憲皇太后陛下のお目にとまり、宮内省から献上を仰せつけられた、といふのである。

それから五六日の間、柳一郎は、尋常四年の時と同じ流儀で、ほとんど毎日、樂焼用の皿に、一本の柳のかはりに、柳と蛙の繪ばかり描きつづけた。それで、石村は、柳と蛙の繪を書いた樂焼の皿ばかり溜つたのにも困つたが、もつと困つたのは、樂焼の燃料がつかなくなつた事であつた。

それは、樂焼の燃料の松の木の薪が普通の薪より高いといふことが問題でなく、薪炭屋が月末拂では、松の木の薪どころか、いかなる木の薪も持つて來ないといふ問題であつた。それを知つた朝木は、樂焼を焼きに來たとき、薪代として、五十錢づつ二度寄附した。

その頃、石村は、友人の紹介で、ある賣文業者から、中等學校の國語と英語の参考書を作る仕事を一度に二つ引き受けて來て、まる五日の間、朝から晩まで勉強して二つの参考書を仕上げたところが、それを賣文業者に渡して金を受け取る段になつて、二週間ほど殆ど毎日足を運んだ末に、「これだけしか出版社の方でくれなかつた、」といつて、賣文業者から十圓札一枚もらつた。

これでは、家賃八圓の家に住んでゐる母と子の生活に足りる筈はないので、いつとなしに、石村は、母が行李に詰めて來た物を、一枚二枚と、小出しに出してもらつては、それを金に代へるやうになつた。石村は、その度に七十圓の月收のある蘭子を羨み、ついでに五拾錢の日收のある柳一郎までを羨んだ。

ところが、ある日、石村の母が、お銀に頼まれたといつて、かういふ話をした。

柳一郎が今度いよいよ新劇座を創立する考へが極まつたので、差當り一百圓ぐらゐるの金がある。ところが、これは本當に誰にも内所の話であるが、蘭子は一百圓どころか二百圓ぐらゐるの質種しちぐさは十分持つてゐるけれど、それは、柳一郎の知らない所に隠してある程であるから、出す筈はない。し

かし、どうしてもその一百圓ぐらゐるの金があるので、石村に質屋を紹介してもらひたい。それも、質屋の使にお銀が行くことになつてゐる上に、これからはときどき質屋の世話にならねばならぬから、お銀の名前で通帳をこしらへてもらひたい。それはみな柳一郎から頼まれたのであるが、むづかしいのは質屋の紹介は、石村では困るから、誰か外の人に頼んでくれといふ柳一郎の注文である。ところが、お銀は石村の外にさういふ人は知らないから、柳一郎には絶対に内緒にして、やはり石村に紹介してほしい、と石村の母に頼んだ、といふのである。

仕方がないので、その日の晩、石村は紹介するためにお銀をつれて質屋へ行つた。

しかし、石村はこの時分から次第に朝木の家に行くことが少なくなつた。といふより、朝木の家をたづねる暇がなくなつた。ただ、彼の母がときどき朝木の家へ行くので、柳一郎や蘭子の動靜は聞くともなく耳にはひつた。彼の母が行く時はたいいてい夜であつたが、お銀は二日に一度ぐらゐる石村の母のところへ油を賣りに来た。それは、朝のうちか晝すぎであつた。お銀には朝木の臺所や茶の間でできない話を石村の母にするのが何よりの楽しみであつた。

ある日、めづらしく晝すぎに朝木の家に行つて来た母の話によると、前にほとんど使はなかつた座敷を明けて、そこに大勢の客が來てゐる。座敷の様子は見ないから分らないけれど、門を出入りする客たちの姿が、茶の間の格子から見えるが、役者とも書生ともつかない人たちである。蘭子や

お銀に云はせると、わりに世話はかからないが、朝木のモットオカ、旗揚興行のためか知らないけれど、稽古に夢中になると、氣違ひと間違へるやうな大きな聲を出し、根太がゆるみはしないかと思へるやうな立廻りをするのは、いくら露地の中でも、隣近所とはなれてゐても、やつぱり近所迷惑は近所迷惑である。現に、垣根の傍に、狭い露地をとほる人の邪魔になるほど、人だかりがしてゐるのではないか。

ちやうど其頃から石村の家にも、朝木の家のやうに固まつて來ないが、毎日二三人が多い時は五人の客が來るやうになつた。それは大抵まだ無名の文學書生か畫學生であつた。彼等は、氣違ひめいた聲を出したり、ドタンバタンなどさせる事はないが、そろつて時間の觀念の薄い人たちであつたから、長尻や夜深しを何とも思はなかつたので、隣人たちに迷惑はかけなかつたが、息子の家に來て樂をしたと思つてゐた石村の母に知らぬ間に迷惑をかけた。しかし、彼等の中には氣まぐれな性質の人が多かつたので、そのうちに、戀をしたり、旅に出たり、國に歸つたりする人が出來たので、そのうちに、石村の家に來る人は次第に少なくなつた。さうして、ときどき尋ねて來る二人の友達をのぞいて、石村の家は元のごとく母ひとり子ひとりの家になつた。

その頃の或る日、石村が、いつになく寝坊して、顔を洗ひに流元の方へ歩いてゆくと、臺所の外側の庭で、母とお銀が立ち話をしてゐる聲が聞えたので、仕方なく立ち止まつた。すると、小さい

聲であつたが、ガラス戸のすぐ向側で話してゐるので、その話が手に取るやうに聞えた。

「せめて月に三十圓おましたら、……」

「うち、七十圓でやつてまんに、をばさんとこ、三十圓も、どうしてかかりまんね。」

「……お客さんが多い上に、泊る人があつたり、それに、御飯たべる人が随分おますよつてに……市造と二人だけでしたら、……」

「……をばさん、うちね、今えらい事になつてまんねで、をばさんが、三四日來やはらなかつた間に、……」

それから先きの話は――

朝木は新劇座の旗揚興行に大失敗した。そのために可なりの借金をしたので、この頃、朝木の家には入り替り立ち替り借金取が来る。そこで、毎日、座員が交替で三四人づつ朝木の家詰めに來る。つまり、彼等は借金取の斷り役をするのである。ところが、困つたのは、借金取はうまく歸せても、詰めてゐる座員に食事が出せないことである。それは、石村の家同様、諸商人が月末拂で食料品その他をとどけてくれないからである。ところが、この頃、朝木の家には米の残りがあつてもお數を買ふ金のない事がときどきある。それでも、初めは、朝木の一枚しかない襦袢を質屋に持つて行つて役に立てたが、そのくらの金は直ぐなくなる。それを見かねて、座員の一人は自分の兵兒

帶を賣つて佃煮を買つて來たりした。……」といふやうな話である。――

朝木のかういふ騒動があつた頃から一と月ほど後に、石村の家に、突然、若い女が同棲することになつた。この女は、石村が畫家の友達と一緒に或る色町へ遊びに行つたとき、現れた女であつた。美代といふ名であつた。美代は、石村と會ふ一と月程前、ある少女雑誌に出た石村の少女小説風の童話を讀んで非常に感心した。美代は、初めて石村に會つた時、石村がその童話の作者であることを偶然知つて、それだけで石村に心を引かれるといふやうな女であつた。さうして、その色町でただ二度會つただけで、その男と一緒に住む氣になつて、それを直ぐ實行するやうな女でもあつた。石村も亦さういふ女を浮か浮か家に入れてしまふやうな性質を持つてゐた。

ところが、美代が石村の家に同棲してから半月ほど後、堺（大阪府下）にゐる石村の伯父（石村の母の兄）が、重い病氣にかかり、妹に會ひたいと書いて來たので、石村の母は取る物も取りあへず早速出發した。すると、それから一と月ほど後に、美代は元の生活にかへりたいといひ出した。理由は、簡単にいふと、童話の作者の生活が童話の反對であつたことである。元の生活にかへりたいが、元の町にはかへりたくない、と美代はいつた。結局、石村は、當時もつとも懇意にしてゐた山木といふ出版屋にその事を打ち明け山木が知つてゐる周施業者にたのみ、美代は或る海岸町の色町へ行くことになつた。浪屋といふ家である。

美代は、浪屋に二年間あるといふ約束で、二百圓前借した。美代は、その金をはひると非常に喜んで、まづ著物と帶その他を買った。それから、送別會の印しるしといつて、石村に田原屋の洋食を御馳走した。さうして、定められた日に、美代は勇んで出かけて行つた形であつた。ところが、出がけに、美代は、石村にどうしても送つてくれなければ止めると云ひ出したので、石村は仕方なしに美代を浪屋まで送つて行つた。

これからの事を簡単に述べると、美代は、浪屋に行つてから、三日にあげず、石村に手紙をよこした。然も、行つてから十日目あたりから、『歸りたい』といふ手紙になつた。それから、『山木さんに二百圓借りてそれを持つて迎ひに来てほしい』になり、『……でなかつたら、逃げて行く』になつた。それから後のいきさつも端折はたより、結局、石村は山木に二百圓借りに出かけた。すると、山木は現金はむつかしいが、約束手形ならいつでも書く、といつた。石村は、約束手形といふものが分らなかつたので、友人の専門家に聞くと、相手が商人なら何だが、君を信用する素人なら、といふことであつた。そこで、石村は、山木に約束手形をもらひ、七倍を七倍するほど、躊躇した擧句、蘭子を訪問して、二百圓だけの質種を貸してほしい、と頼んだ。すると、蘭子は、「朝木が絶対に知らないものであるから、」(この意味はその時は石村によく分らなかつたが、なるべく早く返せといふ意味もある)といふ條件で、夜の十一時頃、お銀に持たせる、といつた。――

そんな事までして、石村は、彼としては、空前絶後ともいふべき苦勞をしてこしらへた金を持つて、海岸町の浪屋へ行つたところが「あなたのやうな書生さんには分らないであらうが、金には利息といふものがある、二百五十圓ひた鏝一文缺けても、……」といふ言葉が浪屋の挨拶であつた。

――それから後のいきさつは端折る。――

その時から十日ほど後、石村が、かういふ時を潮しほに、これまでの事は捨石と思ひ、心機一轉、年來の志望であつた文學に専心しようと思つて、神田の裏町の下宿の一室で机に向つてゐると、女中が来て、

「朝木さんといふ方がお見えになりました、」といつた。

「お通ししてくれ、」といつて、待つてゐると、一人かと思つてゐたのが、思ひがけなく、蘭子と一緒にであつたので、石村は、『あの事』がまだそのままになつてゐたのを思ひ出して、ちよつと暗い氣になつた。ところが、朝木が、彼一流のさつぱりした口調で、

「君、お困りだらうが、いつか君に御用立てした物を返してやつてくれないか、」といつた。

一瞬、石村は『おヤツ、』と思つたが、

「あれは、實は濟まない事になつてゐるんだが、……」といひかけると、

「君の困つてゐるのはよく分つてゐる。しかし、僕等も人氣商賣だ。旅に出るのに身を立てる旅に

出るのに、あんまり身窄らしい形かたちもして行けないから、……」と、朝木はそこでちよつと言葉を切つて、「といつて、困つてゐる君に無理をしてもらふのも悪いから……その……いつか約束手形の話があつたが、あれを、君から本屋にたのんで、すぐ貰つてくれないか。……實は、今度、急に旅興行になつたので、先附の約束手形でもいいから貰つてくれると、僕はそれを今度の興業主にたのんで割引してもらふから、」といつた。

そこで、石村は、さつそく山木に電話をかけて、すぐ約束手形を出してもらふことにした。石村が、その返事をして、今日中にとどけると云ふと、朝木は、

「君、困つてゐる時はお互ひだ。僕はかういふ人氣商賣だから、東京では失敗したが向うへ行つて、どんな事ではつと當らないものでもない。そしたら又、このぐらゐのものなら、いつでもお役に立てるよ。どうか、僕の成功を祈つてくれ給へ。僕も君の成功を祈るよ。……さあ、君と僕とどつちが早いかな、……ハハハ」といつて、特徴である少し大形の齒並の揃つた齒を見せて、笑つた。

「いつ立つんだ。」

「まだはつきり分らないが、二三日中だ。京都へ行くんだ。」

朝木は、この言葉のとほり、京阪へ行つてから、『ばつと當つた』のであるが、ここではその事ははぶく。――

その日、石村が、約束手形をもらふために山木をたづねると、山木がかういふ話をした。

かねて山木が出したいと思つてゐる雑誌の費用を一切負擔したいといふ人がある。それは大阪の人で、雑誌の適當な編輯者が見つかったら、その人と一緒に、いろいろ相談をしたいから、來てほしいと云つて來た。「それで、明後日あした、その人に會ひに行くことにして、その御相談に今日お伺ひしようと思つてゐるところでした。つまり、明後日から二日程、あなたと一緒に行つていただくつもりで思つてゐるところが、急に五六日東京を明けられない用事が出來ましたので、……如何どうでせう、『山木の代理』などといふ意味でなく、大阪へ遊びに行くと思つて、そのついでに、その人に會ふ、といふおつもりで、……失禮ですが、旅費の方は、……」といふやうな話であつた。

石村は、『その人』に會ふことぐらゐは我慢するとして、突然、大阪へ行くといふ話は夢のやうな氣がして嬉しかつた。それに、大阪も無論いいが、五月の新緑の奈良や宇治が見られるといふ事に飛び上りたいほど嬉しかつたので、石村は一も二もなく行くことにした。

五月――希望は五月、緑の衣ころもを着て、トロンメロンメロン、トロンメロンメロン、――といふやうな氣持で、石村は、五月の或る夜、東京驛に乗りこんだ。彼は、二等の切符を買へる旅費を山木から貰つて來たが、奈良や宇治へ廻ることを考へて、三等の切符を買つた。

夜の九時半、あいにく雨が降つてゐたので、ブラッド・フォオムも、目の下に見える夜よるの町の光

景も、決して楽しいものとはいへなかつた。さうなると、目の前に、黒黒と、長長と、横たはつてゐる三等急行列車の外觀もするぶん陰氣に見えた。が、詩人風の云ひ方をする、石村の心の中は明るく、石村の心の中には、久しぶりで、誠に久しぶりで、微かではあるが、希望の明りのやうなものが差してゐた。

その時、プラット・フォームの待合室の陰に立つてゐた石村の目に異様に映つたものがある。それは、十人ばかりの男女の一團であるが、此方から見ると陰になつてゐるせもあるかも知れないが、あるひは雨がしよぼしよぼ降つてゐる光景が一そう陰氣に見せるのかも知れないが、といつて、團體見物の群のやうには見えないし、神佛の講中の連中のやうでもなく、いづれにしても身窄らしい男女の一團であるが、……と、見てゐるうちに、石村は、はッと、何かに打たれたやうに、體を堅くした。目を見張つた。

朝木柳一郎がゐるのである。五島新之助もゐるのである。長原半造もゐるのである。あッ、阿由葉蘭子もゐる。野崎染子もゐる。一イ、二ウ、三イ、四オ、五イ、……十一人ッ。

それは、まぎれもなく、新劇座の座員たちである。あれが、二三日、「僕等も人氣商賣だ、旅に出るのに、身を立てる旅に出るのに、あんまり身窄らしい形もして行けないから」といつた朝木か、と思ふと、石村は、何か鼻の中をつウと抜けるやうなものを感じた。

石村は、此方から、順順に、三等車の中に乗りこんで行く黒い人人を、眺め見おくりながら、誇張していふと、戦場に行く軍人を見おくるやうな氣がした。しばらく、彼は茫然として眺めてゐた。が、急に、我れに返つて、さうだ、自分もあの汽車に乗るんだ、と思つて、石村は、大急ぎで、彼等の乗つた車から一つ置いた隣の車に乗りこんだ。――

次ぎの幕間に、石村は、廊下で有坂を見つけたので、

「僕は十二三年前に、ある禮のつもりで、朝木君へ幕を贈つたことがある。……僕はそれを慥か淺草の劇場で見たことを覚えてゐる。ああいふ幕は後でどうするの、」と聞いて見た。

「さあ、あの時分の事はよく知りませんが、あの時分も、大將（註、朝木）が非常に困つて居られたさうですから、賣つてしまはれたでせう。」

石村は、新作に會つた日から、これまで忘れるとなく忘れてゐた朝木柳一郎のことを、妙にときどき思ひ出した。さうして、あのと看以來、朝木が創立した新劇座が東京で開演する時は、大抵見

に行つた。が、朝木の藝の面影を傳へてゐると云はれる、相原や芹沼の芝居を見てゐると、朝木は随分いい後継者を残したと思つて感心する事もあるが、相原と芹沼が朝木の藝を半分づつ受けついでゐるやうなところを、朝木の藝をそのまま思ひ出させるやうなところがあるのを、石村はいつも不満に思つた。さうして、もう少し下手でもいいから、朝木の持つてゐなかつた藝を見せてもよささうなものだ、と思ふのである。さういふ點で、新作と鯉子は、あるひは親より才能は勝れてゐないかも知れないが、また親とは殆ど正反對の性格であるからでもあらうが、親とは何か違つた、新しい、別のものを持つてゐるやうに思はれて、石村は頼もしい氣がするのである。少し故事附けになるが、彼等の家の庭にある檜葉には『あすはひのき』『あすはひのき』（共に『明日は檜にならう』といふ意）といふ別名がある。新作、鯉子、はいふまでもなく、相原、芹沼も、『あすはひのき』になれなれ、『あすはひのき』になれ、と石村はその度毎に思ふのである。――

石村は、新作に會つてから十日ほど後、三年前に死んだ母の墓地の地所でも見つけようかと思つて、散歩かたがた谷中の墓地へ行つた。ところが、かう書くと、嘘のやうになるが、偶然、朝木柳一郎の墓の前に出た。

朝木柳一郎之墓

その裏にまはると、昭和四年四月四日歿と刻まれてある。

石村は、朝木の墓を初めて見つけた時、これまで何度も寫眞の朝木を見たことがあるが、どの寫眞を見ても何ともなかつたのに、この墓を見た時は、何とも云はうやうのない感に打たれた。それを誇張していふと、あまりにセンチメンタルめくが、「朝木、君はこんな石になつてしまつたか」といふ感じであつた。

石村が朝木を最後に見たのは、昭和三年の秋の末、新橋演舞場で『オリムピック』といふ芝居をした時であつた。その時、朝木は優勝する選手の役になつてゐたが、その優勝する選手が、遠くから見てゐる石村が、何か悲しげな人に見えた。

その晩、石村は、朝木を尋ねやうとして樂屋の方へ歩いて行つた時、樂屋の近くで、優勝選手に扮してゐた朝木に會つた。非常に忙しさうであつたので、

「君、元氣がないね、體を大事にしてくれよ、」と石村はいつた。

「さういふ君の顔色も随分よくないよ、大事にしたまへ、」と朝木はいつた。いふと一緒に、石村がびつくりするほど突然、朝木は、石村の手を握つて、痛いほど堅く握つて、強く振つて、さうして足早に舞臺の方へ消えて行つた。――

ところが、石村は、その年の暮から、えたいの知れない病氣にかかり、昭和四年の三月中頃には危篤に近い容態になつた。さうして、いくらか持ち直した時分に、石村は朝木が病院にはひつてる事を病床で知つた。ところが、石村が朝木の病氣を知つて間もなく、朝木は病院で死んだ。そこで、石村は、朝木の告別式に行けない代りに、ラヂオで、朝木の告別式の様子を聞いた。——日比谷公園は、何萬とも知れぬ老若男女で埋められてゐる。全國の朝木ファンから贈られた花環が、焼香場に當てられた音楽堂の中から、數町にわたつて置きならべられ、園外の歩道まで續いてゐる。……と、アナウンサーは傳へた。やがて、田中總理大臣の弔詞を鳩山内閣書記官長が代讀する聲が聞えた。その時、石村はその時から十二三年前に、神田の下宿で、朝木が「僕も君の成功を祈るよ。……さあ、君と僕とどつちが早いか、……」といつた言葉をおぼろに思ひ出した。それから直ぐ、その時から半年程前、「君の顔色もよくないよ、大事にし給へ、」といつていきなり握手した『優勝する選手』朝木が死んで、その告別式が、今、行はれてゐる、といふ事を考へたとき、石村は、或る畫家の友人が、大阪の人で、「死んだら負けや、」といつた事を思ひ出した。「さうだ、なるほど、死んだら負けや、」と石村は思つた。と、その畫家の友人も既に故人であることを思ひ出した。そこで、石村はラヂオを止めた。——

それから、七月中頃、盂蘭盆の一日、石村は、涼しいうちに、人の込まないうちに、と思つて、谷中の墓地へ出かけた。朝木の墓と、その近くにある、彼が生前一度會つて大變いい感じを受けた上田敏の墓に參るつもりであつた。上田敏の墓は五重の塔のすぐ裏側にあるので、順序として、石村が、先きに朝木の墓の方へ歩いて行くと、大通を歩いてゐるうちに、既に朝木の墓の前に墓參をしてゐる人があるのが見えた。「はてナ、」と思ひながら、近づいて行くと、その早朝の墓參者は、新作と鯉子であつた。そこで、石村は、彼等が墓の傍を離れるまで、見えないところで待つことにした。

やがて、新作と鯉子は墓參をすまして何方へ行くかと思つてゐると、歸り道の方へ出ないで、さつさと、かなり早足で、五重の塔の方へ向つて歩いて行つた。彼等が脇目もふらず歩いて行くので、石村は、直ぐその後で、朝木の墓の前に行つた。もう暑くなりかかつてゐたので、彼は直ぐ墓の傍を離れて大通りへ出た。さうして、「あの二人は」と思つて、見ると、彼等は、相變らず早足で、五重の塔の手前の道を右に折れて、すんずん進んで行つた。

石村は、滅多に好奇心といふものを起さない質であるが、この場合、どういふ譯か、妙にこの好奇心のやうなものが頻りに起つて來た。それは、墓參にしては、あまり早急に、用あり氣に、歩いて行くところに、心なき人にも、さう思へば、好奇心を起させるやうなところもあつたが……。

さて、石村が、かなり離れて、彼等の後から歩いて行くと、彼等は、五重の塔の傍から幾らも行かないうちに、右の方にはひつた。さうして、ある墓の前に立ち止まつた。朝木の墓が、あまり大きくはないが、かなり離れた所からも見えるやうに、ちよつと目立つ墓であつた。位置は、大通りを中心にしていふと、大通りを挟んで、朝木の墓と、東西に、ほとんど一直線の所にあつた。

石村は、前の場合と同じやうに、彼等が墓參を済ますのを、見えない所で、待つてゐて、彼等が墓地を離れて行つたところを見計らつて、その墓の前に近づいた。それは、小さい通とほりからちよつと右へ這入つたところにあるが、小さい通を歩いてゐるうちから見える程度の大きさの墓であつた。石村はその墓の前に立つた。

阿由葉蘭子之墓

その横に、

「昭和五年四月十一日」と刻んで、下に、

朝木新作

朝木鯉子

と並べて刻まれ、その下に「建之」と刻まれてあつた。

一 週 間



「……ところで、今、どこにゐるの。」

「東京驛。」

「ぢやあ、こつちへ來ない。」

「今日はちよつと急ぐの。委くわしいことは會つてから……兎に角、すぐ來てくれない。乗車口よ……」

電話室を出ると、彼は大きいそぎで下宿を出た。彼は、その下宿の一間ひとまを仕事部屋に借り、自分の家から朝そこに通つたり、仕事の都合でそこに泊りつづけたりした。彼の仕事は著述であつた。

東京驛で彼を待つてゐる女は、五年ほど前、彼女がある町で藝者をしてゐたとき、初めて知り合つたのであるが、その時、彼等が會つたのは一月ひとつき足らずであつた。それは突然か前から極まつてゐる

たのか、彼女が青島にゐる叔父の家に行くことになつたからである。

彼女は、青島へ行く船からや、青島に著いてからや、船中からは二度、青島に行つてからは月に二三度あるひは一二度、彼に手紙を書いた、變つてゐるのは、その手紙は、巻紙のときでも、洋紙のときでも、文章が半分、繪が半分、占めてゐたことである。その一例をあげると、船中からのひは、『三千代カンパンから海を眺めながら別れた人を思ふところ』とか、『三千代ランカンにもたれて青島に行くことを悲しむ圖』とか、青島に行つてからのものには、『三千代病院のベッドに横たはつて東京の空をながめる圖』とか、『三千代病室の机で手紙を書くところ』とかいふ類である。彼女は三千代といふ自分の名が好きであり自慢であるらしかつた。

その繪入りの手紙がいつとなく絶え、普通の文章だけの手紙になる頃から、次第に戀愛の文句が露骨に書かれ出した。例へば、半年程したら神戸まで歸るかも知れない、その時は神戸と東京のまんなあたりで會ひたいとか、かうして遠く離れてゐる間はせめて三度に一度ぐらゐる手紙の返事をくれとか、いふ類であつた。しかし、彼女が青島で何をしてゐるかといふ事はいつの手紙にも殆ど書かれてなかつた。ただ、自分の病氣はなほつたが、今は叔母の看病をしてゐるとか、實はこの家に養女にもらはれたのだとか、叔父の友達に大きな料理屋をしてゐるものがあつて、その家が面白いからよく遊びに行つてゐるとか、いふ文句がときどき手紙の端に書かれてあつた。その最後の文句

を見た時、彼は彼女がまた藝者になつてゐるのではないかと想像した。

そのうちに、彼女からの手紙が次第に少なくなつて行き、しまひには一月も二月も絶えることがあつたが、絶え絶えには、一年半ばかりつづいた。その最後の手紙に、ある本屋で彼の小説本を見つけたので買つてきて讀んだ、あの小説の中に出てくる或る男が或る女に戀してゐるのに、女の方ではそれを受入れない、それにも拘らず幾ら女が受け入れなくてもその男が女を戀する心は少しも變らない、といふところがある。あの男の心持は今の自分の心持だ、といふ意味の文句があつた。その手紙にも彼は返事を出さなかつた。

それから一年半程たつた或る日、突然、彼女から手紙が來た。手紙の宛て先きは彼が今仕事部屋を借りてゐる下宿である。その下宿に仕事部屋を借りたとき、彼は青島にゐる彼女に通知したからである。その手紙には、昨日東京に歸つたから、お邪魔に上りたい、といふ意味の文句だけが簡單に書かれてあつて、その翌日、彼女は彼の下宿を尋ねて來た。女中に案内されて彼女が彼の部屋にはひつて來た。

「よお。」彼は、彼女が部屋の入口に現れた瞬間、すこし不自然に聞こえる快活な聲でいつた。彼等は、三年前に一月ほど交際した時も、立ち入つた交際はしなかつたが、かういふ男友達同士が使ふやうな言葉を使つてゐたのであるが、彼は、その後すぐ、

「ずるぶん大御無沙汰だね、よく忘れなかつたね、」とつづけた。が、さういひながら、相手の顔をまともに見ることを避けた。相手の彼女も彼の前に坐るまで彼の顔をまともに見なかつた。彼の方が先きに彼女を見て、三年前とは可なり變つたなと思つた。黒つばいお召の著物を著、髪を、當世の七三に割り、當世流に縮らし、金縁の度の強い近眼鏡をかけてゐる姿を一瞥しただけであるが、この女はかういふ風の方が似合ふな、それで商賣した女に見えない程インテリ風だな、と思つた。「大へんな御無沙汰よ。」彼女も、三年前の調子になつて、遠慮なく、彼の前に坐ると一緒に初めて彼の顔をながめて、

「……ちつとも變らないわね。……」

「……いつ歸つたの、」といつてから、彼は昨日の手紙に『昨日歸つた』とあつたのを思ひ出した。

「昨日。」

「今までずつと彼地にゐたの。」

「ええ、」といつてから、「半年ほど前、神戸まで歸つて來たの。」

「今どこにゐるの。」

「兄さんの家、……」ちよつと間をおいて、「私、今、婚約中なの、相手は神戸にゐるの。」かういふ話を普通の話のやうにするのが彼女の特徴であつた。

「それで、半年前に神戸に歸つたの。相手はどんな人。」

「叔父さんの會社にゐる人なの。しかし、その人の方が叔父さんより上役なの。だけど、その人は神戸の本社に勤めてるの。……私、叔父さんと喧嘩してしばらく藝者に出てたことがあるの。」

「ぢやあ、藝者をしてゐた時その人に會つたの。」

「いえ、藝者に出たのはちよつとの間で、その人、私が藝者に出たことは知らないの。その人は、私が叔父さんの家にゐたとき遊びに來て、私を見初めたの。」こんな話も彼女は普通の話と同じやうに話した。「……叔父さん、初めに云つてしまへばいいのに、その人に私が出たことを隠してゐたの。ところが、悪いことは出來ないものね、その人、半月ほど前、彼地へ來たとき、私が出たことを誰かに聞いたらしいの。今度、此方（東京のこと）に來る前に、神戸に寄ると、あなた、彼地でああいふ派手な生活をしてゐて、どうです、家庭が持てますか、なんて聞くの。……それが舌味たらたらなの……」

「君がそんな事を氣にするのはをかしいね。」

「氣にしないけど……さうぢやないの、そんな昔のこと云つたつて仕様がなぢやないの、ね。それが嫌なら、私が生れ變つて來るより仕様がなぢやないの。」

「その人、それで、婚約を破らうといふの。」

「それなら、その方がいいの。……ところが、それが、さうとはつきり云はないで、皮肉なことば
つかり云ふんですもの。……」

「君はその人と結婚する気はあるの。」

「それはあるの。そんな事をかれこれ云ひさへしなければ、別にその人好きといふ譯ないけど、結
婚してもかまはないと思つてるんだけど、……」

ざつとこんな問答の後、彼等は銀座に出かけた。銀座のあるレストランで食事をすましてから、
彼等は戀人同士のやうな恰好で肩をならべながら銀座の歩道を散歩した。さうして、彼は彼女をそ
の兄の家の前までタクシで送つて行つた。彼女の兄の家のすこし手前で自動車を止め、彼女が自動
車から下りて、「さよなら、」をいふために扉の前に立つて此方こちらを向いたとき、

「ぢやあ、また來給へ、來るときには、留守だといけないから、前に電話をかけて、ね、」と彼が
いふと、

「ええ、」彼女はお辭儀をしながら、「ぢやあ、明日また、」といつた。

その翌日、果して彼女は彼を尋ねて來た。その日は、彼女は、十七八歳の女學生風の娘と一緒に
來て、「この人、兄さんのお嫁さんの妹さん、」といつた。

「兄さんのお嫁さんはをかしいなあ、兄さんのお嫁さんは嫂はなさんぢやないの、」と彼がいふと、彼

女は、特徴の齒並のいい白い齒を見せて、

「さうね、ぢやあ、お嫂さんの妹さん、……といふと、私の妹ね、」といつてまた笑つた。その日
は二時間程ゐて、彼女は、

「これから中洲の親類へまはるの、」といつて歸つて行つた。

その翌日、彼女は、電話もかけないで、突然、一人で彼をたづねて來て、「今夜、急に神戸へ行
くことになつたの。叔父さんから電報が來たの。」

「叔父さんも一緒に神戸まで來てたの。……長く行つてるの。」

「そんなに長くないつもりだけど、多分例の結婚問題だらうと思ふの。」

彼はその時は彼女を玄關まで送つて行つて別れた。

それから半年ほど後のある日、彼が、友人と大阪のある町を散歩したとき、土産物を買つてゐる
友人を待つ間、町角のなるべく往來の人の邪魔にならぬ所に立つてゐると、目の前を大阪の人には
珍しい早足で然も兩方とも脊の高い男女が通りかかるのに目を引かれた。といふ方も適當かも知れない。彼ははつと
の女の方が紛まぎれなく三千代であつたのに目を引かれた、といふ方が適當かも知れない。彼ははつと
思つた。彼女が他の男と肩を並べて歩いてゐる事にもはつとしたが、他の男と一緒に歩いてゐると
ころを彼が見たことを彼女に氣づかせたくないといふ心づかひの爲めにもはつとしたのであつた。

彼は、その一人が紛れなく彼女であると見ると共に、本能的にすぐ彼女と一緒に歩いてゐる男を見た。彼女よりその連の男の方をよく見た。さうして、その男が自分より年若く自分より立派な男であることを認めた。しかし、なぜか嫉妬は感じなかつた。それよりも、彼女に自分が『ここに立つてゐる』ことを知られないやうにと願ふ氣持の方が勝つた。

さいはひ、彼の目の前を竝んで歩いて行く手前の方が彼女であつたので、何か話しながら歩いてゐる彼女は、俯向き勝ちに、さうして心持ち相手の男の方に目を向けてゐたので、彼に氣がつかないやうに思へた。その代り、彼に連の男の顔の方がはつきり見えた譯でもあつた。しかし、連の男も、相手の彼女と熱心に話をしながら歩いてゐたので、町角に立つてゐた彼に氣がつく筈はなかつた。一方、彼の方は、逃げ出す譯にも行かないので、びくびくしながら目の前の二人が通り過ぎるのを見送らねばならぬ立場にたつた。しかし、それを見送りながら、彼は、自分と彼女がならんで歩く時も、この二人と殆ど同じ恰好にならび同じ恰好で話すであらう、と思つた。彼がそんな事を考へてゐるうちに二人は最早や一間ほど行き過ぎてしまつた。

彼はほつとした。

ところが、彼がほつと安堵の息をつくると殆ど同時に彼は又はほつとした。この『ほつとした』は前の何層倍かであつた。一間ほど先きへ歩いて行つた二人の中の一人——彼女が、突然こちらを向く

と一緒に、一目散に彼を目がけて走つて來たからである。『ほつとした』、眞金の鼓動が胸を打ち、力のかもつた發音で叫んだ。さうして、彼に口返答する一寸の暇も與へずに彼女はつづけた。

「私が通るのを知つて何故だまつてるの。あんな事すると、却つて私疑られるぢやないの。……」彼女に彼に猶も口をきかせず、「私は先生がここにいらつしやることは知らなかつたんですが、あの人が私に教へてくれたのよ。あの、先生の顔を知つてるのよ。」

こんな風に立つつづけに喋られると、彼は、いはうと思つた言葉をことごとく失つて、ただ、「失敬、失敬」といふ外なかつた。彼女は、そんな言葉を聞いてゐなかつたやうに、

「先生、いつ東京へ歸る。……さう、私も一週間ほどしたら東京へ行くわ。私、一週間ほど前に東京へ行つたの。その時はあの人がるたので行けなかつたの。しかし、今度は一人だから、東京へ歸つたらすぐ訪問していい。」

「いいよ。」彼は、壓迫された形で、何と返事したか分らないくらゐであつた。「しかし、實に君はえらいね、一種の女丈夫だね、一週間のあひだに東京と大阪を脛にかけるなんて、……」といふほどの餘裕が出來た。彼女は、それには答へずに、

「ぢやあ、一週間程したら、ね、」といひ残すと一緒に、來たときと同じ早さで、待つてゐる連の

男の方に向つて走り去つた。

それから一週間後のある日、果して彼女は彼をたづねて來た。尤も、この時は前の日に手紙をよこした。それには、大阪で逢つた話などは少しも書かずに、いきなり、『昨日歸りました、明日午後二時頃うかがひます、』といふほどの簡単な文句が書かれてあつただけであつた。

「この間は失敬、」と彼がにやにや笑ひながら云つたが、彼女はちよつと笑ひ顔で答へただけで、
彼が、

「あの人一緒、」と聞くと、彼女はかぶりを振つて、

「一人、」と答へた。

「今度も兄さんの家、」と彼が聞くと、彼女は又かぶりを振つて、

「今度は中洲の伯母さんのとこ。』

「ずるぶん叔父さんや伯母さんがあるね。』

「青島の叔父さんは死んだお父さんの弟、中洲の叔母さんは死んだお母さんの妹。』そこで、ちよつと息を切つて、「今度は五日間ぐらゐるの、」と彼女はいつた。

さうして、彼女は、その五日間、一日も缺かさず彼を尋ねて來た。その間に、神戸の男が叔父の會社の重役級の役であること、若いのにずるぶん財産を持つてゐること、現金が幾ら程で貯金が幾

ら程で、債券が幾ら程であるか、などと彼に少しも興味のないことを話したが、その時、彼女は、突然ハンドバッグから郵便貯金の通帳を出して、「これだけあるの、』といつて、五百何圓といふ額を見せたのには彼は心から微笑した。最後に、彼女はいよいよ結婚する事になつたと彼に話した。彼等は、その五日間を、今日は銀座、今日は大森海岸、今日は殆ど彼の下宿の部屋、今日は淺草の活動寫眞、今日は神樂坂、といふ風に日を送つたが、いつの日も、『もう一つ手前』のところまで行つて別れた。

その時から一年半たつた。――

彼の自動車は東京驛の乗車口につくと、その自動車が止まつた直ぐその前に、彼女は首を延ばすやうにして待つてゐた。かういふ場合でも彼女は普通の女の相曳とまったく趣きを異にしてゐた。彼等はいつもの通り肩をならべて歩き出した。さうして、丸ビルに這入つた。その或る喫茶店に彼女を待たしておいて、彼は、彼女と逢ふ（何日か分らない）費用をこしらへるために、三階にある或る雜誌社に行つて若干の前借をした。さうして、彼女の待つてゐる喫茶店に歸つて來た。彼女は、彼が彼女の前に腰かけると一しよに、

「今度は今日から一週間ひまになるの、』といつた。

それが彼と一年半ぶりで會つた時の最初の言葉であつた。

「今日から一週間。」彼は心の中で唸つた。

「私、まだ御飯たべてないの、朝早く出かけたもんだから、……」彼女は彼の氣持などには頓著なくつつけた。

「めづらしいね、君が朝早く出かけるなんて、……何處へ行つたんだ。」

「横濱。……叔父さんがね、——知つてゐるでせう、——あの叔父さんが、私が彼方（青島）へ行つて留守中に、十次郎のとこへ行つて、五十圓借りたの。今、私、あの人からお金など借りられたら困るでせう。それで返しに行つたの。」

——彼女と十次郎には次ぎのやうな關係があることを彼女は彼に話した。彼等が一年半ほど前に會つた時のことであつた。——

「私にね、死んだら骨を拾つてほしいといふ人があるのよ、物好きな人もあるもんでせう。」

道を歩いてゐるとき、突然、彼女がこんなことを云ひ出した。その調子に、彼女の不斷のはききした物のいひ振りと違つた、何かいひ溢るやうなところがあつた。言ひ換へると、差向ひではないやうな事で、それを、わざとこんな暮れ方の町を歩いてゐる時を選んで、いひ出したと思は

れるやうな云ひ方であつた。

「なに。」彼はわざと彼女と反對の軽い調子で聞きかへした。「骨を拾ふつて、死んだ時のこと、それは君の骨を拾つてやらうといふのか、君に骨を拾つてくれといふのかい。何にしても、君に骨を拾つてもらふ約束なんか、實にたよりない話だね。」

「私だつてさう思ふわ。」彼女は、まづ彼の冗談に報いておいて、再び先きの云ひにくさうな調子に戻つて、「だけど、本當なの。それが、私に、（と力を入れて、）死んだら骨だけは拾つてほしいといふ男があるの。」

「一體どういふんだい、色つばいやうな、色つばくないやうな話だな。しかし、どうせ君のことだから、何か色つばい……」

「君のことだからはひどいわ。……しかし、まあさういふことなの。……つまり、私をそれ程に思つてくれてゐる人があるといふ事になるの。……」

「やつぱり要領を得ないね、それだけでは、……」彼は、彼女に極まり悪がらせないやうに、彼女に樂に話させるやうに、なるべく軽い調子で、「君に惚れてゐるといふのと、君に骨を拾つてもらふのと、そこにどういふ違ひがあるの。それが分らないよ。……一體、その骨を拾つてほしいといふ男は誰なの、まさか君のハズバンドぢやないだらうな。」

「まさか。……その、相手の人といふのが面白いの。……知ってる、不二の家十次郎といふ役者……」

「あの、死んだ十郎の方の。」

「さう、彼女はちよつと極まり悪さうな顔をして、急に「止さう、」といった。」

「止さなくてもいいぢやないの、君のやうな……」と彼がいひかけると、

「ぢや、話すわ。」その調子は彼女は初めからそれを話したかつたんだなと彼に思はせた。

「私が十次郎を知つたのは、……ハズより、……先生より、ずっと前よ。……十四だつたか、……」
彼女はちよつと首を傾けて、「……十五ぢやない、やつぱり十四の時だわ、甲府でお酌をしてゐた時分だから……」

「え、甲府。おどろいたね、甲府、東京、青島……それから、神戸、大阪……と、つまり、甲州、

東京、青島、上方を膝にかけた譯だね……」

「甲府に、……いま中洲にゐる叔母さんがゐるたの。」彼女は彼の冷かしの言葉など耳に入れずにつづけた。「甲府にゐるたのは二年近くだけど、お酌をしたのは二月ぐらゐだつたわ。その時、甲府に不二の家が來たの、無論、十郎が生きてた時分よ。その時、あの人、……十次郎が二十ぐらゐの時分かしたら、——『道成寺』の芝居で、こんな小つちやな、可愛らしい小坊さんになつて出たのを見て、私、岡惚れしたの。……」

「やつぱり僕の想像どほり色つばい話になつて來たね。」

「でも、その時はそれ切りだつたの。……」彼女は相變らず彼の冷かしなど耳に入れないで、「それから東京に歸つて、芳町でお酌に出て、……さう、その翌年だわ、新橋で、……まだやつぱりお酌の時分よ、偶然あのひとと呼ばれたの、いや、あの人、といふより旦那だわね、片山といふ實業家があるでせう、その人に連れられて來て、その人が毎晩ほど來たもんだから、私も毎晩呼ばれて……つまり、私、あの人に買はれた譯なの。……つまり、あの人があの人旦那に私を買つてもらつたの、まるで品物ね。」

「君もやつぱり好きだつたのか。」

「……さうかも知れないわ。しかし、私よりあの人の方が私を好き、といふより何だか子供のやうに可愛がつてくれたわ。實際、私、まだ子供みたいな氣だつたんですもの……あんまり子供でもなかつたかな。」

「無論、さうだつたらう。」

「ええ、それや私も嫌ひぢやなかつたけど、向うが私を好きつたら大變だつたわ。……止すわ、もう、こんな話……」

「止さなくてもいいよ。」

「ぢやあ、話すわ。……そしてね、どうしても私をお上さんにしたいといふの。うちの叔母さんや母さんにも會つたのよ。母さんも大方承知したの。それが、やつぱり色んな都合でね。……それから、一本になつてからは逢はないわ。……一本になつてからも、あそこ（註、彼に初めて會つた土地を指す）にゐた時も。……唯、青島にゐた時分にちよつと困つたことがあつたの。……さういふ時、あの人に無心をいつてやると、きつと送つてくれたわ。……」

「ぢやあ、君が結婚したりした事を聞いたら怒るだらう。……あんなに怒るよ。……あんなに怒るよ。……結婚、といはずに、譯があつて、かうかう云ふ人に世話になつてゐる、といつてあるの。……」

「ぢやあ、今でもときどき會ふの。」

「彼方から歸つてから一度きり……今の人がそれやむつかしいから、どうしても體が自由にならないといつてあるの。そしたら、ぢやあ、いつまでもお前の好きなやうにして、それで、己のどこへ來たくなつたら、いつでも歸つといふ、己はいつまでも待つてゐるから。……それで、もし己に萬一のことがあつたら、その時は必ず、何處からでも來て、己の骨だけはお前が拾つてくれ、とかういふのよ。……」

「ふん。」

「ざつとかういふ話である。」

「私、今、十次郎に會ふの困るでせう。」彼女はつづけた。「でも、そんなお金ほつとくのはいけな
いと思つて、返しに行つただけど、變だつたわ。十次郎の番頭が上れといふのを、私、玄關で頑
張つて歸つて來たの。……芝居はまだ始まつてゐなかつたから、宿屋へ行つたの。」

彼女は、それだけ云つてしまふと、一大事でも思ひ出したやうに、「私、お腹ぺこぺこなの。こん
などこ落著かないから、どこかへ食べに行かない。今日、私、お金持つてゐるから奢るわ、といふ
なり、彼が、「僕も持つてゐるよ、」といふのを聞き流し、傳票を掴んで立ち上り、さつさと帳場臺の
方へ歩き出した。

彼は徹頭徹尾立ち後れ氣味であつた。

「今どこにゐるの。」彼は道を歩きながら聞いた。

「中洲の叔母さんそこ。叔母さんそこ待合をしてゐるの。一遍そのうち來ない、叔母さんに先生のこ
と話してあるの。」

「ハズと此方にゐる間、その叔母さんの待合にゐるの。」

「待合つても、離になつてゐるから平氣なの。私、今その離に一人ゐるの。ハズ昨日たつたの。」

「ハズその待合から毎日會社に通ふの。」

「東京は支店だから、毎日でなくてもいいんだけど、几帳面な人だから、毎朝私の寝てるうちに
出て行くわ。だから、此方（註、東京のこと）に来ると氣樂だわ、大阪とちがつて。」

「大阪はそんなに辛い（辛い）の、いつか逢つた時は大變樂しさうだつたぢやないか。」

「あ、あの時、」といった切り、彼女は彼女の話をすすめた。「大阪では先生みたいに知つてる人が
ないでせう。親類もゐないでせう。それに、會社が神戸にあるので、あの人が朝出て夕方歸つて來
る間宿屋に一人ゐるんだから退屈で仕様がないうでせう。だから、私、いつもお晝の御飯は三越とか
高島屋とかへ行つて食べて來るの、その代り、大阪中のデパートの食堂は大抵お馴染になつたわ。」

そんな話を交（か）し合（あ）つてゐるうちに、彼等は日本橋の交叉點のところまで來た。そこに、彼等が以
前電話で打合して待合はしたことがある喫茶店兼料理店があつた。そこで、遅い晝飯をかれこれ一
時間近くかかつて食べた。食べをはつて、珈琲を飲んでるとき、彼女は、話半ばに腕時計を見て、
「あッ、遅くなつた、」と叫んで腰を浮かした。聞くと、叔母と芝居を見に行く約束がしてあるのを
忘れてゐたといつて、彼女は急にあわて出した。彼女は、別れ際に、「明日は四時頃に……」とい
つた。彼が聞き返す間（ま）がないうちに、彼女は飛鳥のやうに自動車に乗りこんでしまつた。――

翌日の午後五時頃、「遅くなつたわ、」といひながら勢よく彼女が彼の部屋に這入つて來たとき、

先客があつた。それは、久しぶりで彼を尋ねて來た友人であるが、悪（わる）強（じやう）ひする癖があるので、彼の
方で避けてゐた友人であつた。その時も、彼は彼女が來ることを豫想して、その友人が飯を食ひに
行かうといふのを斷つてゐた時であつた。この友人が飯を食ひに行かうといふのは酒を飲みに行か
うといふ事であつたので、酒の嫌ひな彼が極力ことわつてゐた時であつた。――つまり、時が悪（わる）か
つたのであつた。そこへ、女客（如何にも親しさに見える）が現れたので、友人が一層こぢれ出
したので、氣の弱い彼は、「では、後から、……もう一二時間したら、君のゐる所へ行かう、」と約
束して、やつと友人を歸した。

友人の姿が消えると殆ど同時に、

「先生、本當にいらつしやるの。」彼女は彼が初めて見る眞剣な顔で詰問するやうにいつた。

「あの人のいらつしやるところは屹度藝者の來る家でせう。私、今日は叔母さんに先生を連れて來
るといつて來たの。……私、先生と一緒に御飯をいただくつもりで來たの。」

「ぢや、すぐ出かけよう。この近くにちよつと旨い鰻屋があるから。鰻食ふ？」

彼女は立ち上つた。が、なぜか這入つて來た時の元氣がなかつた。その元氣のなさは、彼女と知
り合つて五年の間に、五年前初めて彼女に會つた頃、彼女が彼に示した色つばさを思ひ出させた。

――それはかういふ場面である。――

五年前、ある町で彼女が藝者をしてゐたとき、彼と彼女が一月たらず會つてゐたとき、（その間、彼はいつも友達連であつたので彼女と二人切りで會つたことは一度もなかつた。）ある晩、不斷のとほり、二三人の友達と一緒に遊びに来てゐた彼を、彼女は、廊下に呼び出して、

「私、もしかすると、近いうちに、遠い所へ行かなければならないの、」と彼が初めて見た甘へるやうな品をしていつた。このとき、彼は初めて彼女の眞面目な一面を見たやうに思つた。といふのは、多くの藝者達の中でも、彼女は、圖抜けたお饒舌で、快活で、どこか女學生らしい無邪氣でお轉婆なところさへあつた、それでゐて、何某といふ力士の後を追駈けてゐるといふ評判もあつた、現に、彼は、その數日前、彼女がちよん鬚に結つた黒紋附の大男が階段を上つて行く後から追ふやうに駈け上つて行く姿を見たこともあつた、——さういふ彼女が、この時は、今いつたやうな品をして、子供のやうな、悲しさうな、また恥かしさうな、彼が初めて見る色つばい表情をしたからである。そこで、彼も、幾らかセンチメンタルな氣持になつて、

「遠い所へなんか行かない方がいいな。……遠い所つて、何處。藝者を止めて、いい人とでも、」と彼が聞くと、

「そんなぢやないの、」と、これも彼が初めて聞くしほらしい聲で、「それについて、先生と二人きりで一度お話したいことがあるの。」と、いよいよ眞面目な、幾分涙ぐんだ目をしてつづけた。か

ういふ話をする時の顔を見ると、その頃まだ十八歳で、色の白い木目の細かい、鼻が細く高過ぎるのが瑕であるが、まづ美しい女であつたから、可愛らしく又いぢらしく見えた。「先生とお話したら、行かないで済むかも知れないの。ね、……だから、一人で明日来てくれない。」

しかし、氣の弱い彼は、一人で彼女に會ひに行く勇氣（それに戀愛らしいものを感じてゐなかつたので、興味）もなかつたので、相變らず友達と一緒に出かけた。すると、その日から四五日後のある晩、彼女は、また彼を廊下に呼び出して、

「いよいよ、私、近いうちにお別れしなければならぬわ、」と、この前より一そう思ひ餘つた悲しさうな顔をして云つた。

「僕、一人で來よう來ようと思ひながら、いつも連が出来るもんだから……」彼は苦しい辯解をしながら、「ぢやあ、もう一人でも君に會ひに来て駄目？」

「ええ、……もうどうしても行かなければならないことになつたの。初め、神戸の叔父の所へ行つて、それから叔父と一緒に青島へ行くの。」

「青島か……なるほど、遠いね、」

「もう明後日か、明後日ぐらゐるよ、私のゐなくなるのは。……ね、だから、是非それまでに一ぺん來て下さいな。」

「さうなるといよいよ極まりが悪いな。」

さういひながら、その後も、何か後目痛^{うしろめだ}い気がしたりして、結局、彼がいつものやうに友達と行くことになつたりするうちに、ある晩、彼女は到頭その町から消えてしまつた。それで、一時、彼女の行方について、彼に疑^{うたが}ひがかかつた程であつた、といふのは、彼女は抱主の家でもしじゆう彼の名をいひ暮してゐたからである。そのとき、彼女の朋輩の一人が彼の潔白を證明してくれて云ふには、實はこの十日程前から、彼女は、彼に手紙を出すのだといつて、一日に一度づつ、手紙を書いて切手を張つていつでも出せるやうになつてゐるのを、その女の所へ毎日持つて来ては、出さうか出すまいかと相談したり思案したりした末に、結局、出さずに預けて行つたのが八つ溜つてゐる、といふ話であつた。それで、彼等の間の嫌疑が晴れたのであつた。

——つまり、かういふ挿話があつたのである。——

鰻屋へ行く道々、彼女は、これも彼に今まで話したことのない話——彼と初めて知り合つた町に行く前に他の町で藝者をしてゐた時分の話——それは或る俳優と戀に落ちた話——それも彼女が彼女の口から初めて聞くの情緒纏綿たる話——然も可なり男女の間の立ち入つた交際の話などをした。

その話し方は、以前に不二の家十次郎の話をする時に、暮れ方の町を歩きながら話した時と似てゐるが、あの時は互ひの顔が見合はすと見得る程度の暮れ方あるひは彼誰時^{かたれどき}であつたが、この時

は、まつたくの夜で然も細道を肩と肩とが擦れ合ふぐらゐに並んで歩いてゐたので、彼は、彼女の戀物語の話の筋より、彼女の烈しい息使ひが聞えるやうな気がした。

しかし、明るい鰻屋の座敷で差し向ひになると、彼等はまた不斷の男友達に似た會話にもどつた。その時の會話で、彼がときどき先きに友人に約束した言葉が氣になつて、彼の答へがちぐはくになると、彼女は、女性のみが持つてゐる敏感さで、

「先生、あの事を考へてゐるんでせう」といつた。敏感の點では人に負けないつもりのも、咄嗟には彼女の問ひの意味が分りかねて、「あの事つて？」と問ひ返すと一緒に、「ああ、あれか、とすぐ氣がついたが、それと殆ど同時に、「先きのお友達とのお約束の事を考へてゐるんでせう？」と彼女はいつた。さういつた彼女の目が青く光つたので、彼は考へてゐた友人の所へ行くことを思ひ切つた。さうして、昨日といひ、今日といひ、今度はことごとく立ち後れだ、と彼は思つた。

鰻屋を出てから、電車道ではあるが、片側が學校、他の側が仕舞屋町で、かなり大通の道を彼等は通つた。電車は稀にしか通らず、街燈も少なかつたので、彼等は學校側の人道を戀愛する者のやうに寄り添うて歩いた。しかし、あまり寄り添ひ過ぎると離れて歩いた。道はゆるい坂になつてゐるが、彼等は申し合はしたやうにゆるゆる歩いた。そのわりに口数は少なかつた。學校の塀の切れ目——町角——になつてゐる所に、繁昌しないらしい自働電話のボックスがしょんぼりと立つてゐた

のを見つけると、彼は本能的に立ち止まった。竝んで歩いてゐた彼女も殆ど同時に立ち止まった。「電話かけんの？」鋭い聲であつた。顔を見なかつたが、彼は今先き鰻屋で見た彼女の青く光る目を感じた。それと一緒に彼はいつた。

「止さう。」

彼が歩き出すと彼女も歩き出した。初めのうち、しばらくの間、彼等は離れて歩いたが、だんだん両方から距離を狭めて行つた。しかし、二人とも物をいはなかつた。やがて、明るい町角に出たとき、

「叔母さんどこへ行かない。」

「行かう。」

彼等は自動車に乗つた。

目の前に見るまで、彼は彼女の叔母の顔形を想像したこともなく想像する隙もなかつたが、彼女に紹介されたとき、彼女が瘦形である反對に叔母は太り形であること、彼女が細面である反對に叔母は豊頬であること、假りに二人を美人と見立てると、まったく型の違つた美人であることに彼は或る興味を感じた。また、老若の違ひからでもあるか、(否、老若の違ひでなく、)彼女は初な質、彼女の叔母は生れながらの海千山千の質のやうに思はれた。しかし、海千山千の方が従の附合ひに

は却つて便利であるかも知れない、などとも考へたり思つたりする興味を彼はこの叔母に持たなかつた。一口にいふと、餘りいい感じがしなかつたといふのが最も事實に近い。彼が、彼女の叔母の家で最も興味を感じたのは、彼に初めての水際の花街と、その花街の一軒である彼女の叔母の家の彼女の自慢の離の窓からの眺望であつた。彼があまり好感の持てなかつたのは、この部屋に坐つてるとき、彼女の叔母が「どうぞ先生のお友達の方を御紹介下さい、」といふ意味の言葉をいつたことであつた。別れ際に、彼女は、叔母のゐない所で、「明日も亦今日の時間ぐらゐに、」といつた。彼が、その晩、下宿に歸つたのは十二時に近かつた。

彼は、下宿に歸る道の自動車の中で、残りの五日間の彼女との相曳のプランを考へてみたが、やつと翌日のプランが立つたとき、自動車は彼の下宿の前に著いた。

その翌日の午後五時頃、さすがの彼女も、今度はいきなり來ないで、電話をかけて來た。何某町の交差点で待つてゐるといふので、彼の方から出かけて行つて、前の晩立てたプランに依つて、彼は、神田の行きつけのレストランで洋食の夕飯をすまして、彼女と銀座を十一時頃まで散歩した。その神田のレストランで、彼女が小用に立つたとき、馴染の女給が彼の傍に來て、「あの方、奥さんでせう、綺麗な方ですね、」といつた。「あの方、奥さんでせう、」といつたのは、これまで彼は數

度そのレストランに彼の愛人である藝者と一緒に来たことがあるのと、彼女が『奥さん』らしい形をしてゐたからである。

彼は、彼女を、その時まで、それほど綺麗と思つてゐなかつた上に、戀愛の氣持を抱いてゐなかつたので、愛人の女の方を好いてゐたのであるが、女給にさう云はれて、彼女を見直して見ると、なるほど、綺麗な女かな、と思ひかへして見た。そのために、その後で銀座を散歩したとき、引け目を感じないで、暗い道を歩く時のやうに、肩をならべて夫婦の形で話しながら歩いた。

その晩は、彼女の希望で、中洲の何某橋の袂まで彼女を自動車で送り、彼は下宿に歸つた。自動車を下りる前に、「明日は二時頃行つていい？」と彼女はいつた。彼は、頷いて、自動車の窓から脊の高い彼女がさつさと歩いて行く少しも悪びれない後姿を見て、また、どうも今度はことごとく立ち後れだな、と考へた。さうして、下宿へ歸るまで、自動車の中で、あと四日のプランを今日こそすつかり考へようと思つたが、翌日のプランを立てると、後はまた明日のことと考へなほした。その翌日の一時頃、彼が、連日の睡眠不足で遅く目をさまし、下宿の風呂がまだ沸いてなかつたので、近所の銭湯へ行つて歸つて來ると、彼女は、「一時間早かつた、」と云ひながら、もう女中の案内なしに、彼の部屋に機嫌のいい顔をして這入つて來た。機嫌のいい、といふより、笑ふと目が波形になる特長があつた、その特長のある笑ひ顔で這入つて來たのである。かういふ時は、雙方が

色氣を隠す爲に快活を装ふのでなく、雙方とも自然に快活になつた。その勢ひで、淺草へ活動寫眞を見に行くプランを變へて、彼等は郊外の鑛泉旅館へドライブした。彼が電車でいいといふのを、「今日彼方（青島のこと）から爲替が替つたの、私、奢るから、」といふ事になつたのである。

旅館から直ぐ近くの海岸へ二人で散歩に行つて歸つて來ると、さういふ旅館の習慣どほり、部屋一ぱいに二つの床がならべて敷かれてあつた。

「おお、やつてるな。」彼がてれ隠しにいふと、

「さては、」と彼女は、芝居のセリフのやうな云ひ方で、五年前に彼が見たところの剽輕な表情をして、「二人の仲を怪しいと見たね、」といつて、目が波形になる笑ひ方で笑つた。

そんなことを云ひながら、彼等は、その蒲團の上に、掛蒲團をまくらないで、子供のやうに腹這ひになつて、腕相撲などして時間をつぶした。

この日は、彼女が彼を下宿の傍まで自動車で送つて來た。その歸りの自動車の中で、彼女は、「明日は洋服を着て行つてもいい？。洋服のときは鼻眼鏡をかけるのよ。それでもいい？」といつた。彼は、去り行く彼女の自動車を見おくりながら、「洋服に鼻眼鏡か、……明日はどうしようか、」と考へた。さうして別れ際に、彼女が「明日は六時頃になるかも知れないわ。兄嫁の妹が來るから、」といつた事を思ひ出して、指をくりながら、「今日で四日目だから、後三日か、」と彼は獨言ちた。

その翌日の六時半頃、彼女は果して洋装鼻眼鏡で彼の部屋に現れた。さうして、
「遅かつたでせう、兄嫁と妹と一緒にやつて来たの。そこへ、五時頃、兄がたづねて来たので、一
緒に御飯を食べたりしたもんだから、……」といった

そこで、彼の部屋で一時間ばかり話をして外に出ると、八時近かつたので、彼等は切通坂を下り
て上野公園の方へ歩いて行つた。途中でカフェエに這入つて一服したが、公園の中をぐるぐる散
歩したので、彼等は仕舞には物をいふのが大儀になつたくらる疲れた。公園を出て山下まで来た時
は、彼は何故か彼女にひどく氣の毒になつた。いつもと反對に、その晩の彼女は何か非常に物足り
ない氣持に襲はれてゐるやうに見えた。それは、洋装の姿のせりばかりでなく、心から萎れてゐる
やうに見えた。

彼は彼女が斷るのを強ひて自動車で中洲のいつもの何某橋の袂まで送つた。その車の中で、彼の
方から、「明日は何處か坐るところへ行かうね」と云ふと、彼女は黙つてうなづいた。

その翌日は、昨日と打つて變つて、彼女は何か思ひ屈した恰好で彼を訪問して来た。彼女を迎へ
た彼は、昨夜の不機嫌の連続かと思つて、

「どうしたの、變に元氣がないぢやないの、」といふ、その彼の言葉もわざと元氣をつけたやうな

云ひ方であつた。

「……」彼女は、返事をしないで、いつも坐る場所になつてゐる所に坐つた。

彼が元氣がなかつたのは五日間連続の相曳の疲労で、彼女が元氣がなかつた、といふより、思ひ
屈してゐたのは一週間が後一日になつた焦慮からであつた。焦慮といふと、彼も一種の焦慮を感じ
た。それは一體どうしたらいいのか、といふ彼自身の弱氣と不得要領から来る焦慮であつた。この
二つの違つた心の焦慮が二人を譯わからずに憂鬱にした。

その憂鬱のために、彼等は、時間が來ても餘り空腹を感じなかつたので、外に出て何か食べるの
も億劫であるし、といつて下宿の部屋で井を取つて食べるのはじまらないし、といふので、兎に
角、外に出ることにした。外の空氣は彼等の鬱屈をいくらか晴らした。

「鯨でも食はうか、」と彼がいくらか晴れた氣持でいふと、

「ええ、食べませう、」と彼女もいくらか晴れた氣持で答へた。

鯨はいくらか晴れた彼等の鬱屈した氣持をほとんど不斷の氣持にまで取り戻す役をした。

「約束どほり今日は坐る所へ行かうか。」

彼は、何の下心もなかつたが、これだけの言葉をいふのに、二十歳の青年に歸つたやうに、五分
ぐらゐるかかつた。それは『坐る所』といふ言葉は、この場合『待合』といふ意味である事が、それ

をいふ彼にも、それを聞く彼女にも、すぐ通じる事を彼は考へたからである。その『坐る所』へ二人で行けばどんな事になるであらうといふ豫想が彼に恐ろしかつたからでもある。彼は、それをいつてから、腋の下から汗が出るのが、暗がりの中で顔が火照るのが、感じられた。しかし、

「……」彼女が返事した聲は聞えなかつたが、彼のその言葉と一緒に竝んで歩いてゐる彼女の足が急に早くなつたのが、彼の心を勇気づけた。早足になると、彼女は脊が高かつたから、男並の早さになつたので、彼女が早足になると、彼も釣られて足を早めない譯に行かなかつた。

鮪屋から彼の目ざす家までは電車の停留所で數へると三つしかなかつたので、途中から早足になつた彼等は、十五分あまりで彼の謂はゆる『坐る所』についた。この『坐る所』に彼は半年ほど前に幾度か来たことがあつたが、酒を嗜まない代り多少音曲と三絃の心得があつた彼は、その心得の練習に来るといふ程度で、いはゆる『四疊半』の部屋に這入つたことがなかつたので、彼が彼女を連れてその『坐る所』の家に行くと、その家のお上は、不思議な顔をして、いつものとほり、彼等を普通の座敷に通して、茶と菓子を運んで来て、座をはづしてしまつた。

二人きりになると、彼等は變に堅くなつてしまつた。いつか郊外の鑛泉宿に行つた時は、晝間であつたから、腕相撲などをして茶を濁せたが、なまじ夜であつたために却つて中途半端な氣持になつてしまつた。さうして、その家に小一時間程ゐるが、その間、彼等は、互ひに妙な氣持になり、

變に落著かない氣持になつて、差し向ひに坐つて見たり、窓敷居にならんで腰かけて見たり、一人が坐つてゐる片方が腰かけたり。まったく手持無沙汰の状態に落入つてしまつた。

結局、その家を出てから後は、彼等は昨日と同じ（昨夜とちがふのは、昨日は彼女一人だけであつたのが今日は彼も）何か非常に物足りない氣持に襲はれた。

昨日と同じやうに彼は中洲の何某橋の袂まで彼女を自動車で送つて行つた。別れしなに、自動車を下りしなに、彼女は、突然、彼の手を、彼が思はず「痛ッ、」と叫びかけたほど強く握つた。思はず「痛ッ、」と叫びさうになつた拍子に、彼がふと彼女の顔を見ると、彼女の兩眼に涙が一ぱい溜つてゐた。

その晩、不斷は枕に頭をつけると一緒に眠つてしまふほど寝付きのいい彼が、一時間ほど眠れなかつた。もう一日残つてゐる『明日』のプランがどうしてもうまく立たない、それは『明日會ふとあぶない』といふ氣がするからでもあつた。もう一つは、これは彼の決心次第でどうにもなる事であつたが、彼女に會つた第一日の日に或る雑誌社に前借した金が『明日』の相曳の費用に足りない程に残り少なくなつたからでもあつた。しかし、そんな煩悶をしてゐるうちに、寝付きのいい彼はいつか眠つてしまつた。その代り、目ざとい彼は翌朝六時頃に目を覺ました。

目を覺ますと一緒に、待ち構へてゐるやうに、昨夜の『明日會ふとあぶない』が『今日會ふとあ

ぶない』に變つただけで、やはり同じ不安が押し寄せて來た。然も、その不安は次第に濃くなつて來た。さうして、『今日會ふとあぶない』と考へると、彼は堪らなくなつて來た。そこで、彼は、寢床から飛び起きて机に向ひ、『今日お目にかかる筈のところ急用が出來てお目にかかれないのは至極残念』といふ程の意味を、彼女がそれを見て失望せぬやう、それに彼女が嫌ひでないといふ事を（成るべく好きだと讀めるやうに）仄して、可なり長長と手紙に書き綴り、書き終ると、直ぐそれを速達で出した。速達を出して歸つて來ると、彼は、古い言葉でいふと、枕を高くして寢た。さうして、晝近くまで眠つたが、それから後、その日いち日、何か氣が落著かなかつた。胸を撫で下ろした氣持と、彼女を如何に失望させたかといふ心配——そんな言葉では云ひ現せない煩悶——とで、彼は、それから、ずつと、物を書くことも、本を讀むことも、氣を變へて散歩に出ることも、何も手につかなかつた。何か謂はゆる蟲が知らすともいふやうな氣が彼を落著かせなかつたのである。

果して、その日の夕方、明りのつき始める頃、突然、彼の部屋の戸が外から勢よく開かれて、轉げこむやうに彼女が飛びこんで來た。見ると、髪を振り亂し、目を眞赤に泣き腫らしてゐた。彼女は、さういふ姿で彼の前に坐り、その泣き腫した目で彼を睨むやうに見ると一緒にわつと泣き出した。

「どうしたの。」

「夕方、突然ハズが歸つて來て、……」そこで泣き、「先生の、あのお手紙を見つけられ……」そこで泣き、「これ、……」と彼の前に袖を捲つた手を出して見せて泣いた。見ると、引搔傷の跡が無數にあつて、中にまだ血の滲み出てるところが方方にあつた。

「それやひどいね。」

「大變な焼餅屋なの、……」さういつて、彼女は泣き笑ひになつた。

「それで逃げて來たの、ここへ來たことは分つてるだらう。」

彼女はうなづいた。さうしてまた泣き出した。

「それや大變だ、それやまづい。ここにゐたら直ぐつかまるから、兎に角、大久保の兄さんここへ行つたら、どう。」

彼女はかぶりを振つた。

「兎に角、後でもう一度來るにしても、一度どこかへ行つてる方がいい。」

そこで、彼女は、一そう烈しく泣き出したが、彼が靜かに道理を説いて聞かすと、やつと立ち上つた。彼も一緒に立ち上つた。彼は彼女の肩を撫でながら彼女を部屋の戸口まで送つた。

彼女の姿が消えると、彼は、一たん机の前に坐つたが、一分間とぢつとしてゐられなかつた。立ち上つて部屋の中を歩きまはつた。ちよつとの間、考へる能力を失つた。いつか會つた彼女の叔母

の顔を思ひ出さうとしたが、思ひ出せなかつた。しかし、その顔を思ひ出せない彼女の叔母を思ひ出すと、彼はぞくぞくするほど譯わからずに恐くなつた。彼は、夢中で帽子を被り、ステッキを持つて外へ出た。下宿の前から二三歩行つた曲り角で、血相變へて早足に進んで来る彼女の叔母と出会つた。二人とも棒立ちになつた。二人とも一度に顔色を變へた。

「三千代は……」

「三千代さんは……來ましたが、……歸りました、……」

「本當ですか。」

「本當です……」

「ぢや。」彼女の叔母は挨拶もしないで、傍に待たしてあつた自動車に乗つた。

彼は、自動車が走り出してからも、暫くぼんやり立ちすくんでゐた。が、すぐ歩き出した。何處へ行つていいか分らなかつた。自分の家へ歸らうかと思つた。友達の家へ行かうかと思つた。再び考へる能力がなくなつて、夢中で歩きまた歩いた。夢中で電車に乗つた。電車の中で、乗つた所から一番近い友人の家を思ひついて、その友人の町まで切符を切つてもらつた。その友人は留守であつた。彼はまた歩き出した。少しづつ考へる能力が出て來た。兎に角、下宿へ歸つた方がいいと思つた。

しかし、下宿の部屋に歸つて見ると、やつぱり落著かなかつた。が、思ひ切つて、机の前に、なるべく氣を落著けて、坐つて見た。だんだん考へる能力が回復して來た。度胸を据ゑて本でも讀むことにした。

本を開いて一二ページ讀んだとき、電話がかかつて來た。彼女か、と思つて電話口へ出て、

「もしもし、」といふと、聞き慣れぬ太い女の聲が「先生ですか、」と答めるやうに響いた。

「叔母さんですか。」彼も答めるやうに叫んだ。

「どうしてお歸りになつたんです。今先きお出かけになつたばかりぢやありませんか。」相手は詩るやうにいつた。

「えッ。」彼は、咄嗟に、相手が彼が歸つてゐるのを三千代と一緒にだと思つてゐるらしい、と考へついたので、「僕は用事が出來たから歸つて來たんです。……えッ、……そんなにお疑ひになるんならかうしませう、もし三千代さんからここへ電話がかかつて來たら、その居所を聞いて、一度電話を切つて、それをあなたの所へお知らせしませう……それならいいせう。」

さすがの海千山千の相手も即座に納得した。

彼は、ほつとして自分の部屋に歸り、さつきまで讀みかけた本を開いた。しかし、一二行讀んで見たが、やはり何か落著かなかつた。と、その時、慌しく走つて來た女中が部屋の外から彼の名を

呼んで、「お電話、」と傳へた。彼の頭はまた考へる能力を少し失ひかけて來た。

「もしもし、」と彼が何氣なしに極りの言葉をいふと、

「あの……」といふ聲で、彼の胸は忽ち動悸を打ち出した。彼女であつた。彼女の聲は彼に返事を
する暇を與へなかつた。

「私、今、東京驛にゐるの。乗車口よ。すぐ來てくれない。」

「ああ……」これはまだ言葉にはなつてゐなかつたのであるが、彼女はこの聲を承諾と認めたらしく、

「ぢやあ、直ぐね、」といつた。

電話はそれで切れた。

彼は、ちよつとの間、呆然とした。が、すぐ、彼の頭は、今度は急速度を以て、考へる能力を回復した。彼は、自分の部屋に戻らず、一分間の後、先きに彼女の叔母から聞いておいた電話番号を呼び出した。すぐ電話口に出たのは彼女の叔母であつた。彼は、はつきりした言葉で、

「いま三千代さんから電話がかかりました。東京驛の乗車口にゐるさうです。あの人は、乗車口と
いつたら、きつと乗車口の入口に廣場の方を向いて立つてゐますから、あの人をつかまへるなら、
改札口の方から行つた方がいいと思ひます、」といつた。

電話を切つて自分の部屋に戻り、机の前に坐つた彼は、女なら泣き崩れるといふところであるが、ほつと溜息をついたまま、しばらく目は窓を見詰めてゐた。さうして、心の中で、『裏切者』とか『卑怯者』とかいふ言葉を自分に向けて叫んでゐたが、『しかし、自分のしたことは間違つてゐない。自分のした事は、自分の爲めでもあるが、むしろ彼女の爲め、彼女の爲より、彼女の一族の爲めの事だ、』と考へた。といふのは、彼女の夫になつてゐるところの（籍を入れたり籍を抜いたりしてゐるが、）謂はゆるハズは、當時、彼女の叔母、彼女の母、彼女の兄等の面倒まで見てゐたことを、彼は彼女から聞いてゐるからである。

かう考へて、彼は、一時安心したが、安心する後から、東京驛の乗車口で、彼が來るか來るか
待ち兼ねてゐる彼女が、後から來た追手につかまつてゐる姿、その瞬間、あつ彼が裏切つたなと恨みに思ふ彼女の氣持、今の先き見た髪を振り亂し目を泣き腫しながら袖を捲つて手に負つた無数の引搔傷の跡を見せた彼女の姿、それ等が一時に彼の煩悶する頭を襲つた。

彼は今度こそ未練なく散歩に出た。しかし、彼の煩悶はなかなか直らなかつた。……

一週間ほど経つた或る日、參錢切手を二枚張つた手紙が著いた。差出人は、青島何某何番地河田道夫となつてゐた。間違ひなく、彼の名宛てになつてゐたので開封して見ると、彼女からであつた。

巻紙に三メートルほど長と書かれてあつた。初めの方はあの時の事をひどく怒つた文句で充ちてゐた。中程では最後の『坐る所』に行つたとき、二人が窓際の敷居にならんで腰かけたとき、あの時、どうして……云々と怨言が、彼女としては、珍しくどくどくと、然もこれも珍しく、可なり露骨に述べられてあつた。分量にすると、初めの分が一メートル程、中程が一メートル半程で、最後の半メートルには、この手紙には必ず返事がほしい、その返事は表書の所、その人宛てなら、絶對に安全であること、それに別れてから一週間ほど後の彼女の簡単な動靜などが書かれてあつた。

彼はその手紙を読み終ると直ぐ返事を書いた。それには、あの場合どうしてもああいふ處置を取らねばならなかつた事とその理由とを、彼は、洋紙の便箋であつたから、どくどくと二枚あまり書き、その次に「君はそんなに怒るが、」といふ書出で、彼女の希望どほり、最後の日、もし『坐る所』で立ち入つた交際をしたら、また過去の五年間に何度かそんな機會があつた場合に立ち入つた交際をしてゐたら、自分達の交際はこんな（五年も）長く續かなかつたであらう。

「今度の場合もさうだ、偶然ああいふ事になつて、君のいふ『窓際の敷居』にならんで腰かけた時を切掛に立ち入つた交際をしてゐたら、今日かうして手紙の往復が出来なかつたであらう。また、あの時、ああいふ物足りない別れ方をしたからこそ、これからも長く交際することが出来るであらう、等といふ事を、得意の文章で三枚あまり綴つたので、これも參錢切手二枚張つて出した。

青島から、これも彼の返事の手紙を読むと折り返し返事を認めたらしく、今度は、參錢切手を一枚張つた手紙が來た。彼は、今度はどう云つて來たかと思つて、幾らか胸を躍らしながら、開封した。さうして、軽く胸を躍らせながら讀むと、意外な事が書かれてあつたが、これは彼を微笑させた。といふのは、今度のは二メートル程であつたが、その最初の分が一メートル半ぐらゐあつて、その最初の分に「先生のお心持はよく分りました、」といふ文句が中に挟まつてゐて、それに對する彼女の意思が述べられてあつて、その中に『共白髪までの友だちになりませう』といふ珍な文句があつたからである。彼を微笑させたのは、そればかりでなく、後半にはこれからは出来るだけ金を溜める決心をしたといふ意味の言葉と、その後『三年待つて下さい』といふ文句があつたからである。

「三年待つて下さいと云ふのはどう意味であらう。」

彼は、その手紙を読み終つて獨言ちたが、獨言ちただけで、それ以上考へなかつた。それ以上考へても、その意味が分らなかつたからであらう。

夢
の
通
ひ
路

——これは全世界を失つて彼自身の
魂を得た人の問題である。ア・シモンズ——



の日、片野一進が安東次郎を訪問したのは日の暮れ頃であつた。

この訪問は、この一年程の間大抵月に二三度は往來してゐた彼等の間柄として、實に久しぶりの感じがした。といふのは、片野は、一と月程前に安東の玄關先きまで来て一と言二た言ちよつとした用事について話して歸つたきり、その後何の便りもなく、然も、三十日程前と十日程前と、二度も上京したといふのに、一度も顔を見せなかつたからである。さういふ次第であるから、安東はいくら片野が酒氣のある時の外は、口數の少ない質^ちであつても、今日は久しぶりで色色の話が出るだらうと思つたのに、その晩の片野は、不斷より一層口數が少なかつたばかりか、適^たに安東の方から物をいひかけても、めづらしく頓珍漢な返事をするがあつた。また、來ると、大抵歸りがけに、「そこいらまで行かないか」と誘ふのが習慣のやうになつてゐたのに、その晩は、そんな氣振^{けぶり}は少し

もなく、何か氣忙しさに、そこそこに歸つて行つた。

片野を玄關に送り出した時、安東は「今度はいつ頃、」と聞いてみた。さう云つたら、片野が、癖の、肩を棘めて小さい聲で、「そこいらまで出ない、」と誘つてくれはしないか、と思つたのである。が、片野は、一瞬間、非常に當惑さうな顔をして、直ぐ「それは……ちよつと分らない、」と云ひ残して、さつさとして行つてしまつた。その後姿が逃げるやうな恰好に見えたので、咄嗟に、その後を追駈けたい氣持が安東に起つた。彼は、大急ぎで自分の部屋に引返し、大急ぎで家を飛び出した。

その日、片野が来る少し前に、安東は、思ひがけなく、未知の本屋の訪問をうけ、翻譯を頼まれた上に、若干の契約金といふものを受け取つた。彼は、半年程前、片野の斡旋で翻譯を出版したことがあつた。それが英文科を數年前に卒業した彼が自分の腕で初めて取つた金であるから、これは二度目にあたる譯であつた。彼は既に三十歳に近かつたが、まだ親がかりであつたので、この思ひがけない収入は彼を有頂天に近い氣持にした。彼が片野を追駈ける氣持になつたのは本能的な氣持でもあつたが、この若干の契約金がそれに拍車をかけたのもあつた。彼が片野を追駈ける前に大急ぎで自分の部屋に引返したのはこの若干の契約金を取りに行つたのであつた。

夜の町に出るのは久しぶりであつた。彼は夢中で夜の町を走りながら、ふと片野が一年程前から禁酒してゐることを思ひ出した。それを思ひ出した時、ふと向うの町角に、タクシを拾ふつもりか、

左右を見まはしながら立ち止まつてゐる片野を見出した。すると、今度は、立ち止まつてゐる姿を見出したために、彼の足は、彼の思案に容赦なく、片野の方へ走りつづけた。やがて、彼は、呆氣にとられて自分の顔を見つめてゐる片野の前に、息をはずましながら立ち止まつた。が、面と向ふと、禁酒してゐることを知つてゐるだけに、どうにも云ひ出し兼ねたので、例の翻譯と契約金の話を簡單に話して、宮戸座の傍にかうかういふ店があるからと云つて誘つた。

さう云はれると、この一年半程前から、一年の内の大半、横須賀に住んでゐる片野は、東京に用事があると實にいろいろの用事を頼む安東のことであり、また翻譯の一件を聞くと、「それはよかつたね、」といった手前もあり、結局「ぢやア、……しかし、酒は絶対に飲まないよ、」といふことになつて、その宮戸座の傍の屋臺店のやうな飲食店に安東に案内された。

店は貧弱であつたが、酒は旨かつた。この一年程前から殆ど全く禁酒してゐるが、元もと飲める口であり、安東に強ひられて一口嘗めたのが元で、知らず識らず飲み過ぎた片野は、この一二年來いくら飲んでも酔へなくなつてゐるが、酔へないままに、いつか、酔つたのと同じ状態になつてしまつた。さうして、酔ふと語尾を引く癖を發揮して、

「ロオレンスを譯すんだつて？ 己だつて、ロオレンスぐらゐる知つてゐるぞオ。己だつて、ロオレンスぐらゐるの情熱はまだ持つてゐるぞオ。しかし、己は『カンガルウ』のやうな小説は好きだが、『チ

ヤツタリイ夫人』の戀人のやうな小説は嫌エだア。性的自由の國なんて、安東！ あんなもなア、お前エ向きだア。」

「僕のやるのは『翼のある蛇』ですよ。」

「己はデイ・エツチ・ロオレンスのやうな近代の小説家は嫌エだア。己は、同じロオレンスでも、十八世紀のロオレンス・スタアンの方が好きだ。『トリストラム・シャンデエの生涯と所信』といふのは知らねエが、『生涯と所信』といふ言葉は面白エぢやないか。『工夫に富める紳士』ラ・マンチヤのドンキホオテ』の『工夫に富める紳士』といふ言葉だつて、近代の……」

「先生は、その點で、『工夫に富める作家』と云へますね。」

「ばかア！」

「僕は『センチメンタル……』」

「『センチメンタル・ ज्याアニイ』なら己の方が古いぞオ。己があれを知つたのは中學時分で、死んだ親父の本棚で見つけた時だから、二十五年前だ。去年の夏、小田原の田舎であれを読み直してみたが、……さうだ、あの時、お前エも來てたんだから、あの本を見た覚えがあるだろ。お前エならあれを『感傷旅行』とやるだらうが、己なら『風流紀行』と譯すね。どうだ、文學士、うめエだらう。」

この邊になると、酒氣のある時の片野の言葉や調子と思へないやうなところがあるので、安東が思つたとほり、

「『風流紀行』とはさすがに名譯ですね、」といふと、それが却つて水を向けたやうな事になつて、「おい、安東、お前エが幾ら教師を負かすほど語學が出來ても、翻譯が少しぐらる旨くつたつて、そんな事ア人の禪で角力を取るやうなもんだア。そこへ行くと、小説といふものは、小説は、宇宙へ出す手紙だぞオ。おい、安東、己の小説はナ、そんじやうそこらに、うようよしてゐる、出來合ひの小説たア、質が違ふぞオ、」と、初めのうちはまだ普通の酒氣のある時の調子であつたが、「そんじやうそこら」の邊から、これも片野が飲み過ぎた時か非常に不機嫌な時に現す癖で、歌舞伎俳優が見得を切る時にするやうな、目を剥き唇を歪める表情をして、

「プラトンの野を過ぎ、アリストテレスの町を飛び、事態やうやう、中世紀の戰場に移らうとした比くらひより、哲學と藝術の境に迷ひ、また近頃は、騎士道文學の受賣りとまで成下り。……」といふやうな文句を、これ亦、歌舞伎俳優の臺詞せりふのやうな口調ではじめた。が、かういふ事は、安東には初めてのことでなし、また一種の面白さがあり、同じ店で飲食してゐる他の客たちにはよく分らなかつたから、何人にも當り障りはなかつたが、

「おい、安東、お前エはひでエ奴だア。いつか、お前エに頼んで一夫かっせに算術を教へてもらつたが、

あれは大抵まちがつてゐたぞオ、」とか、「しかし、お前エはまだ几帳面なところがあつて感心だが、萬ちやんなかに誘はれて、温泉場で安藝者など買つては駄目だぞオ、」といふやうな事を喋り出した時は、既に相當に酩酊してゐた安東も一時に酔ひが醒める思ひがした。

かういふ言葉がもつと續くかと思つて、安東ははらはらしたが、やがて、片野はふつりと口を噤んでしまつて、連の安東があることを忘れたかのやうに、一人ふらふらと店の外へ歩き出した。安東は慌てて勘定を拂つて片野の後を追つた。が、今度は走る必要がなかつた。片野は憑かれた人のやうに一人ゆつくりゆつくり歩いて行つた。小柄のせるか、その後姿がひどく悄然として見えた。

安東は大通の公園裏の邊で片野と一緒になつた。それから、當てなしに足にまかして歩いて行くと、妙な廣場に出たので、その一隅のベンチに彼等は腰を下ろした。

そこは、淺草公園の一部であり、淺草觀音の境内でもあり、位置は觀音堂の眞裏に當るのであるが、この界限に住んでゐる人人がカレンペン達ぐらゐしか知らない廣場であつた。その廣場は、運動場のやうに徒廣かつたが廻りは殆ど木立に圍まれ、程よい所にベンチが置かれてあるので、各種のルンペンの樂園のやうな感じもあつた。又、一と所、觀音堂の方角に當る木立の向側に噴水があつて、折しも十月十五日——舊曆九月十八日の晩であつたので、梢の隙間から噴水の先きが月光を浴

びて躍つてゐるのも見えた。が、廣場そのものは、中央から少し片寄つた所に一本の大木があるきりだつたので、月あかりのために却つていろいろの粗が見えて、白白しく味氣なく見えた。

少し離れてベンチに腰かけた二人の氣持は、偶然かういふ殆ど人影のない所に落著いてみると、彼等の眼前の風景のごとく、白白しく味氣なくなつて、口をきくのも顔を見合はすのも大儀になつた。安東はすつかり覺めてしまつたが、片野はまだ酒氣が抜けなかつた。

少しばらくして、突然、片野が

「ここは一體どこだア、」と先程とは別人かと思へるほど元氣のない聲で云つた。

「觀音さんの境内ですよ。」

「嘘をつけエ。觀音さんの境内に、こんな所があるかア。」

「あそこに噴水が見えるでせう。あの噴水の向うに觀音堂の……」

「うん、」と云つたきり、片野は安東の指さす方を見向きもしなかつた。

それきり、彼等は口を噤んでしまつた。安東はこの廣場のベンチに腰を下ろす前後から、先程の自分の爲出来した失敗をいたく後悔し、かういふ事になつたのもみな自分が元だと思つて、途方に暮れてゐたのであつた。そこへ、片野が「ここは一體どこだア、」と云つてくれたので、話の切掛が出来たと思つて、「あの噴水の向うに觀音堂の大屋根が見えるでせう、」と水を向けるつもりで

あつた。それが肝心の「大屋根」云云を云はぬ先きに腰を折られて話の接穂を失つた形になつたので、彼は又も途方に暮れてしまつたのであつた。そこで、暫くして、なにか話の切掛はないかと思つて、そつと片野の方を見ると、片野は、いつか酒氣が覺めたらしく、物思ひに耽る時の癖で、兩手で顎を抱へるやうな恰好をして、下唇を心持ち突き出して、目をつぶつてゐた。

安東には慣れた姿ではあるが、對の著物と鳥打帽のよく似合ふ片野の横顔が、顔立が年齢に従つて變らない質なので四十歳といふ年より五歳以上も若く見える片野の横顔が、月あかりのためばかりでなく、安東が嘗て見たことのない底の知れない憂鬱の色をたたへ、その童子のやうな目一ぱいに涙のやうなものが光つてゐるやうに見えたので、彼は、先程の自分の失敗の後悔などは綺麗に忘れてしまつて、何かえたいの知れない不安を覺えた。といふのは、彼は片野と近附きになつてから一年程にしかならないが、その間に彼が見た片野は、心身にどんな苦しい事があつても、それを外に現さない、といふより、それが外に現れない質で、どこか病的な所がないではなかつたが、いつも一種の朗かさと陽氣さを持つてゐるので、このやうな思ひ屈したやうな陰氣な片野の姿を見るのは殆どこれが初めてであつたからである。――

彼が初めて片野に會つたのは品川の御殿山莊といふアパートで、彼が訪問した時、片野はベッドの上に俯伏しに寝てゐるので、病氣かと聞くと、持病の痔が起つてゐる上に、不眠症といふものの

味を一ト月程前から覺えて困つてゐる、と持前の囁くやうな聲で云つた。それから、安東が英文科出であることを聞くと、バンヤンの『天路歷程』の中で、「虚榮の市」、「疑惑の城」などの章を讀んだ時は創作慾をそそられた、といふやうな話をしたり、近いうちに横須賀へ越す、それは前にも半年程ゐたことのある細君の妹の家で氣樂な家だ、越したら知らずから遊びに來たまへ、といふやうな話をしたりした。さういふ話をしながら、ガス・ストオヴが消えさうになると、病氣のところ痛むらしく擧め面をしてベッドから下りて、拾錢白銅を入れに行つた。

片野は、その言葉どほり、その日から一週間ほど後に横須賀へ越した。越してから、片野が二度目に安東に便りをした文句は、『(海軍生活) 陸戦隊觀兵式』の繪葉書に書かれてあつて、「僕は此方に來てから、大分生活が呑氣になつて靜養も出來、健康も快方に向つた、これからはぼつぼつやれさうだ。君は勉強してゐるか。僕は酒を慎んで、軍艦の見學などに耽り、イヤな後悔のない日を大體つづけてゐる。そのうち、萬ちゃんと一緒に遊びに來たまへ。」といふのであつた。

今では何とも思はなくなつたが、ある時は、『天路歷程』と軍艦見物とでは餘りに懸け離れてゐるので、安東はちよつと思議に思つたが、その次の便りも矢張り『大巡洋艦 鳥海 一〇〇〇〇噸』の繪葉書で、外の用事を書いた中に、「出來るだけ互ひに文學の仕事にいそしもう。何も恐くはありはしない、本當にしつかりやらう。勉強の前には不安もへつたくれもありはしない。」とい

やうな自分を勵ますのか人を勵ますのか分らないやうな文句があつた。安東が片野に翻譯を斡旋されたのは、この『大巡洋艦 鳥海』の頃で、それは一月中頃のことであつた。――

しかし、いつ迄もさうしてゐる譯にはいかないので、安東は、思ひきつて、

「先生！」と呼びかけてみた。

すると、多分その呼び聲とは關係なく、片野は、急に立ち上がつて、先きに安東が指さした觀音堂の大屋根の方をちらと見て、それから彼等が今先き來た道を逆に歩き出した。安東はほつとして片野より少し後れて歩き出した。片野は、すっかり酒氣が覺めたらしく、公園の裏門を出たところで立止つた。そこで、安東が察して、

「タクシを拾ひませうか、」といふと、

「ウン、」と頭を振つて、片野は坂本の方に向つてさつさと歩き出した。

「これから何處へいらつしやるんです、」と安東が聞くと、片野は初めて正面に安東の方を振り向いて、「栗須さんとこへ行くんだ、一緒に行かないか、」といつた。

その聲が片野の不斷の調子であつたので、安東は、救はれたやうな氣がして、返事の代りに黙つて片野とならんで歩き出した。淺草の公園裏から谷中の清水町までは可なりの道程があつたが、道の遠いのが安東には却つて都合がよかつた。長い道中には、片野の氣持も解れて、一と月ほど會は

なかつた間の話が何彼と出るかと思つたからである。しかし、入谷の大通を随分しばらく歩いて行つたが、片野は相變らずむつかしい顔をしてゐて一言も口をきかないので、安東はまったく取りつく島がない思ひをした。

ところが、片側に夜店が出てる邊に來た時、やうやく片野が口をきつた。

「これは萬ちやんにも話さない事だがね、」と彼は道を歩きながら持前の囁くやうな聲ではじめた。

「……これは君も知つてるだらうが、僕が文學の上で、それは唯作品といふ意味でなく、尊敬してゐるのは、栗須さんと新地さんだけだ。殊に、栗須さんは人間としても好きだ。……ところが、栗須さんにしても、新地さんにしても、先輩だから幾らか窮屈なところがある。といつて、同年輩の川根は、馬は合ふが、まア主に飲み友達だし、北山は同郷の幼な友達で一番樂な友達だが、これは何といふか、まア實用的な友達だ。ところが、生憎、川根も北山も、二十歳代には一端の文學者氣取だつたが、今は兩方ともブルジョアで、兩方とも藝術と離れてしまつた。……」と云ひながら、片野はちよつと否な顔をしてちゆつと唾を吐いた。

「それで、この半年程前から、徒の見知りの友達とは別として、昔ちよつと交際したことのある同年輩の作家二三人と交際してみようと思つて、ある時、東京へ出た時、まづ阿佐ヶ谷の兵取平吉を訪問した。……君は、こんな事は知らねだらう。尤も、これは萬ちやんも誰も知らない。その時、

兵取に、——君ンとこへずつと前に陸戦隊の觀兵式の繪葉書を出したことがあるだらう。あれは確か遠くに軍樂隊がゐる、空に飛行機が飛んでゐて、遠景は外國の風景みたいな景色だつたらう。外はみな寫眞だけど、あの遠景は空想だよ、おい、遠景ぐらゐる空想だつて構はないぢやないか——兵取にも、陸戦隊の寫眞を額に入れたのを持つて行つてやつたんだ。——君のは遠景は林のある野原だつたが、兵取にやつたのは遠景が軍港になつてゐて、軍港に艦隊が浮んでゐる圖だ。それを見ると、兵取は『遠景の軍港は柔かな春風が染みとほつてゐるやうだな、それに、軍艦も水兵も戦争の烈しさや勇しさを思はせないほど長閑な感じだな、この感じは君と君の藝術に似てゐるね、』と云つた。安ちゃん、この兵取の言葉をどう思ふ？　これが、こんな薄つぺらな見方は、凡そ藝術家の見方ぢやないよ。これは繪でいふと、挿繪畫家の見方だよ。……ところが、淺ましい事に己はかういふ作家でも作家であるから附き合ひたいと思つた。……といふより、やつぱり己が寂しがりになつたんだなア……己はその後東京に出るたびに二三度訪問したが兵取はいつも留守だ、……安ちゃん、この留守の多い譯は、自力の流行作家でなくて他力の作家だからと思ふが、君はどう思ふ。」

「僕にはその自力他力といふのがよく分りません。」

「……」片野は溜息をつきながら、「己はかういふ事をいふのは實に否だが、相手が君のやうな青年だから云ふが、他力の流行作家といふのは、無闇に由ない訪問や由ない交際をしたり、又、しき

りに爲めになる訪問や爲めになる交際をする作家のことだよ。……ところが、かういふ事をいふ己は一種の馬鹿で、この數度の留守に氣を悪くして、兵取に『もう君をたづねない』といふ葉書を出したんだ。すると、その事がすぐ廣まつてしまつた。……」

「その話は誰かに聞きましたよ、たしか赤石さんに。」

「赤石？　あ、己は三月程前に、案造とも絶交したよ。……案造などが、詩と別れて小説家になるなんぞ、生意氣だよ。己でさへなかなか詩と別れられないんだもの。……そこへゆくと、君に話したことはないが、相田君などはつきりしてゐるよ、そのはつきりしてゐる話を川根銀二から聞いたんだが。」

「相田さんは僕の好きな作家です。あの人は、兵取さんのやうな——いつか先生が仰しやつたやうに——田舎まはりの役者のやうな悪達者なところはなし、調子に乗つて亂作したり、通俗小説にまで手を出したり、——馬鹿馬鹿しい人氣はありませんが、地味な好い作家だと僕は思ひます。一克な所が長所で短所のやうな所もありますが、あの人などは、流行作家であるなしに拘らず、先生の仰しやる自力の作家ぢやないでせうか。」

「相田君は、君なんかには分らないだらうが、寡作だから目立たないが、目立たない一種の流行作家だよ。……さあ、相田君が他力が自力かと聞かれると、もともと己は——赤石案造などがいふと

ほり——理論を持たない人間だから、己の自力他力説などといふのは少し怪しくなつて来たが、……しかし、己は、川根の話を聞くまでは、相田君は自力の作家だと思つてゐたが、川根の話を聞いてからは、相田君も亦、目立たないが、他力の流行作家だと思ふやうになつたんだ。……」

「その川根さんの話といふのは、どういふ話なんです。」

「さういふほど面白い話ぢやないよ。その川根の話といふのはネ、——相田宗吉は不斷はああして足利に引込んでゐて、滅多に東京に出て来ないが、出て来ると、殆ど寄路よぢろといふものはしないで、雷門から地下鐵で尾張町まで来て、そこから、てくてく何某新聞、何某社、何某社とまはつて註文を一遍に取つて足利へ歸る。さうして今度は期日を間違へずに出来た原稿を持つて東京へ来る、さうして註文された品物を、何某新聞、何某社、何某社へとどけて廻つて、又新しい註文を取つて歸る、それはちやうど足利の織物屋が東京へ註文を取りに来て、出来た反物を今度東京へ持つて行つた序ついでに又新しい註文を取つて来る、といふやうなもんだ、どうだ、君も相田流に小田原の反物の註文を取りに廻つたら、さうしたら、相田と違つて、君は生粹の小田原人だから、君の方が雑氣まじりけのない反物が出来たらう、ただ心配なのは、もし君が相田流に方々の註文を取つて来ても、相田のやうに几帳面に品物が收められるかどうかといふ事だ、——といふ話だが、この話を聞いた時、己は後で思ひ出すと、自分の顔の熱あつるのが自分で分るほど自分の心に極りの悪い思ひをしたが、その時は心

から面白さうに笑つて喜んで、思はず『己も一つそれをやつてみようかな』などと叫んだものだ。どうだ、安東、君はこの話を聞いてちつとも面白くねエだらう。面白くない筈だ、かういふ話は、川根がすると、川根自身の本心を話すんだから面白いが、己のは餘り好きでない話だから、話してゐるうちに氣が乗らなくなつて来るくらゐだから、……止さう、こんな不愉快な話、かういふ話をすると、川根といふ人間の悪い方だけが感じられて不愉快だし、己自身も非常に不愉快になつて来たから、……」

それきり、片野はぷつりと口を噤んでしまつて、再び前のやうなむつかしい顔をして、急に少し足を早めて歩きつづけた。それほど鈍感でない安東は、今のやうな話をした自分自身に腹を立ててゐるらしい片野に今直ぐ何か話しかけたら一そう不機嫌にするばかりだと思つたので、片野から少し離れて歩きつづけた。

片野は、安東のやうな青年に、上邊うへはさう見えなくても實は一種の愚痴に過ぎない話を、長長く喋りつづけたことを反省して、不機嫌になつたのであるが、これから尋ねようとする清水町の栗須のことを考へると、彼自身が同じ清水町に住んだ頃のことを思ひ出し、また栗須と最も親しく往來した第何期かの小田原時代のことを思ひ出し、あの頃の苦しかった中にも楽しかった生活と健

康と張り詰めた創作慾などを思ひ出し、それ等にくらべると、去年から今年にかけての不安定で苦しい生活と不健康と藝術上の迷ひと不安を考へると、絶望に近い不安を感じるのであった。さうすると、彼は、連の安東の存在を忘れて、それからそれと考へながら、歩きつづけた。いつか坂本の四辻を通り過ぎ、灯影の少ない寛永寺橋にかかった。――

片野が、二十四五歳の頃、同人雑誌に關係して、その創刊號に發表した小説が謂はゆる文壇の一部に認められた頃から數へると、彼の文學生活は十五年くらゐになるのであるから、普通なら同輩の文學友だちが可なり出來てゐる筈であるが、彼には見知り程度の友だちは相當にあつたが、彼の同年輩の友だちの誰もが有形無形に形造つてゐるやうなグループにも彼は這入つてゐなかつた。それは、彼がその十五年程の三分の一ほど生れ故郷の小田原に住んでゐたからといふやうな理由ではない、また彼の小説があまりに特異過ぎるからといふやうな理由でもない、強ひてその理由のやうなものを上げるなら、それは、彼の、病的か變態的かとも思はれるやうな、内氣、人懐こい質、高慢、孤獨癖、潔癖などといふ、いろいろな性癖の寄合のためであらう、が、それも彼には殆ど上邊に現れなかつた、彼が幾ら貧困に陥つてもそれが殆ど上邊に現れなかつたやうに。――

片野が清水町に住んだのは十二三年前であるから、彼の二十七八歳の頃であつた。その頃、彼は、既に同人雑誌は半年ぐらゐで止め、彼自身の身邊のことを彼獨得の材料と見方で書いた小説を十數

篇發表して、押しも押されぬ新進作家になつてゐた。

片野は、その前の年まで小田原の生家に住んでゐたが、その頃やはり押しも押されぬ新進作家であつた川根銀二が、或る日、小田原に片野をたづねて來て、『散文』といふ半道樂半商賣の雑誌を出したい、就いては經濟の方は一切僕が引き受けるから、君は主に編輯をやつてくれないかと云つた。片野は、編輯の經驗は幾らかあつたが、作家に一人も知合ひがなかつたので、その事をいつて僕は不適任だと云ふと、川根はそんな事は何でもないよ、それに東京へ出られるだけでもいいぢやないかと云つた。それでも未だ片野が二の足を踏んでゐると、傍から彼の細君が私も賛成だわと云つたので、やうやく話が極まつたのであつた。片野夫妻は、文學のためばかりでなく、片野と極端に仲の悪い彼の母から別れるためにも豫て東京へ出たいと思つてゐたのであつたので、さう話が極まると、彼等は、さつそく小田原を引上げ東京へ出て、牛込柳町の鶴木といふこれも新進作家の住居の直ぐ隣に空き家があるといふので、取敢ずそこに落著くことにした。夫婦と三歳になる男の子と三人家族であつたので、引越しは簡單であつた。

川根がいつたとほり、片野は訪問記者の仕事にすぐ慣れ、初め心配してゐた作家訪問が却つて面白くなり、夕方、假事務所に歸つて來ると、編輯を手傳ひに來てゐる川根に、その日訪問した何人かの作家の印象を二三時間ぐらゐの夢中で話してゐるうちに、川根から、「ところで、原稿、誰と誰

に書いてもらへる、いつまで出来る、」と聞かれて、初めて肝心の用事を思ひ出して、報告するといふやうな有様であつた。初めのうちは一人の作家の印象を述べる毎に肩を竦めてくすくす笑ふ癖までが川根には面白かつたが、そのために肝心の雑誌の仕事が捗らないことが次第に川根に分つて来た。それが雑誌『散文』が半年餘りで廢刊になつた原因の一つにもなつたのであつた。

ところが『散文』編輯のために上京して牛込の柳町に引越した片野夫妻は、上京した嬉しさと目の上の瘤であつた母の膝下を離れた嬉しさとで、引越し早々、彼等の若い友達を呼んで、時には三歳になる一夫まで仲間に入れて、深夜まで蓄音機をかけたりに合はしてダンスをしたりしたので、神経質な鶴木から自分の困るのは我慢するが自分が紹介した爲めに他の隣人たちに安眠妨害の迷惑をかけるに忍びないといふ抗議が持ちこまれた。そこで、内気で弱氣の片野は早速引越す覺悟をしたのであつた。内気で弱氣の癖に好き嫌ひのはげしい片野は、『散文』の記者になつて、初めて數十人の文學者に會つたが、彼が夕方假事務所に歸つて来て川根に肝心の原稿の用事より先きに印象を述べた數十人の文學者の中で、「あの人は、」と幾らか褒める意味で上げたのは栗須土岐雄と新地蓮太郎の二人だけであつた。が、さういふ事とは關係なしに、柳町の家を越さねばならぬことになつた時、偶然、栗須の家の傍に空き家が出来たので、彼は下谷の清水町に引越したのであつた。

その清水町の家半年あまり落著いた片野は、『散文』が廢刊になつた爲めに、再び小田原へ歸

らなければならぬことになつた。その半年あまりの間に、目と鼻の間に住みながら、片野と栗須は二度しか顔を合はさなかつた。そのうちの一度は栗須が片野を訪問した時であつた。それは、片野が酒好きで酒氣がないと殆ど口をきかない質であるのに、栗須が酒は一滴も飲めないといふやうな理由だけでなく、彼等は共に内気で然も知り合つてから半年あまりしか経たなかつたからでもあつた。その頃の片野について栗須が書いた文章にかういふ一節がある。

「この人に會つて最も目につく印象はこの人がよく笑ふことである。この人の腹の中には笑ふ蟲が一疋あるやうに思はれる。私の考へるところに依ると、この蟲はヒステリイ科に屬する。如何なる藝術家の腹の中にもかういふ蟲が一疋づつるるに違ひない。この蟲は、笑ふ蟲であつたり、悲しがる蟲であつたり、退屈がる蟲であつたりする。何故この蟲がヒステリイ科に屬するかといふと、その感じ方が普通の人の十倍あるひは百倍以上敏感であるからである。例へば、可笑しがる蟲は、世界の隅隅からも、どんな隠れた所からも、可笑し味を見出して来る。その他の蟲もそれぞれ同前である。即ち、片野一進はこの可笑しがる蟲を腹の中に持つてゐると見える。即ち、彼は人の氣のつかぬ此の世の可笑しさを世の人々に教へる。彼は色色の笑の中から一つの新奇な笑ひを持つて文學界に現れた。新奇！——どんな意味でも、これなくして文學界に登場することは無駄であらう。」

この文章は、その時から十二三年前の——二十七八歳時分の——片野の文學の一面を説いてはる

るが、それと共に筆者である當時の栗須の文學の一面を語つてゐるところもある。が、片野がこの清水町時代を回想して直ぐ思ひ浮かぶのは、この栗須の文章に勵まされたことと、生活の苦しさはあの頃も今も變りはないが、あの頃は若さと健康と將來の藝術に對する、漠然としてゐたが、希望があつたことである。一口にいふと、その頃は生活にも藝術にもまだ疲れといふものを知らなかつたから、僅か半年あまりで東京を引き上げて、幼ない時から（といふより運命的に）反その合はぬ母が住んでゐる小田原の生家へ、妻子を連れて、心の中ではあるが、彼は大手を振つて歸つて行つた。片野が栗須と最も親しくするやうになつたのは、この彼が、文學生活を始めてから最も長く、七八年ほど小田原の家に落著いてゐた時分の事であつた。――

寛永寺橋は長い陸橋であつたから、橋の上にかかる、片野は、急に肌寒さを感じて、思はず、「うう、寒ッ」といつた。と、片野が何かいふのを待ち兼ねてゐた安東が、

「道でウイスキーを買つたんですが……」といつて、ウイスキーの瓶を出して見せると、答へる代りに頭かぶりをふつて、片野は歩きつづけた。橋は長く幅が廣いので、空に月が冴えてゐることが一層よく分るので、安東は、その月の冴えてゐる事でもいつて、それを切掛きっかけに片野と何か話したいと思つたが、どうもその晩の片野は取り付きにくかつた。ところが、橋の中程まで來た時、

「實は一と月程前に君の家の傍まで行つたんだよ。僕一人ぢやない、栗須さんと一緒だ。……僕は

文學が非常に戀しくなると栗須さんと會ひたくなるんだよ、殊に酒を止してから。君の家の傍まで行つたといふのは、その時、栗須さんと銀座は始終しじゆうゆくから今日は淺草へ行つてみようといふので、淺草へ行つたんだが、結局、觀音さんのお堂をまはつただけで、やつぱり銀座へ行つてしまつたんだ。……觀音堂の後の邊うしろを歩いてゐる時、僕が鱒井のこの頃の小説は成つてないといふと、栗須さんは、いや、片寄つてはゐるが、鱒井君は彼と同期の作家の中では一番氣持のいい作家だ、といつたよ。片寄つてはゐるが一番氣持のいい作家といふのは如何にも栗須流だね、と片野は最後の言葉をいふと一緒に彼一流のクフフフと聞える笑ひ方をして肩を竦めた。

「觀音さんまでいらして僕所へお寄りにならないのはひどいな。」

「銀座で喫茶店へはひつて、二時間程いろんな話をしたが、……」片野は安東のいふことなど取り上げずにつづけて、「そこで、萬ちゃんの小説の話をして、彼等のやつてゐる同人雑誌を送らすから見てやつてくれ、もしよかつたら、と頼んでおいたよ。……」それきり又、片野は口を噤んでしまつた。これきり又、黙りこんでしまはれたら困る、と安東は思つたので、

「栗須さんが小田原のお家へよく來られたといふのはいつ頃のことです、」と聞いてみた。

「うん、あれは『百足ひかで風』を書いた年だから、」と今度はすぐ返事があつた、「七八年前のことだ。朝寝と宵張りの癖が嵩じて神經衰弱のやうな症状になつてゐた時分だ。その割わりに、創作の氣持も乗

つてゐるから、酒もするぶん飲んだ。もつとも、飲むといつても、盃を嘗めては黙つて天井ばかり睨んでゐるので、……それに、母とワイフが未だそれほど睡み合つてゐなかつた時分だから、——ワイフが僕の體を揺すぶつて『頭の具合でも悪いの、』といふと、母があの上目づかひで人を睨むやうな目附きをして『内には代々頭の病氣の血統があるから氣をつけないと……』などとわざとらしく云つたり、……しかし、それでも未だあの時分は、ワイフにしても、……』と途中から言葉の調子が少し尖つて來たので、安東は聞きながらはらはらしてゐたが、そこでちやうど言葉が跡切れたのをさいはひに、口を挾んだ。

「その時分ですか、先生が小説がお出來になると、奥さんに朗讀させてお聞きになつたり、また、小説が雑誌に出ると、それを先生が朗讀して奥さんにお聞かせになつたりしたといふのは、……」
「止せッ、そんな話は。」

それきり片野はまた口を噤んでしまつた。それは、今の安東の言葉が氣に入らなくて話を中止したでもあるが、彼自身が先きの話がつづけられなくなつたのもあつた。片野は又、いま安東がいつた栗須が小田原の家によく來た時分のことを回想すると、それは、歩きながら出来るやうな話でないことに氣がついたからでもあつた。

それは片野が三十二三歳の頃であつた。それは明治以前に建てられた古くさい家ではあつたが、玄關をはひると正面に大きな帶棧戸が四枚はまつてゐて、左右に部屋があつて、奥の方に、細い廊下つづきに、離がある、といつた風な士族邸で、その頃は片野は瘦せても枯れてもその家の主人であつた。栗須が片野をよく尋ねたのはその家で、栗須はその頃病後の静養のために彼の母と一緒に箱根に三月ほど滞在してゐたのであつた。その家は奥に通ると庭に面して三つの部屋が竝んでゐた。栗須がよく尋ねたのは夏の頃であつたから、三つの部屋の障子が明け放しになつてゐたので、裏門を通つて庭の方から廻つて行くと舞臺面のやうに見える、栗須が行つた時は、いつも向つて左の二室には誰もゐなくて、右の端の部屋の奥の隅から少し離れたところに据ゑた机の前に片野は坐つてゐた。それは大抵午後二時頃で、片野が起きたばかりの時であつた。その部屋も古風で、床の間の壁には何も掛けなくて、床の間の隅に、これも古びた洋書が亂雑にばらばらに積まれてあつた。そこに、一千九百年版のヒストリアン・ヒストリイが二三冊まじつてゐたので、栗須が「珍しい本がありますな、」といふと、「それは、外國の船に乗つてゐた、死んだ親父が持つて歸つて來たもんです、」と片野は心もち顔を赧めていつてから、すぐ、「あなたはギリシヤの冒險物語などお讀みになりますか、」と云つた。あまり突然であつたので、栗須が返事をし兼ねてゐると、片野は机の上にあつた本を栗須にわたして、「僕、この頃こんな本を愛讀してゐます、」といつた。その言葉に

は栗須にも進める氣持が含まれてゐた。それは「Greek Romances」といふ、題名は平凡であるが、十九世紀末の出版のもので、装幀も挿繪も古風な面白味のあるものであつた。

その部屋から庭の方を見ると、庭のほとんど大部分が池になつてゐて、三つの部屋の縁側に添うた人の往來するところの外は、二三本の立木があるきりで、雑草が生えるままに任せてあつた。ただ、池の向側の庭の隅に當るところに古風な祠が立つてゐると、池の此方側の部屋に近い方の岸に小さい石燈籠が立つてゐると、石燈籠の傍に寛があるのが、景物といへば景物であつた。が、夜になると、地上の雑物はほとんど姿を消し、目の下の石燈籠に小さな明りがつき、その明りが池に落ちる寛の水を照らした。聞えるものは寛から水の落ちる音と池の鯉がときどき跳ねる音だけであつた。栗須が喉が乾いて水を求めると、その寛から片野の細君が水を汲んで來た。

片野と栗須が差し向ひになつて挟んでゐる古風な卓袱臺ばかりでなく、この家の中にある目ぼしい物には、その裏側か目につかぬ所かに、大抵差押の札が張つてあるといふ事を、片野が若しその話を栗須に話したとしても、片野はその話をすると直ぐクフフといふやうに聞える笑ひ方をして笑ふので、それを聞いた栗須も、一時は驚くが、直ぐその事を忘れて話しつづける、といふ風であつた。さういふ時、ギリシヤの冒険物語の話は片野だけにしか通じなかつたが、おなじギリシヤでも、プラトンの『ソクラテスの辯明』、『クリトン』、『アリストテレスの『詩學』などは二人とも愛讀してゐたので、普通の文學談が盡きると、一知半解のプラトンやアリストテレスの本の善さを語り合つた。すると、程よく酒のまはつて來た片野は既に幾度もやつて暗記してゐる、

「好き友よ、アテナイ人でありながら、最も偉大にして且つその智慧と偉力との故にその名最も高き市の民でありながら、出來得る限りの多量の蓄財や、また榮譽のこのみを念じて、却つて智慧や眞理や又その靈魂を出來得る限り淨らかならしめることに就いては、心を用ひもせず考へもせぬことを、君は恥辱とは思はないのか。」といふ文句に節をつけ聲を上げて朗讀した。

栗須は、片野が酒を飲んで興奮すると、俳優が舞臺で見得を切る時にするやうな表情と身振りをし、俳優の臺詞のやうな口調で朗讀をすることをこの時はじめて知つた。然もそれは新劇俳優が翻譯劇の英雄の役をする時のやうに心から楽しさうに見えた。その上、栗須が感心したのは、既にさういふ朗讀を幾度か聞いてゐる筈の片野の細君が、

「今度は『火の精サラマンデル燃えよ。水の精ロウンデネうねれ。』をやらぬ、」といつたことであつた。すると、

「今日はゲエテは止めだア。おい、酒が冷めるぢやねエか、」と片野は急に荒い聲になつて叫んだ。それは彼の細君が爛徳利を持つたままぼんやりしてゐたからであつた。——しかし、これは酒を飲んだ片野の上機嫌の場合であつた。

その晩から十日ほど後の或る日の午後、箱根から小田原まで買物に來たついでに、わりに涼しい日であつたので、栗須は、足にまかして町を歩いてゐると、ふと片野の家の裏門の前を通りかつた。いくら寢坊でももう起きてゐるであらうと思つて、栗須としては珍しく氣輕にはひつて、庭から座敷の方へまはつてみた。すると、三つならんでゐる部屋の二つ目の部屋に片野の母と彼の子が小さな机を挟んで向う前に坐つてゐたので、栗須が、びつくりした上にあわてて、「片野君は……」といふと、片野の母はただ一言「居ります、」といつて此方を見た。その金縁の眼鏡ごしに睨みつけられたやうに感じた栗須は『しまつた』と思つたが、その時はもう片野の部屋の前に來てゐた。すると、そこにも二人の人間がゐた。それは片野夫妻であつたが、その日は、片野は、机の前に坐らずに、部屋の眞中に足座を置いて、庭の方に向つてゐたので、栗須が「やあ、」といふ聲をかけると共に二人は目を見合はした。栗須が驚いたことに片野の目も見合はずと一緒に此方を睨みつけた。が、同じことでも片野の方が未だ我慢が出來た。その目の光は憎惡でなくて忿怒であつたからだ。猶、栗須が奇妙に思つたのは、片野が庭の方を向いて坐つてゐるのに、彼の細君は少し斜めの位置に彼の側面に向つてゐたことであつた。

さて、栗須は、睨みつけられたからといつて、却つてそのまま歸る譯に行かなかつたので、此方は少し無理であつたが笑顔をして、縁側の前の踏石の方へ歩いて行つた。近づいて行くと、片野も

笑顔になつて、「どうも失禮しました、」といつた。座敷に上つて落著いてみると、細君が横向きに坐つてゐるのは片野の酌をしてゐたので、片野は既に可なり酔つてゐたので、先きに栗須を睨みつけたやうに見えたのは、酔ひが廻つて目を据ゑてゐたのであつた。しかし、栗須が傍に坐ると、片野は「一度うかがひたいと思つてゐた、」とか、「お母さんはお變りありませんか、」とか、尋常の話をした。それから、例のごとく、書けさうだとか書けないとか、いろいろの文學談をしばらく交してゐたとき、ふと隣室から尋常小學校の二年生ぐらゐの読み方を教へる聲と習ふ聲が起つた。その教へる聲と教へ方は教師のやうに旨かつた。それを聞くと、栗須は、今すぐ先き見た、小さい机を挟んで、向ふ前に坐つてゐた祖母と孫の姿を思ひ出した。それを思ひ出すと一緒に金縁の眼鏡ごしに睨みつけられた目を思ひ出した。その目の光は先きに述べたごとく憎惡に燃えてゐた。栗須がこの憎惡の目を思ひ出したのと殆ど同時に、

「あの婆アがア……」といふ聲がした。その言聲が俳優の臺詞のやうな口調であつたので、栗須が驚いて片野の顔を見ると、その顔の表情は、おなじ俳優が舞臺で見得を切る時にするやうな表情でも、いつかのプラトンの『ソクテラスの辯明』の時よりはずつとどぎつく、ちやうど寫樂の歌舞伎俳優の似顔を思はせるやうな一種の凄味を持つてゐた。それに、言葉までが、プラトンの時のを新劇の俳優が翻譯劇の英雄の役をする時のやうな口調とすると、これは歌舞伎俳優が敵役をする時の

やうな憎憎しい口調であつた。

「あの婆アがア……」と、片野が、目を剥き口を歪めて、その憎憎しい臺詞のやうな口調でいひながら、彼の長男に読み方を教へてゐる、彼の母の聲のする隣室の方に向つて、握拳を固めた腕を突き出して、襖の向うに坐つてゐる人間を現に見てゐるかのやうに睨みつけてゐる目は忿怒と憎悪の念に燃えてゐるやうに見えた。

その片野の憎悪そのもののやうな身振り顔付き目付きなどを見てゐると、栗須は、いくら酩酊してゐるとはいへ、これが不斷あのやうな大人しい片野かと思つて不思議に堪へない氣がした。しかし又、先程ちらと見た怒り肩の首の太い鳩胸の老婦人と片野とが姿といひ顔といひ（おそらく氣質も）餘りに似てゐないことを思ひ、また、あの上目づかひにギョロリと人を見る目と今隣室から聞える濁つた太い押へつけるやうな聲の持主が何か非常に濁つた人間のやうに思はれることを思ひ合はして、片野があゝの母らしい老婦人をあゝのやうに憎悪してゐるらしい事が、そこにどういふ深い譯があるかは少しも知らないが、栗須には譯わからず尤ものやうに思へるのであつた。——が、いづれにしても、これは酒を飲み過ぎた片野の最も機嫌の悪い場合にちがひなかつた。

この日から十日ほど後の夕方ので、栗須が、東京に用事があつて小田原驛まで行つたところが、汽車の時間までに少し間があつたので、驛の近くを散歩してゐると、とある町角で片野に

出合つた。片野は、小田原にゐる時は、眞夏の間だけであるが、内にゐる時も外に出る時も、俗にランニングといふ袖なしのシャツを着てゐた。前に述べたごとく、彼は小柄で年より五歳以上若く見える質であつたから其頃は二十七八歳にしか見えなかつたので、さういふ手足が丸で剥出しの恰好をしてゐても少しも可笑しくはなかつたし又少しも目立たなかつた。

夕立の後であつたので、片野はその時その半裸體に近い服装に足駄をはいてゐた。その邊の喫茶店で一服する暇さへなかつたので、彼等はその町角でしばらく立ち話をした。すると、片野が來たのとは別の町の方から彼の細君がやつて來た。彼女は、女としては大柄であつた上に、當時の小田原では珍しい斷髮で、それに、俗にアツパツパといふ簡單著を着て足駄をはいてゐたので、遠くからでも目立つた。その姿を先に見つけた栗須が此方から會釋をすると、後れて氣がついた片野は振り向いて首を縦に振つた。と、向ふから歩いて來る片野の細君は、笑ひ顔になつて、先づ栗須の方に挨拶してから、次ぎに片野の方に向つて首を縦に振つた。やがて、町角で改めて顔を合はした三人は直ぐ別れることになつて、栗須は驛の方へ、片野夫妻は友だちのやうに並んで彼等の家の方へ歩いて行つた。——これは酒氣のない片野の機嫌のいい場合であつた。——

その頃、片野もときどき栗須を箱根の宿に訪問した。そこには栗須の母がゐるので、彼等は文學

の話より主に四方山の話をした。片野は清水町にゐた頃は唯一度しか栗須の母に會ふ機會がなかつたが、その時から何となく栗須の母に心を引かれたが、箱根の宿に栗須を尋ねるうちに、一そう彼女に心を引かれるやうになつたのであつた。初めは、普通の親孝行などといふ言葉以上に栗須が母を愛してゐる有様を見るにつけ、彼自身と母との間柄と餘りに正反對であるといふやうな點で彼等の羨むべき間柄に心を引かれたのであつたが、そのうち何時となしに栗須の母その人に片野は心を引かれるやうになつたのであつた。心を引かれるといつても、栗須の母は彼の母より五六歳上で當時六十二三歳であつたから、固より戀愛などといふものでは決してなかつた。その理由を最も簡単に單純に云ふと、栗須の母の面影と彼の父の又從兄妹に當る京の面影とが似てゐるやうに片野に思はれたからであつた。

しかし、片野が京を見たのは六七歳の頃、京が浦賀の兄の家から彼の祖父をときとき尋ねて來た頃であるから、彼は京の顔はうろ覚えにしか覚えてゐない、然も、そのうろ覚えの記憶も白髮の綺麗なお婆さんの京の顔である。彼の祖父は、ラムプより行燈の方が好きで、廊下には雪洞を使ふといふやうな風流人で、それに若年の頃しばらく江戸に住んでゐた間に浮世繪師や俳諧師などと親しくしたといふ程の江戸趣味の愛好家であつたから、從兄妹の京が來ると夜深けまで酒を飲み、不斷は滅多に使はない三味線などを持ち出し、それを京に弾かして唄をうたつたりしたものであつた。

その時分の片野は、この祖父が好きやうに、當時『浦賀のおばあさん』と呼ばれた京が好きであつた。さうして、京が好きであつたやうに京の娘の宮が好きであつた。――

その頃の或る日、片野が二歳の時にアメリカに行つたまま歸つて來ない父から彼宛ての手紙と寫眞がとどいた。その文句は「僕ノ親愛ナル一進ヨ、僕ハイヨイヨ願ヒガカナツテ、水雷艇ノ乗組員ニナツタ。ガ、僕ハ御國ノ士官ニナリソコナツタコトガザンネンダ。」といふのであつた。彼の祖父は、この手紙を讀んでから、意氣な海軍帽を斜めにかぶつて上甲板の一隅で手風琴を抱へてゐる我が子の寫眞に見入りながら、

「圭はいよいよ歸らぬ氣かな、」といつて溜息をついた。

少年の片野は、その手紙と寫眞を見ると、その時から半年程前に父がアメリカから送つて來た地球儀を持ち出した。それは彼がやつと持ち運び出来る程の大きなものであつた。その頃、片野の家で地球儀の見方を知つてゐるのは彼の母だけであつた。地球儀を持ち出した彼が「お父さんのいらつしやるクルブラ島といふのは何處です、」と聞くと、彼女は、踏臺の上に物物しく地球儀を置いて、クルブラ島の在處を探したが、さすがの地球儀にもクルブラ島は省略されてゐるらしかつた。そこで、彼女は、本棚の隅に詳細な地圖があつたのを思ひ出し、それを取り出して、今度は疊の上とその地圖を廣げて、蚤取眼で探して見ると、やつと西インディア州の一隅にあることを見出した

ので、得意になつて二人に芥子粒ほどのクルブラ島を示して見せた。芥子粒ほどのクルブラ島を示して見せながら彼女はさすがにちよつと寂しい顔をした。

そのクルブラ島に片野の父は二年程ゐてヴァージニア州のノオホオクに移つた。父からノオホオクの海軍鎮守府詰になつたといふ便りがあつた時は、片野も八歳になつてゐたので、讀むのがずつと楽しみになつた。父の手紙も二年前のより幾らか委しくなつてゐた。その手紙の中に、「一進ヨ、晴レヤカナルカ、(中略) 今度ハ出世シタノデアルガ、今度ハ通信船デアルカラ危険ノ心配ハナイガ、僕ニハヤハリ水雷艇ノ方が面白い。君ノ冒険心ガスコヤカニ成長スルコトヲ希望スル。」といふやうな文句があつた。そこで、彼が祖父に「今度お父さんはノオホオクといふ所へ行つたよ、」といふと、祖父はいつかの事を覚えてゐて、「おい、母さん呼んで、地圖の巻物を物つて來させてくれ、」といつた。が、彼は、さういふ用事で母の傍に行くのは非常に否であつたが、外ならぬ祖父の頼みであつたので、しぶしぶ母の傍へ行つて、祖父の言附を傳へると、果して、彼女は、上目づかひに睨みつけて、突慳貪に、

「私はアメリカは嫌ひだよ、」と云つた。

そこで、片野は、半泣きの顔をして祖父の傍に戻つて、「母さんに叱られた、」とだけ云つて、それから、手紙と一諸に著いた寫眞を祖父と顔をならべて見た。それはフランクリン號といふ二階建

の長屋のやうな細長い船で、勘定すると窓が四十七もあつて寄宿舎のやうな感じがしたので、祖父と孫には「まるで學校みたいで船のやうな気がしないな、」といふことになつた。この船の寫眞のほかに、父の圭吉が窓から半身乗り出してゐる大形の寫眞があつた。彼等は、その船の寫眞と人間の寫眞とを交る交る見てゐるうちに、その船もその人間も初め水に寫る影のやうに見え、それが次第に朧ろに見えて來て、仕舞には何にも見えなくなつてしまつた。すると、突然、祖父が

「さうか、母さんが叱つたか。……何だい、腹は借り物だぞ、一進は己の孫だぞオ。出て行きなれや、手前エが一人で歸つて行けエ、」と傍にゐた彼が吃驚するほど大きな聲で叫んだ。が、それと一緒にほつほつと笑ふやうな聲で祖父は泣きだした。祖父は飲み過ぎるとかういふ聲を出して泣く癖があつた。

この祖父の笑ふやうな聲で泣く癖を思ひ出すと、これも六七歳か七八歳の頃、祖父から教會にあるやうな立派な燭臺のついたオルガンを買つてもらひ、このオルガンをケラアといふカトリック教會の宣教師に習ひながら英語の會話を習つたことを片野は思ひ出した。そんな幼年時代に英語の會話を習つたのは若しアメリカの父から迎へに來たら彼もアメリカへ渡ることになつてゐたからである。ケラア宣教師は日本語は殆ど出來なかつた癖に、オルガンでは『鶴龜』だの『春雨』だの『御所車』だのを少年の片野に教へた。そのために、彼は、酩酊した祖父の所望で、『六段』だの『老

松』だのを、母の琴とオルガンで合奏したことがあつた。それを行燈の傍で獨酌で飲みながら聞いてゐた祖父は、酔ひが廻ると、このほつほつと笑ふやうな聲で泣いたものであつた。それを思ひ出すとその間に三十餘年の年月が経つとはいへ、今はさういふ日本音楽は殆ど忘れてしまつて、ナンシー・リイだのバルヂンなどに興味を覚え。それを横笛で吹いたり太鼓に合はし、することに興味を持ちなどと考へると、古い言葉でいふと、彼は今昔の感に堪へなかつた。バルヂン（戦ひの唄）は彼がノルマンデイの海賊の戦ひの唄から工夫したもので、ナンシー・リイ（船唄）は彼が十六歳のとき祖母の訃報を受けてアメリカから歸つて來た父から教はつたものである。いづれにしても、彼は父が歸つて來た十五六歳の年までは祖父母の愛だけで育つて來たやうなものであつた。

その代り、片野は祖父母の寵兒べっぴんにされ過ぎたところもあつた。その一つの例は、少年時代の彼は柔弱な上に腺病質の傾向があるといふので、祖母に付き添はれて殆ど毎日劍舞の道場に通はされたことである。祖母は、いやがる彼を學校から歸るのを待ち構へてゐて無理やりに劍舞の道場へ連れて行き、彼が稽古をする間ぢゆう見張りをしてゐて、彼に逃げ出す隙を與へなかつた。その祖母の念力が通じたのであらうか、道場の教師は彼の技術は數十人の弟子の中で第一等であると褒め、彼の祖母が或る人に、あの子はいざ舞臺に立つて演技にかかると丸で別人かと思ふほど活潑になるので我が孫ながらいつも見惚みとれずにはゐられない、と話してゐるのを陰かげで聞いて彼は思はず赧かたじけなくくなつ

たことさへあつた。劍舞ばかりでなく、祖母は、片野が中學にはひると、彼に内所で主任教師に會ひ、彼の腺病質をなほすために、彼を喇叭隊に入れてほしいと頼んだので、これも否應いやおつなしに喇叭隊の一員に編入されたところが、これも忽ち全校第一の喇叭の上手といはれるやうになつた。

喇叭はその後吹く機會は殆どないが、劍舞は飲み過ぎると時と場所の見境みまかひなく他人のステッキだの有合せの物差ものさしだので演じ、後あとでその事を知つて後悔することがときどきある。その一例は、箱根の栗須の宿で、「羨ム君ガアリテ能ク便チ醉スナハフコトヲ、羨ム君ガ錢ナクシテ能ク憂ヘザルコトヲ」などと吟じながらこの時は物差を持つて舞ひ終ると一緒にべちやんと坐つて、見物してゐた栗須母子の方に向つてお辭儀した、と思ふと、祖父ゆづりか、ほつほつほつといふやうに聞える聲で泣きながら腕で目を擦るやうな泣き方をしたので、その時まで襖の陰や廊下の隅で笑ひながら盗み見してゐた宿の女中たちが呆氣に取られてこそこそ引き上げた、といふやうな場合である。

劍舞といふと、二三年程前の或る日、彼は或る雜誌社から受取つた原稿料で酒を飲みすぎ、細君への土産のつもりで陸上競技用の投槍を買ひ、それを擔ぎながら、「But this fold flow'ret climbs the hill (いの花)そは山にも攀ぢよ、」Hides in the forest hunts the glen (林にかくれ谷間に住めよ、……)と一ぱい機嫌でうたひながら、當時住んでゐた小田原の家の玄關をはひり、彼の書齋に當ててゐる部屋の床の間に物體ものたぐひつけてその投槍を飾らうとしかけると、「明日のお米をどうする

の、』と叫ぶと一緒に細君に打たれた事を思ひ出した。おお、昔の劍の喜び、今の槍の悲み！——この邊で、京とその娘の宮に就いての回想に戻ると、先きに述べたごとく、片野は京の本當の顔はうろ覚えにしか覚えてるないが、彼が京を見た頃から二三年後の或る日、宮の家で見た京の寫眞はいつまでも彼の印象に残った。宮の夫は株屋で、家は日本橋の北島町にあつた。その北島町の家の欄間にかかつてゐた京の寫眞といふのは、白薔薇の附いたボンネットを被り、白のロココ風の洋装をし、胸に大きな鳥の羽根の扇を構へてゐる若い美しい婦人の半身像であつた。それを見たとき少年の片野は宮の若い時分の寫眞かと思つて聞くと、祖父は「いや、これは京の若い時分の寫眞だ、……」それから後は獨言のやうに、「あの時分の京の豪勢だつた事は、この私わなぞでも傍へ寄りつけないやうな氣がしたもんぢや、』といつた。それは京が鹿鳴館のダンスアに召された頃の寫眞であつた。

片野は栗須を箱根の宿に訪問して彼の母に會ふと、ときどきこの人の若い時分の顔はあの『浦賀のおばあさん』の寫眞のやうであつたらうと思つたのであつた。が、その頃、彼が京の事を回想すると、あの寫眞の記憶の方が却つて薄れてしまつて、それより、京が、白髪しらがの婆になつてから、よく人に話したといふ物語めいた話の方に彼は實感と空想的興味をおぼえた。既に山中に秋冷の氣を感じた或る日、彼は、栗須たちを箱根の宿にたづねた時、ふとした切掛きかけでその話をした。酒氣のな

い時の彼のこの又聞きの話は、彼が最も好む浪漫的な話であつたからでもあらう、底に夢のやうな情熱をひそめ、彼の癖の囁くやうな物の云ひ方が却つて一種の潤ひのある風情ふうせいを添へた。

その話といふのは、簡単に述べると、——京の生れた家の冠木門の兩側には海棠の老木が折り重なるやうに茂つてゐた。京は、その頃の習慣で、十五六歳の頃まで男姿で仕附けられたので、前髪を下げ、短い袂のついた水色の紋附の著物を著、紬の荒い横縞の袴をつけてゐた。十五歳の年、京は病身の母に連れられて箱根の温泉に湯治に行つた。ところで、京に二人の兄があつたが、彼等の父は若死にしたので、その頃の彼等の父は繼父であつた。この二人の父は共に養子であつたが、京の母は、子等の死んだ父を思ひ出すと哀惜の涙にしづみ、現在の主人の事を思ふと世を厭ふ心がつつた。そのとき、彼女が箱根の温泉に出かけたのは、保養のためでもあつたが、氣に染まぬ夫のゐる生家をしばらく離れたいと思つたからでもあつた。ところが、彼女等が泊つてゐた温泉宿たまたに偶ま何某といふ有名な江戸の歌舞伎俳優が滞在してゐたので、さまざまの藝事に興味の深かつた京の母は、病苦と厭世の憂さ晴らしに、その俳優をときどき部屋に招待した。そのうちに、彼女等は箱根を引き上げることになつたが、京の母は、小田原の生家に歸るのを嫌ひ、途中、湯本温泉の傍にある別宅に落著くことにして、京だけが小田原の生家に歸ることになつた。すると、京の母は別宅に落著いてから半月ほど後に永眠した。京が歌舞伎俳優の何某と墮落したのは彼女の母が亡くなつ

てから半年ほど後の事であつた。ある朝、京は、不斷の男装のまま金泥に海棠の花を描いた舞扇を一本持ったきりで家を出で、かねて頼んであつた馬に乗り、なき母が作つた幾つかの海棠の歌に節をつけて口ずさびながら、曉の街道をすすんだ。彼女と江戸へ駈落する約束をした歌舞伎俳優何某は、同じ頃箱根を出で、駕籠で酒匂川の堤をすすんだ。それは彼女が十六歳の年であつた。さうして、宮は京が二十歳の年に何某との間に生れたのであつた。——といふやうな話であつた。

この話が切掛になつて、片野が、箱根の宿に栗須たちを訪問する毎に、少しづつ述べた話を合はすと、可なり長いものであるが、その中には、相變らず控へ目な話し方ではあるが、思はず興奮して言葉の調子が烈しくなるものがあつた。その中で栗須たちの最も印象に残つたのは次ぎのやうな幾つかの話であつた。京の兄妹あるひはその系統は、正しい武家の血を引き、義侠と質實と夢に富み、器量のすぐれた筋であるが、彼の母あるひはその系統は、物持ではあるが、素性いやしく、物質的で、不器量な筋である。片野の父は、嘗て宮と相愛の仲で、既に婚約まで成立し、幾度か共に旅行さへした仲であつたのに、突然、いふにいはれぬ譯があつて、今の母と結婚しなければならなくなつた。その外に、彼を生んだのは、今の母でなく、宮であるらしいといふやうな驚くべき話が二つ三つあつた。

その中の一つの挿話は——或る夏、片野は仕事をするために浦賀の京の長兄の家の傍にある七郎丸といふ漁夫の家の離家に五日ほど滞在したことがあつた。無論、その頃は京も長兄もこの世の人ではなかつたが、七郎丸は若い頃から京の長兄の家に出入りしてゐた者である。或る日、つれづれのあまり、彼が裏の段段畑の上からその離家を寫生してゐると、七郎丸が通りかかつて、あんたは赤ん坊の時分は泣蟲で困つたといふ話から、彼があつた離家で生れたといふ話をちらと漏らした。その晩、彼が心をしづめるために納屋から何十年使つた事がないといふ行燈を持ち出して見ると、四方の張紙は古びて茶色になつてゐるが少しも破れてゐなかつたので、彼はそこに書かれある歌を四首とも讀むことが出来た。それは彼に見覚えのある宮の筆蹟で、中で、『いへばえにいはねば胸にさはがれて心ひとつになげく頃かな』といふのが彼の心に今でも残つてゐる、——といふのである。片野は、この話の中の、彼の父が宮と婚約まで成立してゐたのが、突然、いふにいはれぬ譯があつて彼の父が今の母と結婚しなければならなくなつた、といふところになると、嫌な顔をする時の彼の癖で、急に眉間に皺を寄せて、今の母の母（母方の祖母）の糸は湯本の近くの舊家の娘であるが、その糸が京の家に儀見習に行つてゐるうちに京の繼父の手が附いて女の子を生んだ、それが今の母である、と云つた。それから、彼は、一そう眉間の皺を深くして、糸は、その後ある家へ押掛女房に行つて、身に箔をつけるために薙刀や仕舞や書の稽古をはじめたが、結局一つも物にならな

い間に夫に少しも似ない子を二人も生み、間もなく夫に死に別れた、つまり、今の母は、さういふ

恥知らずの淫婦の娘で容貌も行状も母親の糸そつくりといふのだから堪らない、と云つた。その上、父親といふのは、(京の繼父に當るが、) くだん目下の者に修身の訓話などをしながら、實は無學で書類や書簡は一さい妻か京に代筆させ、酒は一滴も嗜まなかつた代り、京にまで手を出しかけたといふやうな性質で、終に箱根の山中で雲助と格闘して斷崖の底で最後を遂げた、といふやうな話をしてゐるうちに、急に苦蟲を噛みつぶしたやうな顔になり、それきり口を噤んでしまつた。

これでは、聞手の栗須たちも相槌の打ちやうがなく、また話手の片野も後口が悪いらしく、片野は、しばらく目をつぶつてゐるが、やがて眉間の皺もをさまり、不斷の童子のやうな目附に戻り、持前の囁くやうな聲で話しはじめた。それは糸が押掛女房に行つた相手は人もあらうに京の次兄の眞作で、眞作は譯があつて少年の頃から湯本温泉の傍に住んでゐた。眞作は、少年の頃から和歌に凝り孤獨と寂寥に親しんでゐるが、二十七八歳の頃、十歳も年下の糸が押掛けて來た上に狂言自殺などを演じたので、氣の弱い彼は仕方なしに彼女を妻にして小田原の實家に歸つた、彼は、和歌の外に弓の心得もあつたので、氣に染まぬ妻を避けるために毎日ほど弓場で暮してゐるが、前に述べた如く、糸が彼に少しも似ない子を二人も生んだので、今度は弓を止めて釣に耽りはじめた、ところが、或る日、彼は船に乗つて沖へ出たまま永遠に歸つて來ない、といふやうな話であつた。――

これ等の話は、聞いてゐる間は、唯めづらしいとのみ聞き流したが、後になつて、栗須はあれこれと思ひ浮かべて、片野がそのころ耽讀してゐたゲーテの『ファウスト』の中の「自分の中には二つの靈が宿つてゐる」といふ言葉を思ひ出した。この言葉を振つて片野に當て嵌めると、彼の中には現實と夢といふ二つの靈が宿つてゐる、といへるであらう。栗須もまた夢を愛する質であつたら、片野が、現實的にはよくも知らない京や眞作に憧れ、京の娘の宮を生みの母のやうに思ひたがる氣持はわかり過ぎる程わかつた。併し、もし片野の母が、彼の望むとほり、今の母でなくて宮であつたなら、彼はいつかのやうに歌舞伎俳優が敵役をする時のやうな凄味を持つた表情をし憎憎しい口調で襖の向うに坐つてゐる母に向つて「あの婆アがア、……」といふやうな事もなく、眉間に皺を寄せて現在の母のみならず母の父母の缺點まで發くことにはないであらう、と考へると、結局、片野の中には二つの靈の中の一つ半ぐらゐるは夢といふ靈が宿つてゐるのではないか、と栗須は考へた。さう考へると、一人の片野が、中古文や和歌や俳句や漢詩などに興味を持つたり、ナンシー・リイやバルデンなどを愛誦したり、歌舞伎劇に興味を持つたり、一人子をスポオツマンにしようと思つたり、少しでも東京に近い浦賀の七郎丸の離家を借りて半永住的に引越さうと考へたり、捲土重來の意氣で上京しようかと思案したりする氣持が栗須に半分ぐらゐる分るやうな氣がした。

この最後の上京案は、十月中頃、栗須が歸京するに就いて、片野の小説集の出版を何某社に交渉してそれが成立したらといふ事が前提になつてゐるので、栗須の熱心な交渉も成功しなかつたため

に、遂にお流れになつてしまつた。ところが、浦賀の方も思ふやうに行かなくなり、結局、片野は又いやな小田原の生活をつづけることになつた。

片野と安東は長い間——寛永寺橋から櫻木町の通を過ぎて清水町にかかる邊まで——無言で歩きつづけた。片野がこんなに長い間だまつてゐるのは酔ひが覺めた證據だ、と此の一年程の間の片野の様子を知つてゐる安東は氣づいた。が、それだけ一そう口がききにくくなつた。それでも、彼がせめて四五年前から片野と付き合つてゐたら、何か話の糸口が見つかる筈であつた。だから、この場合安東でなく赤石であつたら、片野の方でも酔ひ覺めの氣づまりが救はれたかも知れない。

片野はあの時もし栗須と何某社の交渉が首尾よく成立してゐたら、三十三歳の春頃に上京できる筈であつた。が、さいはひ、彼は三十三歳頃から三十五六歳頃までの間に、初期の寫實的な小説から一轉して寫實を元にした浪漫的な小説を矢繼早に發表した上に可なり勝れた作品を數篇書いたので、今度は自力で上京する自信が出來た。そればかりでなく、上京すると共に、彼某社から『文章』といふ雑誌を季刊ではあるが彼が編輯主任になつて出すやうになつた。その時、片野は無名作家であつた赤石案造の小説を世に認めさせるために『文章』に載せた。そればかりでなく、『文章』には、赤石ばかりでなく、その頃の赤石級の作家や評論家たちの作品を載せたので、『文章』はジ

ヤアナリズムと全く関係のない清新な雑誌になり、しぜん彼は十數人の有望な作家や評論家たちの深切な氣の置けない先達のやうなものになつた。それで、『文章』の一周年の記念會には三十餘人の青年文學者が一堂に集つたと云はれてゐる。さうして、『文章』は、後に多くのすぐれた作家や評論家や翻譯家まで世に出したが、ジャアナリズムに餘り無關心であり過ぎたために、二年足らずで廢刊しなければならなくなつた。

今、片野が秋の夜の町を連の安東の存在をまるで忘れてしまつたやうに無言で歩きつづけてゐるのは、酔ひが覺めたせるばかりでなく、たつた二年前の花やかな生活を思ひ出してゐたからであつた。——健康もよかつた。嫌な小田原と母から逃れて妻と子との三人水入らずの東京の生活。有觸れた文句ではあるが文學と生活の一致した盡きせぬ喜び。殆ど生れて初めて覺えたと云つていい交友の樂しさ。酒の旨さ。その他。——それ等がたつた二年前の二年程の間の出來事として過ぎ去つてしまつた。さうして、今は、催眠劑なしには眠れない。生活は……？ 家は、ないも同様。文學は……？ 交友は、ない事はないが、孤獨。『文章』で世に出した青年文學者たちはみな元氣らしい。——などと考へ盡きた時、片野は初めて連の安東の存在に氣がついた。

片野はこの一年あまり主に安東級かそれより若い青年たちと會つてゐる。それを別に寂しいとは思はなかつた。さういふ事ぐらゐるは今の彼には寂しさの中に這入らなかつた。彼は、少し離れて一

緒に歩いてゐる安東の存在に気がつく、何か、譯わからずにセンチメンタルな氣持になつた。

「安東、僕は又、一週間程前から御殿山莊へ來てゐるんだよ。……」
「えッ、ぢやア、今日は横須賀からぢやアないんですか、」と云ふ安東の早口の質問などに構ひなしに片野はつづけた。「……僕が二度目に小田原を引き上げて東京に來たのは三十六の年だが、二年程の間に、大森、品川、阿佐ヶ谷、蒲田、などと三四度引越して、それから横須賀だ。……つまり、三十六から今年まで四年程の間に、東京二年、横須賀二年、といふやうな譯だから、僕はよくよく東京といふところに縁がないらしい。ところが、横須賀の義妹いもむすめの家に御輿みこしを据ゑてから陸ろくな事がない、……」この邊から、片野は安東に話をするのでなく自分自身に云ひ聞かすやうな口調になつた、かと思ふと、突然、何も知らぬ安東に突掛つつかかるやうな口調になつたりしたが。

「……といつて、横須賀は、氣がくさくさすると、進水式を拜觀したり、『聯合艦隊入港』とか『何某艦隊出港』といふやうな愉快なことはあるが、……やつぱり、いよいよ書けなくなると、悪い癖で、居を變へたくなる。すると、東京と違つて、範圍が廣くなる。……廣くなるといつたつて、一番遠いのは水戸で、それも三日程だ、後は、遠くてせいぜい熱川あたらがは、その外は大抵、小田原の田舎の海岸か山手か、一二度、昆蟲採集に足柄山の山奥へ行つたきりだ。考へて見ると、生れ故郷の小田原を中心に、五里から二三十里の半徑をうろつき廻つてゐるだけだ。……安東！ お前エだつて、

北は青森、西は廣島まで行つたぢやないか……」

終りの方に行くに従つてしんみりした口調になつたので、若い安東が片野以上にセンチメンタルな氣持になつて聞いてゐると、最後に突然まだ酒氣が残つてゐるかと思はれるやうな烈しい聲になつたので、安東は譯わからずに足を止めた。それと同時に、

「おやッ、」と小さい聲で叫んで、片野も足を止めた。

そこは櫻木町の大通を左に曲り直ぐ右に曲るところの角で、そこを右に曲つて二三間ゆくと右側に栗須の家があつた。その曲り角で、片野が「おやッ、」と小さい聲で叫んだのは、いつの間にか月は雲に隠れたらしく、そのために急に暗くなつて、生垣つづきの屋敷町の一と所に、往來まで明りの差してゐる家があつた、それが栗須の家の邊で何か徒たならぬ事が起つてゐるやうに見えたからである。ちよつと立ち止まつた二人は急に足を早めた。果して、栗須の家の入口に『忌』と書いた紙が張つてあつた。

なくなつたのは栗須の母で、訪問した二人は取敢ず二階の客間に通された。下は明るくそこに人が大勢ゐるので却つて賑かであつたが、二階の客間はしんとしてゐた。すぐ上つて來た栗須は、前日(十四日)の朝の四時半頃から腹が痛むと云ひ出して其の日(十五日)の朝の六時半頃なくなつた、生前長煩ひして人を苦しめ自分も餘り苦しまないで死にたい、とときどき云つてゐたが、その

望みどほり死んだ、十三日の午前、銭湯で背中を洗つてもらつたといふ近所の子がある程だから、近所の人々は母の死に方を羨ましがつてゐるさうだ、と云つた。その話を終ると、栗須が「いつからそんな毬栗頭にしたか、」と聞いたので、さすがの片野も急に返答が出来ず、「……飲屋へ行くと海軍中尉に間違へられるが、どうしても大尉と間違へてくれない、」といつて後はクフフと聞える笑ひ方で笑つた。その問答がすむと、今度は十分間ほど立つづけに文學の話を栗須が出したので、それが済むと片野は「ちよつとお焼香を、」といつて下に下りて行つた。片野が下に下りて行つてゐる間に、栗須は安東から、片野の近況を聞くと、大抵横須賀にゐるが、ふいに御殿山荘に移つたり、とつぜん小田原へ歸つたりする、二た月程前に御殿山荘へ行くと、片野は睡眠中で夫人が出て来て、「片野も神経衰弱ですが、私もひどい神経衰弱で困つてゐます、……今度お會ひになつたら、何か錠劑の催眠劑をすすめて下さいませんか、プロバブリンだと自分で一々計はかりにかけるもんですから、つい飲み過ぎてしまひますから……」と云つた、といふやうな話であつた。「誰かの話に、片野君が三田へ越した時、地圖入りの手紙をもらつたので、それを持つて行くと、電車の停留所からの道の方向が全く逆だつた、といふやうなことを聞いたが、あれは君ですか、」と栗須が聞くと、「あれは赤石さんでせう、……あの時分から、先生は神経衰弱だつたんでせう、」と安東は至極眞面目な顔をして答へた。そこへ、下から目を泣き腫らした片野が上つて來た。――

栗須の家を出た片野は何かひどく興奮してゐた。安東はまた困つたなとは思つたが、その興奮の理由はすぐ分つた。それも初めのうちは、片野が唯「栗須といふ人は……栗須といふ人は」と呟くやうに云つてゐたので、何か少しも分らなかつたが、仕舞しまひに、それは、栗須といふ人はえらい、實にえらい、あんなに愛してゐた母に死なねながら、親孝行と云はれてゐる人が、母親の死に方を一通り説明的に話してしまふと、すぐ文學の話をはじめた、それも放つておくと何時いつまでつづけるか分らない、己も文學は好きだが、あの人には……、といふやうな意味であつた。安東がやうやくそれだけの意味を覺つた時分に、

「おい、安東、」と片野が叫んだ。「さつき、お前エは、ロオレンスの翻譯の契約金を持つてゐると云つたね、……よしッ、今度はタクシに乗らう。……」

タクシに乗るとすぐ、「蒲田ッ、」と片野は叫んだ。

「赤石さんとどこですか、……赤石さんとは絶交した、と……」

「絶交？ あれは詩と散文——詩と小説の絶交だ。案造の小説に詩がなくなつたからだ。……かまはん。運轉手、蒲田だッ。」

そこで、二人を乗せたタクシは蒲田に向つて走り、蒲田で赤石を合はせて三人になると、タクシは、次ぎは、五反田、芝、といふやうな順で、たうとう六人の乗客を乗せて、銀座六丁目の裏で止

まつた。その飲屋^{のみや}で、六人は三十分ほど和洋酒のおの好みの酒を飲み、今度は別のタクシで牛込に向つた。そのタクシは牛込仲町の川根銀二の家の前に止まつた。既に十二時をまはつてゐたので、川根の門は堅く締まつてゐたから、六人が、交る交る門を叩き、交る交る聲をかけたが、中から何の返事もなかつた。――

その翌翌日、片野から速達の葉書が来たので、赤石は早速御殿山莊に片野をたづねた。いつになく片野がひどく萎^{しな}れてゐるので、その譯を聞くと、片野は無言で川根からの葉書を出して見せた。それには唯『以後絶対に絶交』と書いてあるだけであつた。それだけであつたら、まづ我慢が出来るかと思はれたが、片野がその裏を返したのを見ると、片野一進といふ宛名の下に、様とも殿とも君とも書いてないので、これでは、と思つて、赤石は、先輩に對する禮を缺くとは思つたが、川根は、昔は藝術家であつても、それも少しも詩のない作家であつた、今は川根（金）^{かね}の番人のやうなものであるから、此方^{こちら}から『以後絶対に絶交』した方がいい、と洒落にもならない洒落を入れて慰めた。それで、片野はやつと元氣を取りもどしたが、後に、彼の細君の話では、それから一週間ほど不機嫌がつづいたといふ。川根と片野は、肌合は全く反對であつたが、却つて反對であつたために馬の合ふところがあつたからであらう。川根は片野の數すくない親友の一人であつた。

川根の一件のあつた日から三四日後、片野は、突然、小田原の生家に歸つた。――

寓居ではあるが既に大分住み馴れた横須賀の家で仕事が出来なくなると、東京の御殿山莊へ十日か一と月も行つてゐると大抵出来たのであるが、去年の末あたりから、片野はその御殿山莊でも仕事が出来なくなつた。それは、御殿山莊は來客が多いとか都會的な誘惑があるとかいふ理由もあるが、それよりも、彼がそこで仕事が出来なくなつた最も重要な理由は彼の神經衰弱が次第に嵩じて來るに従つて彼の細君の神衰經弱の傾向が強くなつて來たからであつた。

そのために、片野は、保養を兼ねて、今年になつてから、五月には足柄山の奥の方へ半月ほど昆虫採集に出かけ、八月には塔ノ澤に一週間あまり滞在し、九月には熱川^{あつがは}へ十日ほど行つた。その中で、熱川は一ばん遠いが横須賀から行くにしても東京から行くにしてもどうしても小田原驛を通るし、足柄山や塔ノ澤は小田原驛で下りなければならぬばかりでなく彼の生家のある小田原とは目と鼻の間である。つまり、熱川に行くにも、足柄山や塔ノ澤へ行くにも、必ず小田原の何處かを通るのであるが、小田原の何處を通つても、彼は小田原の生家に一度も寄つたことがない。そればかりではない。彼は、小田原に住んでゐた時分から、中學時代の同窓の北山の家の離家^{はなれ}になつてゐる土藏造りの二階を母に内所で借りてゐて、亡父がアメリカから持つて歸つて來た本の一部と彼自身が買つた本の中で特に愛讀してゐる本をその藏の中に收めておいて、今でもときどき其處へ讀みに

行つたり書きに行つたり、時には泊ることもある。その家は小田原の町の中にあつて然も彼の生家と目と鼻の間にあるのだが、彼はその家へ行つても母のゐる生家に一度も寄つたことがない。それは、ポオの『メエルストロムの旋渦』にある、若し船がその旋渦に觸れたら滅多に助からないといふあの旋渦が、片野の場合は、小田原の生家に當嵌まる、と云つても餘り過言ではないであらう。——それほど片野が小田原の生家に歸つたのはよくよくの事といはねばならない。

生家に歸つて、彼は、栗須の母が死んだ事と早速その香奠を送りたいといふことを彼の母に話し、暗に借用の意味を含めたつもりであるが、——さう云つたら、少なくとも香奠の四倍分ぐらゐは出してくれるであらうと皮算用してゐたのであるが、——彼女は、「栗須さんの所は何處、」と聞いて、他の言葉は一言もいはないで、片野から聞いた栗須の住所を紙切にうつすと、「では、香奠はあなたの名前にして、私から送つときませう、」と云つたきりであつた。

おそらく、片野は、この時もし母が彼が皮算用してゐた位の金を出してくれたら、すぐ東京へ引返したか或ひは楽しい旅に出たかも知れない。が、それは誰にも分らない。いづれにしても、かういふ結果になつたので、片野は、この家にある不用の藏書を賣り、入用の本と物品を取敢ず横須賀の家に預けよう、と考へた。それには、東京から本屋を呼ばねばならぬし、入用の本と物品を整理するのに人を頼まねばならぬし、かなりの決心も要するであらう、と思つた。

そして、彼は御殿山莊に残つてゐる妻の仙子を電報で呼びよせた。さいはひ、母が外出中であつたので、先づ栗須の香奠で失敗した一件を笑ふかと思つて話すと、反對で、いひにくい話をする時の癖で、相手の顔を見ないで、彼女は、「私はもう十年も辛抱してゐる、……著る物はすっかりなくなつちやつた、……あなた、もう半月したら十一月よ、」といった。彼は、それには答へないで、先きの決心を告げると、今度は、彼女は、すぐ賛成したが、「その代り、決して二度と歸らないつもりよ、」と念を押すやうにいつた。それから、「何もさうはつきり極めてかからなくても、……」「それがあなたの悪い癖よ。いくら相手がお母さんだつて、あなたは長男ぢやないの。長男なら長男らしく、どこまでも頑張つたら、……」「頑張るとか頑張らないとか、己にはそんな事ア……」「いつまでも自然主義のやうな事を云つてられちやア、……あなたは勝手よ、が、私や一夫はどうなると思ふの、……」などといふやうな押問答があつて、結局、片野の提出した意見を實行することになつた。

横須賀の家といふのは、前に述べた如く、片野の妻の妹の夫の家で、氣むつかしい片野がその家を既に二年程も寓居にしてゐるのは、子供のない夫婦二人ぐらしで、妹の谷子は文學好きだけにだらしないところはあつたが深切な質であつたし、谷子の夫の草壁は實直そのもののやうな人で、片野はこの人が好きでこの人と馬が合つたからであつた。二年ほど同じ屋根の下で一緒に暮したが、草壁のやうないつも機嫌の變らない人は稀であつた、それでゐて粗野なところの少しもない人

であつた。上邊には殆ど現れないが機嫌の始終かはる片野が草壁を好くのは當然であつた。

片野がトラック一臺分ほどの入用の本と物品を草壁の家に預けたのは十月の末であつた。——
仙子と谷子は姉妹でなかつたら双子かと思はれる程よく似てゐた。もしこの姉妹が双子のやうに似てゐなかつたら、さうして片野が稀な愛妻家で仙子が珍しい貞淑な夫人でなかつたら、仙子が如何に嫉妬を起しても無理がないと思はれるほど、さうして周囲の人々が如何に擧蹙しても尤もと思はれるほど、片野が谷子に對するあらゆる態度や言葉は戀する人のやうに見えた。それは、谷子がしばしば片野は自分に確かに戀してゐるらしいと思つた程であつた、谷子はもし仙子が姉でなかつたら矢張り片野は確かに自分に戀してゐるらしいと思つた程であつた。又、假りに片野が谷子を戀してゐたとしても、それを、彼は、如何なる人にも決して云はないであらう又いへないであらう、若し誰かに云ふとすれば、彼がこの世の中で最も遠慮のない彼の妻と彼の文學に語るであらう、彼女には「僕はあの人が大好きだよ、」と云つて、實際は彼女を惱ませる何物もないのに、彼女の手を戀人のやうに握るやうな事があるかもしれない、また文學では、嘘を誠しやかに現す事に非凡な腕を持つてゐる彼は、そのやうに述べるであらう。それは彼が最も崇敬してゐるプラトンのプラトンの戀愛に最も近いものであらう。もつとも、彼はプラトンの著作は耽讀してゐるが意識的にプラ

トンの戀愛をするやうな人ではない。そこで、彼の小説に若し谷子を思はせるやうな女性が出て来たなら、その女もその女の戀も此の世にないやうなものであらう、即ち彼の戀はそのやうな戀で、彼の戀人はそのやうな戀人であらう。——

それから二週間程後、十一月中頃の夜、片野が久しぶりで小説を書き出してゐると、隣の部屋から聞いてはいけない話が聞えて來た。尤も、それは、聞えて來ると、彼には聞かないでゐられない話であつた。聲は低くきききれにしか聞えなかつたが、紛れもない仙子と谷子の聲であつた。

「何事につけても、思ひきりやり通すといふことが出來ない……却つて滅茶苦茶なことをやつてくれる方が、……」「戀人でもこしらへるといいのね。」「どつち附かずの人は大きらひ、……女でもこしらへて、うんとひどい目に合はされるといい。」「つまり、姉さんがあまり兄さんに忠實過ぎるのが、……」「餘所の人のやうに夫に頼りきつてゐられたらどんなに楽しいか……」「ワイフにそんな不安を與へるやうな男は死んだ方が、……」「結局、生活力のない人間といふものは醜惡ね。……」
ざつと斯ういふ話がそれからそれと盡きないやうであつた。それは、斷片的ではあるが、可なり或る程度まで當つてゐたので、せつかく脂の乗つてゐる小説が片野は書きにくくて困つた。殊に近頃神經衰弱の嵩じてゐる片野には相當にこたへた。それが、深夜を通して聞えるので、古風な言葉でいふと、彼に身も世もあらぬ思ひをさせた。

しかし、さういふものは朝の光に逢ふと消えてしまふが、久しぶりで書きかけた小説のために、片野は、急に一人になりたくなつたので、その翌朝早く、皆が寝てゐるうちに、無断で上京して、御殿山莊に落着いたのであつた。

ところが、その晩、突然、めづらしく洋装をした仙子が御殿山莊に姿をあらはした。こんな事は滅多になかつたのと、昨夜の記憶がまだ耳に残つてゐるので、一瞬間、片野は別人のやうな氣がした程であつた。

不意に現れた細君の姿を見ると、小説に氣をとられてゐた片野は、忽ちその日の朝の事を思ひ出した。——朝、著いたばかりで一服してゐると、マダムが、挨拶にやつて来て、不断の快活さに似ず、誰も聞く筈がないのに、「先生に大へん御迷惑をおかけしまして……」と内所話をする時のやうな聲で云つた。いきなり、かういふ事をいはれたら誰でも吃驚するが、後の言葉を聞くと、何でもない事で、「先生が、忘れた時分に、また思ひ出したやうに、御殿山莊へおいでになる、おいでになると一と月も二た月も、……といふので、……マダムと何かあるんぢやないか、といふ、……まア、そんな事は實際にないことですから何ですが……それが、奥様のお耳に……」といふのであるから、朝、この話を聞いた時は彼は別に氣に止めなかつたが、今、目の前に細君の姿を眺めてこの話を思ひ出すと、彼女がこんな後を追ふやうに來たといふのが滅多にない事、久しぶりで自慢

の洋装でやつて來た事、それは實は偶然の如く何でもない事なのであるが、神經過敏に考へると、『あッ、細君は、それでやつて來たのだな、』と思ひたくなるところもある、それを又細君の側になつて考へてみて、片野があんな早朝に誰にも断らずに上京したのは初めてである事、といふところまで考へてみると、彼女は、根もない噂を信じて、可なり巧妙な戦術(?)を以て焼餅を焼いてゐるといふ事になるであらう。しかし又、その裏に、片野は四十歳近くなつて初めて、片野夫人は三十三歳になつて初めて、Flapperの美と一種の魅力を知つたといふ事にもならぬであらうか?——

その日から、片野夫妻は御殿山莊で一と月半程くらしした。子供の一夫は日本橋の細君の弟の家に預けられてそこから學校に通つてゐた。いつか小田原の生家にあつた本を賣つた金が残つてゐた上に、御殿山莊に來てから書き上げた小説の原稿料も残つてゐた。久しぶりで書いた小説が、以前の作と比べると少し暗くなり病的なところはあるが、出來が悪くなかつたので、張合があつたので、片野は不眠症を利用して夜はいふまでもなく晝間も机に向ふ時が多くなつた。が、そのために、神經衰弱の方は次第に募つて行つた。そのために、持前の斑氣が一層ひどくなつて、數年前にもさういふ事があつたが、小説が思ふやうに果取らない時は、ちよつとした諍ひをしても、片野は直ぐ細君に暴力を振ふやうになつた。

以前は、今のやうに小説がうまく運ぶと、片野はそれを細君の前で朗讀し、彼の先輩に當る新地

や栗須からの手紙の中に彼の小説に就いて少しでも褒めた文句があると、彼はそれを彼女に見せながら静かな感激的な調子で読み聞かして、共に感激を分け合つたものであつた。その頃の事を最もよく知つてゐる赤石はかう書いてゐる。「片野一進の文學とその文學の生む人生の夢を最もよく理解し最も深い同情を以て眺めたのは彼の夫人であらう。」

それが、今は、彼の神経衰弱から来る病的な不機嫌のために、彼の夫人のヒステリーも次第に強くなるといふやうな状態になつた。或る時、彼が仕事の疲れを休めるために本を讀んでゐると、

「本なんか讀んでゐる振をしないで、これでも見て下さい、」といつて、彼女は彼の前に二三通のくしやくしやになつたハトロン紙の封書を投げるやうに置いた。彼がその中の一通を拾ひ上げて讀むと、『流(註、期日を過ぎても受け戻せない質物)』通知』といふ書附で、「金貳圓也 女給 金七圓也 女帯 金五拾錢也 ショオル……」その他とあつたが、それだけで讀むのを止めて、

「どうしたんだこんなもの？」といふと、

「私、洋服、飽きたの、……」といふ彼女の言葉が終らぬ先きに、いきなり、彼は彼女を足蹴にした。その勢(いきほひ)が餘り烈しかつたので、彼女は俯伏しに倒れたまま暫く起き上らなかつた。が、しばらくして起き上ると、背(またぢり)を釣り上げて彼を睨みつけながら、

「あなたは此頃、お酒も飲まないのに、遅く歸つて来るのは、私が寝てしまふのを計らつて、マダ

ムに戸を明けてもらひたいためなんですよ、」といふと一緒に、彼女は、また蹴られるのを恐れたのか、ヒステリーのためか、駆け出すやうに部屋を出て行つた。その後を見おくりながら、足蹴にしたのは初めてであつたので、それを憤慨してかと片野は思つたが、それは直ぐ思ひ返した。その代り、突然、この頃彼の留守中にもやつて来るらしい安東次郎の青白い顔が彼の心の目に浮かんた。

それきり、片野は讀みかけの本を讀みつづけた。が、何か氣持が落着かなかつた。しかし、それは、この頃外出し過ぎる細君と来る度(たび)ごとにネクタイの變る安東とを結びつけての心配ではなく、細君が彼と御殿山莊のマダムのあらぬ噂を信じてゐる事が苦になつたからである。――

片野は絶対に細君を信じてゐた、又、それは間違つてゐなかつた。ところが、彼の細君は、彼に足蹴にされた時、安東次郎を訪問したのであつた。安東は、或る程度までは文學(と人間)は分つてゐるが、根が英語學が専門であり年も若過ぎたので、いつも片野の細君の不平不満を一々信じ過ぎる傾きがあつた。それは無理もないので、彼女の不平不満はヒステリーといふ病氣で藝術的に巧みに誇張されてゐるからである。そのために、彼は、彼女の不平不満を信じ過ぎたために、彼女に同情し過ぎたのであつた。一方、過度のヒステリーになつてゐた彼女には普通の同情より度を過ぎた同情の方が向いたのであつた。それに、安東はヒステリーの女性の最も愛好するセンチメンタルな氣質を多分に持つてゐた。そこに變態的なプラトンの戀愛が成立したのであつた。かういふ變

態的なプラトンの戀愛に落入つた男女が、或る日、片野の言葉を借りると、風流道行をやつたのであつた。ところが、風流を全く理解しない世の人々がその『道行』を『失踪』といふ言葉に變へて騒ぎ出したのであつた。

この噂を傳へ聞いた片野は、固より本筋のプラトンの戀愛を理解する人であつたから。一時は不快な氣持をいだいたが、それに、前に述べたごとく、細君の（従つて安東の）潔白を信じてゐるから、殆ど問題にしまなかつた。が、假初にも、彼女がさういふ噂を立てられるやうな行動を起したのは、彼と御殿山莊のマダムとのあらぬ噂が彼女の心を亂したからであらう、と考へて、彼はその事にいたく心を惱ました。――

年の暮に近い或る朝、片野は、横須賀の家を一人で無斷で出たやうに、一人で無斷で御殿山莊を出て、小田原の生家に向つた。今度は、細君に後を追ふやうに来てほしいと彼は思つた。

しかし、今度は、細君は來なかつた。彼女は、安東と旅行した事が評判になつたので、一時は可なり狼狽したが、すぐ、自分たちが潔白であるのに世の人々が無理解な噂を立てた事にヒステ리적인憤慨を覺えた。さうして、かういふ噂を立てられるやうになつた原因は片野だと考へた。そこで、片野から歸つて來いといふ手紙があつたにも拘らず、彼女は『怒つてゐるぞ』といふ令見のためにわざと小田原へ歸らなかつたのであつた。

かういふ彼女の氣持が遠く小田原にゐる片野に分る筈がない。それどころか、片野にはどうして彼女が歸つて來ないかが分らなかつた。そこで、彼は、東京にゐる赤石案造に、手紙を出して、來てもらつた。

久しぶりで小田原に片野を尋ね、久しぶりで片野を見た赤石は、二三ヶ月の間にこんなに變るかと思ふほど、變り果てた片野の姿を見て驚いた。あまり大きくない彼の顔が半分になつたと思へるほど痩せてゐるのを見ると、赤石は心が寒くなるほど驚いた。痩せた頬には苦惱の皺があらはれてゐた。猶、赤石の心を一層寒くしたのは、片野の神經衰弱は益々ひどいらしく、不斷から小柄な體が著物がだぶつくほど、小さく痩せ細つてゐて、物いふのも辛さうに見えた事であつた。

そこへ、やはり手紙で呼ばれたらしい牧萬作がやつて來た。牧は、赤石より四五歳も若く未だ二十四五歳の青年であつた上に、一年程前から片野に小説を見てもらつたり、それを雑誌に紹介してもらつたりするやうな親しい間柄であつたので、變り果てた片野の顔を見ると、泣きさうな表情をして、しばらく言葉が出ないらしかつた。――

二月にはひると、片野は次第に人に會ふのを嫌がり出した。さうして、彼の家の直ぐ隣に住んで

る、彼の最も古い弟子といはれてゐる、戸間達夫を毎日ほど尋ねた。その戸間が最も心を痛めたのは、同郷の先輩である片野と二十年以上の附合であるが、その間に『死』とか『自殺』とかいふ言葉は殆ど云つたことがない片野が頻りに『死』の話をするやうになつた事であつた。或る時など、片野は、「人間、孤獨になると、死ぬ事しか頭に浮かんで來ないよ、」といつて、突然ハンカチで首を締める眞似をして、「これで死ぬるよ、」といふやうな話をした。仕舞には、死に就いての話がほとんど毎日ほど出るので、慣れてはるたが流石の戸間も、片野に會ふのが嫌になつた。が、その頃は片野は戸間の外には絶対に他の人には會はないやうになつてゐたから、戸間は片野に會ふのがどうしても避けることが出來なかつたので、「如何なる因縁か」とあきらめねばならなかつた。それも無理ではなかつた。といふのは、あのやうに潔癖であつた片野が、實に濟まなさうな顔をして、「君、一圓ほど貸してくれないか、……否、金でなくてもいいんだ。催眠薬を買つて來てくれないか。あれ(母のこと)に云つても、己が無理に飲み過ぎるといけないと云つて、買つてくれないんだ。……が、あれが己の事を心配する筈がないからね、」とそこで久しぶりで物物しい澁面を作つて、「つまり金が惜しいんだよ、ケチなんだよ、でなければ、三日の間一睡も出來ないのを知つてゐて、催眠薬を買ふのを止める筈はないよ。……」と云ふやうなことが珍しくなかつたからである。

しかし又、穩かな日もあつた。

「戸間君、己は病氣がなほつたら、圖書館の出納係をしたいんだが、君のお父さんに頼んだら屹度大丈夫だらう。頼んでおいてくれよ。……その時、話ついでに、一夫を小田原中學に轉校させたいんだが、それも、君のお父さんに、これは急に、頼んでおいてくれないか、」といふやうな話をする、かと思ふと、或る日は又、思ひ迫つたやうな顔をして、「戸間君、濟まないけど、東京へ行つて仙子をぜひ連れて來てくれないか、」と頼んだりした。――

そのうちに、片野は病床に寝たり起きたりするやうな有様になつたので、戸間の方から、片野がいつも戸間を訪問する時分に、尋ねることにした。

その頃の或る日、一夫が学校の休みでやつて來た時は、片野は涙を流さんばかりにして喜んだ。さうして、「東京の學校を止めて小田原の方へ轉校しないか」といふと、一夫は頭を振つて「東京の方がいい、」と云つた。一夫のつもりでは、ただ小田原より東京の方が賑かでない、といふ意味であつたのだが、片野には子供にも嫌がられたとしか思はれなかつたのであつた。それは、「お父さんは瘦せた俊寛みたいだねえ、」と一夫が云つたからである。

その言葉が偶然當つて、夕方、一夫の歸るのを、片野は涙を流し手を伸ばして悲しんだ。その一夫の足音が消えると、片野は子供から俊寛みただと云はれた手を母の肩にかけて、

「お母さん、仙子を呼び寄せてくれませんか、頼みますから、」と云つたが、母がはつきりした返事をしなかつたので、同じ言葉に力をこめて叫んだ。が、あまり聲に力をこめたので、疲れたのか、すぐ寢床に横になつてしまつた。が、又、しばらくすると、彼は、その時ちやうど尋ねて來た戸間に、枕に手をついた姿勢で、低い弱い聲で、

「僕は、文學を止めてもいい、女房と子供と三人で一緒に暮せたら、圖書館の出納係でもいい、」と云つた。『三人』といふ言葉にちよつと力をこめて戸間の目を見た片野の目から、戸間は、片野が今になつても彼の母を勘定に入れてゐない事を悟つて、自然主義の影響を受けてゐる彼は、厳しい人生を見たやうに思つた。それから、しばらくして、

「戸間君、」と片野は云つた、「僕は、もう餘所へ行く著物が無いんだ。が、せめて外套があつたら襦袢を隠して、栗須さんに會ひに行きたいんだ。栗須さんに會つたら、……」——

戸間が片野の注文で、彼の母に内所で、梅焼酎の一升壘をとどけた翌日——あの有名な二月二十六日（東京は雪であつたが、小田原は雪の代りに珍しく底冷えのする日であつた、）——の夕方の五

時頃、いつも戸間の來る頃、時間の正確な戸間が十分過ぎて來なかつた。それは、片野が、今度小田原の生家に歸つてから、ひどく恐がつた黄昏時であつた。

午後五時十分頃、これも片野の嫌ひな叔父が鳴宮に行くと言つて座を立つた。この嫌ひな叔父にまで、片野は、病床の上から手を上げて、

「叔父さん、今日は戸間君が來ないやうですから、ゐてくれませんか、」といふと、

「相手が工場だから止める譯にはいかん、」といつて、叔父は出て行つた。

後に、母と甥の平二が残つた。叔父が歸つた後で、片野はピンポン臺の傍へ行つて、ピンポン臺の網に頻りに首を乗せる眞似をしてゐた。母はそれを見て知らぬ振りをしてゐたが、甥が傍へ行つて、

「伯父さん何してんの？」といふと、片野は腰をかがめ、平二の耳の傍に口を持つて行つて、小さい聲に力をこめて、

「ク、ビ、ツ、リ、」といつた。

その時、彼の母は甥を呼んで、

「海岸まで散歩に行つて來よう、」といつた。

それを聞くと、片野は、ピンポン臺の傍から大儀さうに足を引きすりながら母の傍に行き、

「お母さん、どうか出かけないで下さい、僕を一人、……僕を置おいて而行け堀ぼりにしないで下さい、」と母の袖に縋りついて云った。が、彼女は、それに答へずに、孫の手を取つて、

「行きませう、」といつて、出かけて行つた。

それが午後五時四十分であつた。内には片野の外に女中が一人。女中は臺所で夕飯の仕度をしてゐた。

母と甥が歸つて來たのは午後六時十分頃であつた。初めに、

「伯父さんがゐない！」と云つたのは甥の平二であつた。この頃いつも伯父が寝てゐる寢床の上に人間の形が微かについてゐて、人間がゐなかつたからである。

一番熱心に家の中ぢゆうを探したのは女中で、次ぎは平二であつた。

納戸で、一夫の兵兒帶で、縊死をしてゐる片野を見つけたのは女中であつた。平二が駈足でそれを祖母に告げに行つた。それが午後六時十二分頃であつた。

三人の中で、人工呼吸法を知つてゐたのは母ひとりであつた。が、母はじつと見てゐるだけで、手を束ねてゐたので、女中がそれを下ろした。

母が人工呼吸法をしてゐる間に、女中が直ぐ近くの醫者を呼びに走つた。その間、平二は廊下をあちこちしてゐたので、納戸には母一人しかゐらなかつた。

醫者が來たのは午後六時十七分頃であつた。醫者は不審さうな顔をして「惜しいことをしましたね、」と云つた。

その翌日——二月二十七日——は昨日に變つて素晴らしい晴天であつた。冴えかへつた青空の下に雪をかぶつた箱根の山々が不斷より間近に見えた。午後二時頃、葬式の出る頃は眩しいほど日がさした。しかし、實に寂しい葬式であつた。細い露地を出たところの石橋の袂に、故人が『文章』で世に出した作家や評論家や翻譯家などが思ひ思ひの位置に立つてゐた。靈柩自動車の後に親類の人々を乗せた自動車が一臺つづいただけであつた。それで、結局、見送つた人は石橋の附近に思ひ思ひに立つてゐた人々の數が一ばん多かつた。が、その數は十五六人であつた。その十五六人から少し離れたところに、靈柩車が見えなくなり、石橋の袂の十五六人の人々が去つた後まで、立つてゐた人が三人あつた。それは、新地蓮太郎と川根銀二と栗須土岐雄であつた。

「早野勘平のやうな死に方だと僕は思ふ、つまり、早まつたのだ、」と新地がいつた。

「僕は、結局、片野は詩人だつたと思ふ、……片野文學はあれで終つたよ、」と川根がいつた。
「それは違ふ。僕は、彼に、金と、保養の時間と、親しい友達が傍にあつたら、死ななかつたと思ふ。もつとも少し手後れのところもあつたかも知れないが。……しかし、僕のところへ死ぬ十日前に『身邊に異常事が起つて、しばらく此方にもないがいつれ近いうちに上京、新生活にはひるつもり、』といふ葉書が來てゐる。僕はこの葉書の言葉を信じてゐる。僕は矢張り、彼もあの日の事件のやうに、自分の意志でなく死んだやうに思ふね、」と栗須はいつた。

耕右衛門の改名



る朝、彫塑學生本田陽は、その友人久世勇からの葉書を手にしたまま顔色を變へて憤慨した。——この前にも彼はこの久世のために恥をかかされて、下宿屋に居堪ひたたまらなくなつたので、ちやうど金のない時であつたが、友達中ぢゆうちゆうを嘘をついて金を借り集めたり、色色とひどい工面をして、その下宿屋を引越したことがあつた。

事の起こりはいつも彼の姓名からなのであつた。元來、彼は本名を本田耕右衛門と呼ばれた。まつたく何といふ百姓くさい名前を親父は付けてくれたものだらう。だから、彼は國を出る時、東京に於いては全然その名を祕密にするつもりで本田陽と名乗つて來たのであつた。(彼は、初め、陽村といふ雅號を付けてゐたのであつたが、それでは如何にも流行後おきれの雅號らしいのと、それに陽村の村といふ字がやつぱり百姓に縁があるのを嫌つて、その後、陽と一字に改めたのである。)

が、美術學校の入學試験の時、その他の時に、つい本名を人々に知られてしまつたのであつた。

彼が、この前にも、久世から、用もないのに、その本名の本田耕右衛門といふ名を宛てられた葉書を送られたために、大きな恥をかい、ひどい工面をして下宿屋を引越したといふのは、その頃のことなのであつた。

「頼むから、久世君」と彼はそのとき早速久世を訪問して云つた、「どうぞ、僕の本名を呼ばないでくれ給へ。これは何かの親父の思ひ違ひだつたのだ。今に僕は戸籍の上からすつかり陽と變へてしまふつもりで、今その手続きをしてゐるんだから……。」

それであるのに、この朝も、久世は、何を恨みに思つてか、この別に大した用事でもなささうな葉書に、本田耕右衛門と宛名した上に、今度は姓の本田にわざわざ赤インキで『ほんでん』と振假名まで付けて、送つて來たのであつた。彼は、今までは唯『耕右衛門』といふ名の方ばかり氣にしてゐたのであつたが、今この友人の振假名に依つて、姓の『本田』までが百姓くさいのを教へられた譯であつた。彼は、一人で赧くなつて、葉書の裏をかへして見た。

それには、唯、しばらく會はないが、どうしてゐる。一度遊びにやつて來ないか、といふやうな事が認められてあつた。が、そこにも、葉書の面の半分以上に、「今年は秋になつてからの天候不順で、」と彼は赤インキで書かれてあるのを讀んだ、「稲作は一回毎に豫想が悪くなつて行つたらし

いが、昨日の僕の父からの手紙に依ると、昨年と比べると、もつとも昨年は豊年であつたが、今年はその半分しか收穫がないさうだ。君の御親父は、僕と同じ村で、同じ年頃ではあるが、僕の父などは違つて、そんな愚痴な手紙を遣されはしないだらうが、何にしても今年の天候は我れ我れ小作人の子等にとつては大打撃だよ。」

讀んで行くうちにも、彼は、餘りのことに、腹立たしさに、嚇としてしまつて、終りまで讀みつづけられなかつた程であつた。これは一體何といふことだ！ 彼の家は愛知縣で、久世の家は東京で、彼の父はその縣の屈指の豪農で、そして久世の父は陸軍大佐である。即ち、この葉書の赤インキの部分は全く作り事で、つまり、宛名の『本田耕右衛門』に對する嘲弄を加勢するための文句に過ぎないことが明らかなのであつた。

「何の爲めに、何の恨みがあつて、一度ならず彼は己をこんなに恥づかしめるのだらう、」と本田耕右衛門の本田陽は考へた。が、いくら考へても、ただ頭がかつかと燃えるばかりで、判断がつかなかつた。そのうちに、彼の考へは、いつの間にか飛んで、その恥づべき自分の名前のことに集中して行つた。彼は、立つてもゐても堪らない氣がして來たので、故郷の母に宛てて次ぎのごとき手紙を書いたのであつた。もつとも、この種の手紙はこれが初めてではなく、これ迄にもたびたび書いたことはあつたのであるが、今度は一層力をこめて書いたのである。

「かういふ事を申し上げますと、母上様、」と彼は書いた。「名前を付けて下さつた父上母上に對して、どんなに皆様のお氣持を悪くすることかと恐れ入りますが、これ迄にもたびたび申し上げます通り、私が、耕右衛門といふ名の爲めに、どんなに恥づかしい思ひをしてゐるかといふことは、多分その十分の一も母上などにはお分りにならないことと思ひます。現に、いつかもちよつと父上への手紙の中で申し上げたかと思ひますが、それは學校の試験を受けた時のことですが、先生が私の名を呼んでくすぐすと笑ひました。そしたら、數多の入學生たちが一度に私の顔を見ました。穴があつたら這入りたいといふのは、本當にあのやうな時の氣持をいふのでせう。私は見る見るうちに自分でもそれが感じられるほど眞赧になりました。

「母上様、これは慥たしかに人の顔を赧くさせる名前です。子が親に對してかういふ言葉を云ふのをお許し下さい。しかし、これは本當の事なので、私は、この後とも、この名前の爲めにどれ程の苦勞をしなければならぬか分りません。それだけならまだしも、この名前の爲めにどれだけ人に輕蔑されなければならぬかも知れません。母上様、人はその名前の爲めにさへ、こんな苦痛を忍ばねばならないものでせうか。私は、この名前の爲めに、慥に何年かの命を縮めるに違ひありません。さうして、私はこの名前の爲めに一生人に頭が上りません。その位なら、私はいつそのこと今のうちに死んでしまひます。母上様、人はその名前のためにさへ、命を捨てなければならぬものでせうか。」

のでせうか。」

故郷の彼の母は、東京の長男からの手紙を見て、非常に驚かされた。父親に相談しても、とても駄目だとは思ひながらも、彼女はその事について一應彼に相談しないではゐられなかつた。事實、彼女は、その息子の手紙の中で、これ迄からも一度ならず云はれてあるやうに、するぶん彼がその名前で苦勞してゐるだらうとは同情しながらも、成程、その十分の一も分つてゐないに違ひないと思つたのであつた。

「それほど苦勞してゐるのですから、」と彼女はその夫の目の色を窺ひ窺ひいつた。「どうかして名前を變へてやる方法はございませんでせうか。」

「あの馬鹿野郎が、」と父親は、年の割には少しも皺のない、てかてか色艶いろつやよく光つてゐる顔を上げて吐き出すやうに云つた。「お前までそんな馬鹿なことに加勢するといふ法があるか。一たん親が附けて役場へ届けた名前を、今更變へる譯に行くと思ふか。變へたければ勝手に變へてゐるればいい。大體お前がそんな事を一々取り上げてゐるからいけないんだ。きつぱりと叱りつけておしまひなさい。」

「ですけれど、」と母親は、(彼女は色が黒い上に皺が多いので、年以上に深ふかく見える方で、髪だ

けは舊式な白髪染で頭の地まで眞黒に染めて、年の割に大きな鬘を結つてゐるが、それさへやつぱり少しも若く見せることに役立たないのであつた。心から心配さうに云つた。「ですけれど、それでは通用しないといふではありませんか。あんな偏屈な子ですから、もしやそれを苦にして、間違ひでもし出かすやうな事がありますと、私が御先祖に對して、……」

「何が御先祖だ、」と父親は、彼女の言葉を皆まで聞かずに、遮つて叫んだ。云ひ忘れたが、彼の頭は完全に禿げてゐて、その禿の部分と顔の色とが殆ど同じなので、どうかした拍子に、ばかに顔が長く見える事がある。「何かいふと、お前はすぐ御先祖御先祖といふが、お前にも先祖なら己にも先祖だ。なる程、己は養子だ。だが、己は、假りに、種馬になり、養子に來たのぢやない。己だつて、死んだら、矢張り本田家の先祖の一人になるんだぞ。お前にも先祖なら、己にも先祖だッ。」この言葉は、機會がある毎に、この夫婦の間に、今まで幾十回幾百回となく、くり返される口論なのであつた。

「抑も耕右衛門といふ名前は、」と父親はつづけた。「お前も知つてゐたらう、曾祖父さんの名前を取つたのだ。それを改名するのに賛成するお前こそ、御先祖に對して濟まない譯ぢやないか。」「あなたはすぐ私の云ふことをそんな風に僻んでお取りになるから……」と彼女は半分泣聲になつて答辯した。「だけでも、全體あの子の妙に氣の弱い、それでゐる氣違ひめいたほど我儘なとこの

ある、一風も二風も變つた氣性は、あなたの通りぢやありませんか。その子の爲めに私が頼んでゐるんぢやありませんか。」

「何をいふんだ、」と彼も次第に興奮して顔を赧くしながら云つた。「己はまだ自分の名前を嫌つて變へようと思つたことなどは一ぺんもないぞ。彼奴の變挺な氣質はお前に似てゐるんだ。」

かうして二人の諍ひは、果てしがなく、飛んでもない方へばかり逸れて行つて、結局初めの原因の話に歸つて來なかつた。

母親は、その晩、眠らなかつた。

すると、その翌日の、昨日と同じ時刻に、また東京の長男からの手紙を母親は受け取つた。彼女はそれを今度は父親の目にふれない所で開いて讀んだ。

「私は昨日あれから、ぢつと下宿に落著いてゐられませんでしたので、あの事をもう一度調べて見ようと思つて、圖書館に行きました。といふのは、去年も一度調べたことがある事なのです。

「それは、この日本では、一町以内のうちに同姓同名の者が二人出來た場合だけ、改名を許されるといふことになつてゐるといふ事です。昨日調べ直して見ましたが、やつぱりさうなのです。父上様は何かと云ふと、そんなに自分の名前が變へなければ、勝手に變へておけと仰しやいますか、それでは駄目なのです。戸籍の上からすつかり變へないと、學校とか、交番とか、さういふ表向き

の所で飛んだ恥をかくのです。それに偽名は法律上の犯罪行為ださうですから、とてもさういふ事は駄目なことなのです。

「今も申しました通り、これは去年から思ひついてはゐた事なのですが、さすがに面と向つて切り出し兼ねましたので、ついそのままになつてゐたのですが、といふのは、先きに申した同姓が、國に歸れば一町以内に澤山あるといふことから思ひついたのです。今年の夏、私が國に歸りました時、たしか作右衛門の女房が大分大きなお腹をしてゐたやうですが、彼女がもう生む時分ではありませんでせうか。で、どうぞ、今のうちに彼の一家とその話をつけて置いていただきたいのです。私のいふ意味がお分りになりますか。といふのは、作右衛門の子に耕右衛門といふ名はちやうど適當ですから、是非いくらかの手當をやつて、彼の子にさう命名さしてほしいのです。作右衛門の手當は極く僅わづかでいいだらうと思ひます。勿論、私たちの家の名前を以つてすれば、手當をやらなくても聞くでせうが。兎に角、その極く僅な手當で、私が生きるか死ぬるかの境から、救はれるのですから、さうして、私の方を『陽』といふ名に改名届を出してほしいのです。それは直ぐでなくてもよろしい。あまり直ぐだと、役場で變に思ふといけませんから。役場ぐるなら何でもありませんが、郡役所、郡役所はまだ何でもないとして、裁判所などに知れると大變ですから。

「それから『陽』といふのは一字名前で、母上などには、失禮ですが、よくお分りにならないかも知れませんが、これは、實に新しい、さうして、私が將來彫刻家として立つのに、有名になれさうな名前なのです。現に、今、日本で一二といはれてゐる文學の大家に、『本多純』といふ方が居られます。私も、ですから、それに因よんで『本多陽』とするつもりです。(本田といふのは『ほんでん』などと讀まれる恐れがあります。もつとも、戸籍の方だとて、本田を本多とまで改める譯には行きませんが、これは自分で手紙を取りやりする時に、いつの間にか本多と變へてしまへばいいのです。その代り、どうぞ、これからは、母上も私へのお手紙にはさういふ風に書いて下さい。これなども馬鹿馬鹿しいやうに思はれるかも知れませんが、決してさうではないのです、近頃は姓名判斷學といふ學問まであるくらゐなのですから。」

この手紙を讀みをはると、母親はほつと安心の息をついた。が、彼女はもう父親にはそれに就いて何の相談をもしなかつた。その晩、彼女は小作の作右衛門の家に出かけて行つた。

「まあ、地主様の奥様ですか、」と作右衛門は、その朴納な四十歳の髻面を上げて、何事が起つたのかといふやうな、驚きの表情をしながら云つた。

「ちよつとお前に頼み事があつてね、」と地主の奥様は、平常なら穢きたさうに、一應そこらの塵を吹き飛ばしてからでなければしないのを、その時は例外で、いきなり上り口の端に腰を下ろして、

「ところで、作右衛門、」と彼女は、自分の腹を指さしながら、「あの、お上さんは今月かい、來

月かい、」と聞いた。

正直で單純な作右衛門は、何か悪い事をしたのを尋問でもされる時のやうに、唯わけ分らずにおどおどしながら、「もう、大抵、今月中でせうと思つて居りますんですが……、」と跡切れ跡切れに答へた。

「頼みといふのはね、」と彼女は切り出した。「その、生れて來る子に、私が名前を付けさせて貰ひたいんだがね。」

作右衛門は、彼女の意を汲み兼ねて、益々おどおどしながら、「どうぞどうぞ御遠慮なく……、」と答へた。が直ぐそんな風に答へてよかつたか悪かつたかと心配し出した。

「さう。それぢやあね、」と彼女は、少しも間を置かずに、懷から書附を取り出して、「ここにちやんとその子が生れた時に出す、役場の届を書いておいて上げたからね。子供の名前もちやんとこの中に書いてあるから、」と、云ひながら、彼女は、作右衛門が唯もぢもぢして答へる隙もないうちに、一封の金包を出し添えて、「それからこれは少しだけど、……、」と、上り口に窮屈さうに、股引を穿いた膝をそろへて坐つてゐる作右衛門の前に置いた。

「あの、それは……あの、それは……」と作右衛門は吃つてしまった。

「ぢやあ……これは旦那には内所だよ。……ぢやあ、さよなら、」と云ひ捨てて、地主の奥様が歸

つてからも、老小作人は、長い間ぼんやりと無言のままで、しかし、旦那から借りてゐて、まだ利息さへ滞らしてゐる二十圓の金のことなどを、咄嗟の間に思ひ浮かべながら、彼女が腰かけてゐた跡を見詰めてゐた。

作右衛門の子供は今月中に生れるやうである。その子に耕右衛門といふ名を付けさせる手續を、作右衛門は無筆者だから、その届書の類の世話までをすっかり終つた。従つて、來月からは公然と本田陽あるひは本多陽と、お前の好きなやうに名乗つていい、——といふ知らせが、折り返し、故郷の母から東京の息子の所に報ぜられた。

彼は、その通知に接すると、子供のやうに喜んで、その翌日、俄に荷物をまとめて、今までの下宿屋を引越した。彼は、これ迄も、いつでも變つた下宿屋に越して來て、名前を宿帳に付ける時は本田陽と名乗つてゐるが、その度にいつでも後目たい氣がしたが、今度といふ今度は、新しい部屋に坐る間も待ち遠しくて、彼の方から宿帳を請求したくらゐであつた。

ところが、その下宿屋の女中は、彼が宿帳に書き終つた名前と、彼の顔とを不思議さうに見くらべながら、「あの、お國の所はこれで宜しいのでございますか、」と變な聞き方をしたものであつた。といふのは、この新しい下宿屋では、初めに彼が明間を探しに來た時以來、彼の和服を著てゐる

る姿を一度も見たことがないのが一つ、（それは、近頃、彼が、その持前の神経的な性急な氣質から、急に書生らしい紺緋の著物が否になつたので、先頃家に注文してやつた著物がとどくまで、當分洋服ばかりで押し通すつもりだつたので、）それから、彼が、一體に言葉つきの丁寧な男で、それに妙に國訛りの抜けない、舌もつれのした物の言ひ方をするのが一つ、今一つは、彼の名前が三字名前なのと、最後に彼の容貌が可なり支那人らしいのとで、彼を支那人か朝鮮人かと誤つて信じ切つたからであつた。しかし、この彫塑學生には、嘗てそんな嫌疑を受けた経験がなかつたので、夢にもそんな事とは氣がつかなかつたのであつた。

「お國の所つて、」と、そこで、彼は、この百姓女中め、己を百姓だと思ひやがつたのか、と飛んでもない方に邪推を廻しながら、「私の所は田舎ですが、田舎ですが、百姓ぢやありませんよ、」と少し吃りながら答へた。彼は、こんな時の警戒にもと、父の肩書を平民農としないで、平民無職として置いたのであつた。

「それぢやあ、」と相手の、縮れ毛の、鼻の赤い女中は、無遠慮に、「それぢや、支那の方ぢやありませんの、」と云つたかと思ふと、突然起つた笑ひを隠すために、しかし隠し切れずに、はあはあ笑ひながら逃げるやうに部屋を駆け出して行つた。

彼は、眞赧になつて、暫くぼんやりと、消えて行つた女中の後を見送つてゐるが、やがて何のつ

もりか、「もしもし、」と呼んで見たが、もうその時は女中の足音さへ聞えなかつた。

「はて、」と彼は考へた。「己の名前が三字だもんだから、それで無智な奴等といふ者は仕様がな

い、己を支那人だと思つたんだな。」
彼は、かう考へつくと、前後の考へもなく、急に腹が立つて來たのか、飛び込むやうに帳場に出かけて行つて、主人に面會して、自分が支那人でないことを辯解し出した。が、それだけで猶足りない氣がしたので、

「あなたの所では、」と彼は云つた、「支那人を置くんですか。支那人がゐるんですか。支那人がゐるんなら私は直ぐ引越します。」

木綿の紋附の羽織を着て、泥鯱髭を生やした、その癖、立てば身長五尺もなからうと思はれる、小柄な五十歳のこの家の主人は、この男も本田と似た、氣の弱い、少し吃り癖のある男であつたが、至つて眞面目な顔をして、それは女中の粗忽で、彼自身は決して本田を支那人だと思つてゐないこと、現に家には外に一人も支那人を止宿さしてゐないことを述べた。

この『外に一人も』云云といふ主人の失言が、また一層本田を不安にした。で、彼は、ますます躍起になつて、

「現に陽といふのは僕の（このとき初めて彼は僕といふ言葉を使つた、それから無闇にこの僕を連

發した、) 雅號だつたので、僕の本当の名は、」と彼は云つた。さうして、(しまつた、大變なことを云つてしまつたぞ、)と思つたが、もう遅かつた。「僕の本當の名は本田耕右衛門といふのです。しかし、それが餘り日本の(變な所へ『日本の』)などといふ餘計な言葉を使つたな、と云つてしまつてから彼はまた後悔した、)百姓らしいので、僕は、今度、然もやつと、一昨日陽と改名したばかりなんです、僕は君にそれを云つて置かうと思つたんですが、つまり、……そんな譯ですから、僕の所へ未だひよつとすると、本田耕右衛門で手紙をくれる人があるかも知れません。(これはうまい事が口から出たぞ、と彼は云ひながら思つた、)そしたらどうぞ僕にとつて置いて下さいね。」

これで漸く相手をも納得させ、自分も氣が濟んで、話にけりが附いたと安心すると共に、先きの(しまつたツ)といふ氣持が彼に復活して來た。そのうちに、耕右衛門の方がいいのか陽の方がいいのか何が何だかさつぱり分らなくなつて來た。すると、彼は、ちつと部屋の中に落著いてゐられなくなつたので、俄に思ひ立つて久世を訪問することにした。

久世は、相變らず、その本職の繪を勉強してゐる風もなく、といつて讀書をしてゐる様子も見えず、きちんと片附いた、彼の畫室兼書齋である八疊の間に陽を案内して、そのまん丸い顔のまん中の、鼻と小鼻の區別の分らないやうな、團子細工めいた丸い、その癖始終つまらしてゐる鼻をくすくす云はせながら、「どうだい、近頃は、元氣は、」と天真爛漫に見える無邪氣さを以て尋ねた。

ところが、本田は、それには答へないで、

「君、今度僕はいよいよ戸籍上から改名したので、……」といきなりその話を切り出した。

「ふむ、その報告に來たのか、」と久世が早飲み込みをしてかう云ふと、

「いや、ところが、」と本田は、でこぼこした、彼自身が近頃の彫刻そのものやうに見える顔の上に、わざと顰で縮らして、鶏のとさかみたいに搔き上げた髪の毛を、彼の癖で、そつと女が結び立ての髪を觸る時のやうな手附きで撫でながら、「その改名祝といふ譯でもないがね、改名と共に早速引越したと思つてくれ給へ。……」さうして、今し方の、支那人と間違へられた次第をくどくどした云ひ廻しで友達に話した。

相手の久世は、心持が愉快になつて來ると、これが又彼の癖で、例のまん丸い鼻をうるさい程くすくす云はせるのであるが、今もそれをやりながら、「それや、面白いね、」と思はず膝を乗り出した。が、相手が自分の言葉に忽ち不快な顔をしたので、さすがの久世もはつと氣がついて、「そりや、怪しからんね、」と云ひ直した。

「變な事ばかりいつも僕は云ふやうだがね、久世君、」と本田は一層眞面目な聲で云つた。「こんなことを云ふと、君はまた僕を變な、氣の小さい奴だと笑ふかも知れないがね、」こんな風に、變に廻りくどい云ひ廻しをするのが、これ又彼の癖なのである。「支那人と云はれたのが、僕の心外

で心外で堪らないのだ。で、君に頼みといふのはその事なんだがね、裏には、何の用事でもいいから、小作百姓の話でもいいから、何かちよつとした文句を書いて、さうして表に、表が肝心なんだよ、表になるべく大きく、目につくやうに、本田耕右衛門様と書いて、葉書を出してくれないか。」

「よし、よし、」と久世は相變らず鼻をくすくす云はせながら、嬉しさうな笑顔をして答へた。

「君はこれまで二度も三度も僕に名前で恥をかかしたのだから、」と本田はますます眞面目な顔をして、くり返し頼んだ。「今度は是非僕の名譽回復のために骨折つてくれ給へ、ね。」

「よし、よし、承知した、」と久世は、相變らず、畫にかいた惠比須のやうな目附をして、笑ひながら受け合つた。

ところが、その翌朝、本田がまだ寝てる所へ、

「本田さん、」と女中が這入つて来て、「これはあなたのですか、」と云ひながら、變な微笑を頬に浮かべて、例の赤い鼻に皺を寄せながら、一枚の葉書を彼に渡した。

さうして、女中がくすくす笑ひながら、逃げるやうに、廊下を走つて行く足音にぼんやり耳傾けながら、

「あの鼻赤女中め、何といふ否いやな奴だらう、」と彼は、獨言ひとりごとをいつて、渡された葉書を、何氣なく、眠い目を明けて讀んだ、「中華民國人、本多陽殿。神田區猿樂町、中華民國朋友會。」

一瞬間、彼は本當に中華民國朋友會から來たのかと思つたくらゐであつた。が、裏を返すと、彼にも一見して分る見馴れた手蹟で、出鱈目に漢字ばかり十行程並べて書いてあつた。疑ひもなく、それは久世勇に違ひなかつた。

「どうして、何の恨みで、久世は、かう一度ならず、二度ならず、己ただに崇たるのだらう、」と彼は思つた。彼は、忽ち寢床の上に坐り直つて、恰も重大事のやうに考へ込んだ。

——一年程前のことであつた。ある時、本田陽は、靴を盗まれて、急いで一足新調したことがあつた。ところが、その靴が出來上がつて來ないうちに、どうしても洋服で出かけなければならぬことが起つたので、ふと考へて、それを久世の所に借りに行つたことがあつた。久世は心よく「いや、遠慮はいらない、この二三日僕は外に出る用事がないから、」と云つて貸してくれた。お蔭で、その日は、その靴に依つて、彼は、目的のとほり、洋服で外出することが出來たのであつた。さうして、その日の晩には、漸く彼のあつらへておいた靴も出來て來たのであつた。ところが、その翌日、あいにく雨が降つたので、彼は、どうにも新調の靴を穿いて出るのが惜しさに、やつぱり友達の靴を利用した。それが癖になつて、それから二三日つづいた雨の日にも、彼は、つづいて友達の靴を利用して、自分の新調の靴は箱に入れたまま、床の間の隅に飾つておいたのであつた。

すると、ある雨の日、彼が、そのやうにして歸つて來ると、下宿の女中が「お客様が先程からお

出でになつて、お部屋で待ていらつしやいます。」と云つたので、何氣なく、誰だらうと思ひながら、彼が自分の部屋に歸つて見ると、客は久世であつた。彼は忽ち眞赧になつてうろたへた。さうして、挨拶するのも忘れて、

「あの、靴はね、昨日やつと出来て来たので、今日返しに行かうと思つてゐたんだが、……」とそこまで云つた時、彼は、ふと新しい靴は箱入のまま床の間に飾つておいて、今、自分がこの雨の中を外から歸つて来たことに氣がついた。即ち、この雨の日に久世の靴を穿いて外出したことを暴露してゐた譯であつた。そこで、彼は益々あわててしどろもどろにかう附け足した。

「實際、君の靴は非常に穿きいいね、僕の奴は折角出来て来たのだが、どう間違へたのか、大き過ぎて靴の中で足が躍るんだよ。で、僕は造りかへさせようと思つてゐるんだ。」

久世は愛想笑ひをした。彼は極めて愛想のいい男であつたが、一體が無口な方なので、その笑ひには何の意味もなかつたのである。その證據に、これほど白白しく見える筈の本田の嘘をも眞に受けて、

「君に大き過ぎるのなら、僕にいい加減だらうから、少し値段を引き給へ、そしたら僕が買はう。僕に引くだけ、君はさう云つて靴屋に負けさしたらいいんだ。」といつたくらるであつた。

しかし、本田にはそれが「何をごまかすんだい。君は、自分の靴を雨の日に穿くのが惜しくて、

僕のを今日もさうして穿いて出たんぢやないか。それに、大體あの靴屋は僕が君に初め紹介してやつた家ぢやないか。あの靴屋は、僕の方がよく知つてゐる、決してさう無闇に期日を間違へたり、注文を間違へたりするやうな家ぢやない。分つてるよ、多分ずつと前に、恐らく僕の家で君が靴を借りに来る前から出来てゐたのだが、否、恐らく君が前の靴を盗まれたなどといふのも嘘で、ただ君は雨天用として僕の靴を借りに来たんだらう。」といふやうに見えたのであつた。――

「ああ、あの事だ、あの時の事を彼は恨みに思つてゐるに違ひない。」と彼は獨りであつた。「久世はあの時の事をきつと根に持つて、己をこんな仕方ではばしば恥をかかすのに違ひない。」

それから十日程後の或る日、一方、久世勇は、彼の父の部屋に呼ばれて、これまでも幾十回となく聞かされたことを聞かされてゐた。

「男が二十六歳といへば、もう立派に一人前の年ではないか、」と彼の父は、彼が子に傳へたところの丸い顔と、丸い鼻と小鼻の區別のない鼻の下の、顔ぢゆうで一番見事な、従つて存在を主張してゐるところの、大きな灰色の髭をひねりながら云つた。「己は飽くまで反對であつたのだが、死んだ母親が泣かんばかりにして己を責めるし、お前も命がけの熱心だといふし、するから漸く美術家になることを許したのだ。ところが、お前は二度も美術學校の入學試験をやり損なつたのを棚に

上げて、やれ、學校などは何にもならないとか何とか云ひながら、その後、お前自身一向何等の成績を上げた模様がないぢやないか。文展などといふものも、己が聞くたんびに、お前は、やれあんなものは俗物の寄せだの、やれあんなものは古いのと、譯の分らぬことばかり云つてゐるが、大體、日本の美術家であつて、日本の文部省の展覽會を無視するといふことが間違つてゐるぢやないか。例へばぢや、日本の軍人が日本の陸軍省海軍省を無視して……」

彼の息子に對する休職陸軍大佐のかういふ訓戒とも訊問ともつかない話は、一度始まると、それが何處までつづくか、誰も豫測し得るものがないのであつた。實際、これまで幾度となくこれを聞かされてゐる息子の畫家でさへ、大抵、その途中で來客があつたり、手紙が來たり、でない時は前者が話の最中に便所に立つた間に後者が逃げ出したり、或ひはまた後者に都合よく友達が尋ねて來たり、きつと何かの故障が起つて、完全にその終りまで聞いたことがないのである。今日も亦、今に切り上げる機會が來ないものかと、そればかり待たれるので、固より息子は相手の話などには少しも耳傾けてゐなかつた。ところが、幸にもそれが來たのであつた。彼は、歩いて來る女中の足音を聞くと共に、彼女が唐紙を明けてその姿を見せない前に、「來た、來た、何か來たぞッ」と心中で手を打ちながら待つてゐた。さうして、ちやうど父が「……陸軍省海軍省を無視して、……」と云つてゐた時、

「あの、勇様、」と果して女中が部屋の唐紙を明けて、彼の方に手をついて云つた、「本田様のお使がお見えになりました、玄關にお待ちになつて居られます。」

「さうか、」と、何か吉事の知らせでもあるやうに、彼は、父に挨拶するのも忘れて、玄關に走つて行つた。

本田の使といふのは車夫で、車夫は勇の顔を見ると、「あなたが久世勇さんと仰しやいますか、」と聞いてから、「これを、」と何か箱のやうなものの新聞紙包を手渡しながら、「これをお届けしましたので、御返事は要らないさうでございますが、どうぞ、私にお受取の印を……」と云つた。

久世は、不思議に思ひながらも、とにかく渡された包を自分の部屋に持つて行つて、中をあらためて見ると、それは一對の編上靴であつた。さうして、靴の這入つてゐる箱の中に、「粗末な品なれど雨天用として御穿き捨て下され度候。本田」と認めた紙切が這入つてゐた。

一瞬間、久世は、その何の爲めに贈られたか分らないものを、收めておかうか、返さうかと迷つた。が、忽ち彼の顔がにやにやと笑つて、例の父に譲られた丸い鼻をくすくす云はせながら、「鬼に角、受取の印だけは書いて、使はこのまま歸さう、」と獨言つた。

さて、彼は、その通りにして、再び自分の部屋に歸つて來て、贈られた靴と、それに添えられた紙切と、殊にわざわざ圈點を施してある『雨天用』といふ文字を見ながら、いろいろと考へた。け

れども、極端な神経質な、「體中の各々の神経線が混線してゐるに違ひない」と友達間にいはれてゐる程の本田のこの贈物の意味を、「彼の神経は彼の鼻のやうに丸くて、鈍い」と云はれてゐる久世に、いくら考へても解ける譯がなかつた。ところが、よくしたもので、久世は、その意味が解けないといつて、少しも苦しまなかつた。彼は、直ぐそんな事をくよくよと考へることを止めて、その處分法に就いて彼獨得の工夫を考へ始めたのであつた。

ところが、その翌日のことであつた。下宿屋の玄関のすぐ眞上に當る二階の部屋で、本田が、それは昨日車夫を使ひやつた時以來、否、久世に靴を新調して贈らうと考へつき、その靴を注文した日以來、相手がそれをどんな風を受け取るであらう、それを受け取つてから相手の彼に對する態度がどんな風に變るであらう、とそんな事ばかり考へてゐた時、(だから、その間彼は一步も外に出なかつた、従つてその間、日に幾人となく眞下の玄関に尋ねて來る客の名前から、尋ねられる客の名前まで、悉く覚えてしまつた程であつた。)ふと玄関で、例の鼻赤の女中を相手に、

「ホンさん、いらつしやいますか。ホンさん、いらつしやいますか、」と慥に支那人らしい聲で尋ねてゐる聲を聞いた。

「えッ どなた、」とそれを又、眞面目になつて、鼻赤の女中が幾度も幾度も同じことを聞き返してゐるのであつた。「ホンさん、ホンさん、誰だらう、ホンさんつて。」

すると、又、相手の支那人も、支那人獨得の性質と見えて、「ホンさん、ホーンーさん。ホンさんいらつしやいますか、」と同じことばかりくり返してゐるのが煩さく聞えた。

何のことで、無論、誰のこととも分らないが、謂はゆる混線してゐる本田の神経は、それを聞いてゐると、無闇にいらいらして來るのを覺えた。

やがて漸くのこと、

「うちにはそんな方かたはいらつしやいません、」と鼻赤女中が答へた。「うちには支那の方は一人もいらつしやいません。」

ところが、それで、やれやれ相手は歸ることか、と他人のことながら、頻りに二階で氣をもんでゐた本田が、ほつと安心したにも拘らず、相手の支那人は、それでも聞かずに、

「ホンさんるます、ホンさんるます、」とくり返してゐる。

本田は、堪らなくなつて、どうせ見えないとは知りながらも、念のために窓の障子を細目に明けて、顔を長くして下目を使つて覗いて見ると、顔は見えないが、形かたは慥に支那服を著た、一人の支那人が、表の門札を指さしながら、

「ホーンーデンーヨウさん、ホーンーデンーヨウさん、」と云つてゐるのが見えた。

そこへ、鼻赤の女中も、堪らなくなつたらしく、あわただしく玄關から飛び出して、(彼女は姿は全然見えなかつたが、)相手の指さす門札を見に行つたらしい様子なので、本田は、そつと障子を締めて、元の机の前に坐つた。その瞬間、彼女の、

「ああ、本田さんですか、」といふ頓狂な聲に、彼は飛び上がるほど驚いた。

「ああ、また久世だッ、」と彼は唸つた。「何といふ奴だらう。己を困らせるために、今日はわざわざ支那人を頼んで来たんだな……」

彼は、玄關に駆け下りて行つて、怒鳴りつけてやらうかと思つた。が、又、支那人などを相手にして、この上にも恥の上塗りをするやうな事になつては、と思ひ返した。しかし、このままぢつと坐つてゐて、……と考へると、なかなか机の前に落著いてゐられないのであつた。さうして、玄關に出て行かうか、女中が取次いで来たなら何と答へようか、などとやきもき考へながら、部屋の中をうろろ歩き廻つてゐるうちに、どうやら客の支那人が歸つて行つた様子なので、彼は、大急ぎで窓際に行つて、今度は思ひ切つて窓の障子をがらりと明けると、彼が外を見るのと、下宿屋を出て五六間歩き出した支那人が、音のした彼の窓を振り向くのと、ぴつたり顔を見合はした。

「やあッ、」と彼は叫んだ。「久世君ッ。」

しかし、支那服を著てゐた久世は、誰に教はつたのか、二言三言支那語らしい言葉で、聲をかけ

たまま、すたすたと逃げるやうに行つてしまつた。

「ちえッ、何といふいまいましい男だらう。……」と本田が、窓に突立つたまま、齒齧みをしてゐるところへ、例の鼻赤の女中が、その赤い鼻に皺を寄せて、にたにた笑ひながら、明らかに昨日彼が久世に贈つた靴の箱を持つて這入つて来た。

「あの、キユウさんといふ方が、」と彼女は云つた。「これを持つていらしつて、お渡ししてくれといつてお歸りになりました。」

「キユウ？」と云ひながら、彼は、その箱を受取ると、箱を包んだ紙に『本殿』と上に書いて、その下に『久 世勇』と、わざわざ『久』の字と『世』の字との間を離して認めてあつた。

常にはくどいほど何事にも辯解する癖の彼も、今はその餘裕も勇氣も失つて、呆然としたまま、唯だまつて、女中から靴の箱を受け取つて、だまつて彼女が部屋を出て行くのを見送つてゐる外はなかつた。が、體は熱病にでも罹つたやうに止め度もなくぶるぶると震へ、無念さに齒までがたがたと震へて止まらなかつた。一度ならず二度ならず、かういふ所を見られたからには、自分は、實際は支那人ではないけれども、下宿の主人や女中に對して、さうではないといふ辯解の最早しやうがないと本田は思つた。さう思ふと、彼は一刻もぢつとしてゐられなくなつた。そこで、彼は、何處といふ當てなく、帽子も被らないで、いきなり外に飛び出したのであつた。

下宿を出てから、二三町行つたかと思ふ時分に、本田は、一年ももつとも會はなかつた同郷の友人で、同郷といつても、中學が同じであつたといふだけで彼の方が相手よりも三年も下であつたと、郷里に於いても彼の家と相手の家とは五六里も離れてゐたので、實は彼等は東京に来てから第三者に紹介されて知り合つた間柄に過ぎなかつた、去年美術學校の日本畫科を卒業した木谷といふ男と逢つた。

「よう、本田氏どちらへ、」と木谷はその特長の突き出た頤を更に突き出し、その上その先きに突き出て生えてゐる山羊のやうな鬚を、前方に向つてしごきながら、持前らしく老人のやうな言葉附で、かう聲をかけた。「暫く御尊顔を拜しませんでしたな。如何です、その後は御健在ですか。」

頤が突き出てるて、額がおでこで、それに顔の中央がぐつと凹くぼんでゐるので、そんなに低い鼻ではないのであるが、結局、その頤と額との一線以上にも出てゐない鼻の下に、畫像の天神様のやうな八の字形の口髭を生やしてゐる木谷の顔を見ると、本田は「この男こそ襖などに書いてある支那人そつくりだ、」と思つた。これまでも三四度顔を合はしたことがあつたが、その時は、支那人とは思はなかつたが、併し何となくその若いとも年寄としよりともつかない顔の感じなり、わざとらしく聞える老人めいた物の云ひ方が氣に觸さわつて、彼は、あまりこの男に親みを感じてゐなかつたのである。

が、今日は、この男にも縋りついて、以後親友になつて貰ひたいと頼みたいやうな氣さへした。「暫くでした。その後は大變御無沙汰してゐます、」と本田は云つた。「一度お伺ひしたいと思つてゐながら、ついお所を聞き洩らしてゐるものですから、」と出鱈目のお世辭を附け加へた。

「これから何處かへお出かけですか、」と木谷は云つた。さうして、ただ散歩にといふ答へを聞く時、「ぢやあ、小生の宅へ是非お立ち寄り下さい、いろいろ藝術上の談話でも交換させう。」

やがて、「ここです、」と木谷に案内されて、御影石の柱の立つた門をくぐると、一間ばかりの石疊を行つたところが玄關になつてゐて、頭の上に『晩成畫房』と刻んだ木の額の掛つてゐる下に、小さな鐘が釣つてある。木谷がそれを二つ三つカンカンと鳴らすと、忽ち正面の障子が明いて、女中が手をついてお辭儀をした。

「お客人をお連れ申した、」と、そこで、木谷が嚴かに云ひ渡したので、本田が恐縮しながら彼に従つて座敷に通ると、高さ一尺以上の土の焜爐がその中央に据ゑてあつて、その上に素焼の土瓶が掛つてゐる。木谷の説明に依ると、濁つてゐるので有名な支那の黄河の水をこれで沸かすと、水分中の泥土はすっかりこの土瓶の底に吸ひ込まれて、跡に残つた水は無色透明で然も何ともいへぬよい味がして、これで以ていつも茶を飲んでゐると、とても水道の水を沸かして入れた茶は飲めないとのことであつた。だから、木谷の家でも、わざわざ近所の溝の水を汲んで来て、これで沸かして

飲むのだといふ話であつた。

床の間に掛つてゐる軸は勿論、襖の繪、それから主人が描きかけの繪、目に觸れるものは悉く支那人あるひは支那の風景を現したものであつた。こんな風に、見るもの聞くものが、ことごとく本田を驚かせたが、彼は、それ等のものを輕蔑しなかつたのみならず、これは久世などは、同じ畫家ではあるが、似てもつかない、よほど變つた趣味を持つた、藝術家に違ひない、なぜ自分はおつと早くからこの人と友達になつておかなかつたらう、と後悔した程であつた。

本田は、何かの話の切れ目に「今年も文展にお出しになりますか、」と聞いて見てから、ふと久世から「あの男は毎年毎年唐美人ばかり描いて文展に出品して、毎年毎年落選してゐるのだが、ちつとも懲りないでやつぱり唐美人ばかり描いてゐるんだよ。何でもあの男の繪ばかりは、若い新しい審査員にも、老人の古い審査員にも、誰にも分らないんださうだ、」といふやうな事を聞いたことがあるのを思ひ出して、これは飛んだ恥をかかせる質問をしたと後悔した。

ところが、相手は、恥づかしがるどころか寧ろ得意らしく、頤の山羊鬚を前方にしごきながら、「無論、出すつもりです。だが、どうも小生の繪は俗人の目に這入らないから困りますよ、……」と云ひながら、床の間にかかつてゐる掛軸を指さして、「小生は不斷にあの讚を座右の銘にしてゐるんです。」

その讚といふのは、松伯は彫むしほに後れ、大器は晩成する、といふ言葉であつた。

そこで、

「あなたの『晩成』といふ號はそれから出たのですか、」と本田が聞くと、

「さうです、それから出たのです、」と相手は如何にも得意さうに語勢を強めて答へた。

それから又、話を變へて、本田が、下宿で支那人と間違へられたことから、久世が、彼のことを『ホン』と呼び、自分のことを『キユウ』と云つて、靴をとどけて來た話をする、

「ほお、それは大出来ですね、」と案外にも木内は賛成の意を表した。「なる程、君たちは三字名前だから實に羨ましいですね。で、君はホン―デン―ヨウといふんですか、さうして、久世君はキユウ―セ―ユウといふんですね。小生も大抵上の『木』の字を削つて、谷晩成と名乗ることにしてゐますよ……。」

本田は、自分がそれに非常に不満足で、それどころか、そのために自分の部屋に落著いて坐つてゐられなかつたほど不快を感じて、今し方下宿から飛び出した理由を話すことを、相手が餘り獨合點いさほひにおちて、勢込んで話すので、云ひ出す機會を失つてしまつた。

「まつたく、支那といふ國は素的ですな、」と木谷は相手の心持などには少しも頓著なく話しつつけた。「何處が文明國だといつて、世界中で支那程の文明國はありませんよ。實に古い國ですから

な。それに、日本などと違つて、如何にも大國らしい、大様な所が何とも云へませんわい。日本人は、何かといふと、支那人をぼんやりしてると云ひますが、あのぼんやりしてるところが身上ですよ。日本人がいくら力んだところで、あんなゆつたりした人間になれないぢやありませんか。ですから、昔、荻生徂徠といふやうな立派な學者までが、物徂徠と變名して、支那人に肖らうとしたのも無理がありませんよ。例へば、支那人の悪い道樂だといはれてゐる、あの阿片の喫煙ですな、あれなども小生に云はせると、あんな物を嗜まうといふ國民は支那人のほかにはないのです。あれはちやうど日本でいふと、鱧子とか、海鼠腸とか、子供のうちには見向きもしなかつたやうなものを、大人になると好きで堪らなくなるのと同じ理窟です。大體、支那人の煙草のすひ方からが素的ぢやありませんか、あの長い煙管で、あれは西洋人の煙管のやうに決してポケットの中などには這入りませんから、日向ぼつこをしながら、ぷかりぷかりとやつてゐるところは。あれは、意識、無意識に拘らず、古い文明と、古い藝術の夢を見てゐるんですよ……」

かういふ話が果てしなくつづいたのであつた。さうして、本田がそれに相槌を打つ間もなかつた程、さうして、ここに始終を書き盡されぬ程、長長と雄辯に物語られたのであつた。

本田は、木谷の家を辭して歸る道道、なるほど今までは全く無知識でゐたが、聞いて見ると、支那といふ國はさういふ大した國なのか、支那人といふものはさういふ大した人種なのか、と木谷に

話された通りに受け取つて、頻りに感心した。彼の本職であるところの彫刻に於いても、西洋などとは違つた、素晴らしいものもある、と木谷が云つたことを思ひ出したり、かと思ふと、木谷の云ふところに依れば、料理なども世界中で支那ほど凝つたものはない、一例を挙げると、一皿の料理を作るのに二週間の間夜晝通して煮つづけるものさへあるといふ事であるが、一體どんなもので、どんな味のするものであらう、などと考へてゐるうちに、いつか自分の下宿に歸つて來た。

ところが、忽ち、自分の下宿の玄關を這入ると、自分の顔を見ると直ぐ赤い鼻に皺を寄せてにやりと笑ふ女中の顔を見ると共に、今の先きまでいい氣持になつて考へてゐたことが、どこかに吹き飛ばされてしまつて、木谷に會つて木谷と氣持よく話したことなどは忽ち一場の夢のやうな氣がして、久世に拭ふべからざる恥をかかされたこと、従つて長い年月かかつて漸く改名した自分の名前が支那人らしい名であるといふことなどが、一度に生き生きと思ひ出されて、又また胸を掻きむしられるやうな不快に襲はれ出した。

そのうちに、女中の運んで來た夕食の膳を見ると、本田がふと氣がついたのは、今し方自分が外から歸つて來た時、隣室に運んで行つた膳に卵が附いてゐたので、あの卵を食べないで、夜、風呂に行く時にあの卵を持つて行つて、久し振りで頭を洗つてやらうと思つてゐたのに、自分の方を持つて來られた膳の上には、それが附いてゐないことであつた。

「これは變だぞ、」と彼は、思つたが、さすがにそんな事は女中に聞き兼ねた。しかし、いよいよそのまづい食膳に向ふと、また頻りに「己を支那人だと思つて、飽くまで虐待してゐるのに違ひない、」と考へられて來て、それが五分十分とたつて行く時間と共に、彼はますます我慢がならなくなつて來た。ところが、女中が膳を下げに來た時にも、半分口まで出かかつてゐながら、若しそんなことを云つて、あべこべに恥をかかされたら、と思ふと、又遂そのまゝになつてしまつた。が、一人になると、襲はれるやうに苛々して來て、堪らなくなつて、彼は夢中で帳場に駆けこんだ。

「あの、あの、」と云つて、急ぎ込んだ彼が二の句がつけないのを見て、

「はあ、はあ、」と、いつもながらの木綿の紋附の羽織を着て、泥鯱髭を生やした、少し吃り癖のある主人は、おろおろしながら云つた。

「あの、あの、」と、猶もくり返して、彼は、やつとの思ひで、「この家では賄料に等級があるんですか、」と、もうその時は、それほど腹は立つてゐなかつたのであるが、心にもなく、強い詰問するやうな調子で尋ねた。

「いや、いや、」と主人が、客の不意な質問の意味を解し兼ねて、「いや、決して等級などはございませんが、……」とおどおどした調子で云ふと、

「すると、僕は變なことを聞くやうですが、」と云つてから、ああ、己は怒ることに事かいて、何といふ卑しい問題を持ち出したのだらう、何とか外の話に變へられないものか知ら、と彼は、咄嗟の間に後悔したのであるが、もうどうにもならなかつた。「今日の夕食に、僕は、慥に僕の隣の部屋に、卵が附いて行つたのを見ましたが、それが、その、ちやうど僕が外から歸つて來たとき、女中が隣の部屋に持つて這入るところが目についたのです……。いや、決して氣をつけて見てゐた譯ではありません。……それに、僕の方に附いて來なかつたのはどういふんです。……女中が忘れたのならかまひませんが……もし賄料に等級があるのなら、僕も、その一等のにして貰ひたいものです。……」

「いや、それは、それは、その……」と髭の紋附の主人は、更に一層吃りながら、「それは、その……お隣の方はお晝をお上りにならなかつたものですから、それで、その……卵をお附けしましたやうな譯で……決して、決して、等級などある譯ではございませんで……」と云つた。

「やッ、實に失禮しました、」と本田も眞赧になつた。が、相手の主人も赧くなつてゐた。本田はつづけた。「その、僕は、その、今夜お湯に行つて、頭を洗はうと思つてゐるものですから、……あの、……そんなら、その、僕にも卵を二つばかり持つて來てくれませんか……」

かう云ひ捨てて、逃げるやうに自分の部屋に歸つてからも、彼は長い間かつかと熱る顔を机の上に俯伏せにしてゐた。

「あああ、己は一體どうしたらいいだらう、」と彼は、その晩、寝られないままに、いろいろそれからそれへと取り止めもなく考へ耽つた。「考へて見ると、己は、少年の時から二十六の今日けふになるまで、己のしたこと、一つとして恥にならないで、自分の身に返つて來なかつたことがない。これから先き己は五年十年何年生きるか分らないが、己は、生きてこの世に接して行くかぎり、恥をかき、また恥をかき、恥の上塗りに日を送るに違ひない。ああ、人間に恥といふ感情がなかつたら、どんなにこの世は渡りよいものであらう。」

彼は、ふと、晝間逢つた、突き出た頤に突き出た山羊鬚を生やした、木谷のことを思ひ出した。審査員の誰にも分らないやうな、然もそれが新しい爲めではなくて、古い支那風の繪を毎年の展覽會に出して、毎年落選しながら、少しも恥ぢずに、人の思惑などを些かも顧みないで、自分の趣味ばかりに耽つてゐるあの男のことを考へると、羨ましい氣がした。が、すぐ心持が變つて、また無闇に、その無神経さが輕蔑されて、どうしてあの時あんなに感心したのであらう、と不思議な氣がして來た。さうして、木谷の云つたことが急に馬鹿馬鹿しくさへ思はれ出した。

眠られないままに、彼は、いつか夜店の古雑誌屋から買つて來た、枕元にあつた『近代』といふ雑誌を取つて、小説や雜錄の書出かきだしの二三行づつを讀み飛ばしては、頁をはぐりはぐりして行くうち

に、釜村權太郎といふ名を見出した。釜村權太郎といふのは、彼と郷里は二十里ばかりも隔たつてゐるが、やはり同郷で、彼より三四歳年長の洋畫家であつた。釜村は、本田のみならず、木谷とも久世とも友人同士で、現に本田は、久世の紹介で、二三年前に知り合つた間柄であつた。本田は、かねがね釜村が洋畫家であつて、同時に詩人であるとは聞いてゐるが、彼の詩を見るのはその時が初めてであつた。

試みにその一つを讀んで見るとこんな詩がある。
弟も妹も、

みんな來い、

この兄は大きな風呂敷を持つてゐる。

悲しみも苦しみも、

みんな持つて來い、持つて來い、

(どっせ、おんなじこつた、)

みんなこの風呂敷につつんで、

この兄が一人で背負つてやらう。

もう一つ別なのを読んで見ると、――

「何といふお前は

子だらう、」と、

少年の頃、己は

父母に叱られる度毎に、

いきなり庭に飛び出して、

(廣い芝生のまん中に

名も知らぬ一本の大木があつた、)

泣きながらその木のまはりを、

竹切で叩き叩き、

「生んだの戻せ、

生んだの戻せ、」と

叫びまはつたものであつた。

今もその大木はあるだらうが、

父母ちちはははもう夙よにこの世にゐない、

が、己が、今もなほ竹切を振り廻して、

ときどき叫びたくなる心に變りはない、

「生んだの戻せ、

生んだの戻せ。」

詩として、いい詩か悪い詩か分らないが、本田陽はこの詩の兩方ともに感心してしまつた。彼は、その詩の作者釜村權太郎とは、木谷などから思ふと、ずつと親密で、今まで二三度訪問した経験があるので、時が夜中でなかつたら、すぐにも訪問したい氣がした程であつた。

やうやく明け方にうとうとして、次ぎに目を覺ました時は、もう十時を過ぎてゐた。それで、朝と晝とを兼帶の飯を食つて、本田が釜村をその下宿に訪問すると、相手はまだ床の中に這入つてゐた。

「暫くですな、」と釜村は、十分手平てのひらの幅ほどもあるやうな廣い額の下の、利口さうな、寧ろ狭さうにさへ見える目を、ちよろちよると二十日鼠のやうに動かしながら、「僕、今起きますから、どうぞ、その邊に坐つて下さい、」と床のなかから會釋した。しかし、なかなか起きさうな模様もなく、床の中から呼鈴などを押して、女中に火や茶を命じてゐた。

本田が、昨夜町を散歩して、(そのことは勿論口から出まかせであるが) 釜村の名に引かれて夜店で買つて来た古雑誌で、「君の詩を拜見して、非常に感動しました。」と云ふと、

「僕の詩ですか。」と釜村は、くしやくしやに寝亂れた頭の毛を掻きながら、「なあに、與太ですよ。」と答へた。さうして、忽ち話題を變へて、「久世から聞きました、君は今度いよいよ改名したさうですね。」と聞いた。

「その改名に就いてですがね。」と本田は頭を掻きながら云つた。この二人は兩方頭を掻くのが癖ではあるが、釜村の方は殆ど相手が氣が附かないくらゐの早さでさうするのに引きかへ、本田の方は、肘を真正面に突張つて、首全體を抱へるやうな恰好をして、心から恥づかしさうにそれをやつた。「もつとも改名は二年も三年も前からしてゐるんですが、今度はいよいよそれを戸籍の方からすつかり手續をして、變へてしまつたのです。ところが。」とつづけて、彼は、繰り返し繰り返しその名前に就いて、久世に惡戯をされたことから、下宿屋で支那人と間違へられたことから、最近の久世の靴の事件に至るまで、詳細に話して、

「思ひ思つて漸く變へた名前が、妙に否になつて來たんです。」と云つた。

こんな風に訴へるやうに話してゐるうちに、彼は、弟も妹もみんな來い、みんな來いと歌つた釜村が、その風呂敷とやらに、自分の苦勞も一緒に包んでくれさうな氣がして、だんだん訴へるやう

な調子を強めたのであつた。

「僕は君の改名説には、昔から反對だつたんですよ。」と釜村は、本田の哀願の調子などに頓著しないで、反對の口調で云ひ出した。「僕は、陽などといふ名前より、耕右衛門といふ方が、遙かに日本的でいい名前だと思ひますがね。例へば、今後君が有名になつて、君の名前が羅馬字で外國人などにも紹介されるといふやうな場合にも、『陽』といふより、『耕右衛門』といふ方が、餘程その字面からいつても、字音からいつても、いいぢやありませんか。」座談の面白いのと、出鱈目話が巧みなので、友人間にも定評のある釜村は、寢床の中から得意になつて、こんな風に喋り出したのであつた。彼は言葉をつづけて、「『陽』などといふのは、支那人と間違へられるのも無理はありませんよ。支那人と間違へられるなんて餘り名譽ぢやありませんからね。それから思ふと、『耕右衛門』といふのは、むしろ歐羅巴人らしくて、すつとハイカラぢやありませんか。現に、佛蘭西には『グウルモン』といふ文豪がありましたし、又この間露西亞から來た詩人にもバリモンドといふ人があつたし、『モン』といふ音は僕など實に好きですよ。『右衛門』『左衛門』などといふ名は、一面に於ては日本的で、一面に於ては西洋流で、さうしてどこか優美で、何となくハイカラぢやありませんか。僕も、以前は、釜村の『釜』といふ字が嫌で、『荷満村』として見たり、『權太郎』といふ名が嫌ひで、『權』と一字にして見たり、いろいろ馬鹿な眞似をしたことがあります。結

局、名前といふものは符牒に過ぎないんですからね。『權』といふ字や、『耕』といふ字が否だといふのは、畢竟、僕たちの考へが凶とらはれてゐるからなんです。却つて、これは、我れ我れの先祖の、土に働いた人々が好んでつけた名だと思へば、『鷹』だとか、『公』だとかいふ貴族的なより、遙かに、近頃流行のデモクラティックでいいぢやありませんか。」

本田は、釜村が、木谷とはちがつて、どこか、云ふことから、調子から、詩などを作るだけのことがあつて、如何にもハイカラなのに、木谷の時とは比較にならないほど、更に遙かに感動してしまつた。

「あなたの、」と釜村に對しての彼の尊敬の念が『君』といふ言葉を口にさせなかつたほど本田は興奮して云つた。「あなたの『生んだの辰せ』といふ詩は實に感心して拜見しました。僕にもあれと同じやうな事があるんです……」

「いや、つまらないものですよ、」と釜村は、頭を掻きながら、相手の言葉を引き取つて、ますます調子づいて、「人間といふものは、いや、人はどうだか知りませんが、僕などは、いつ何を考へ出すか、何を云ひ出すか、自分ながら分りませんよ。それで、昨日いつたことも本當なら、一昨日考へたことも嘘ぢやなし、といつて、今日してゐることも尤もだといつた風で、自分でも、どれが本當なのだか、何が何だかさつぱり分りません。だから、一度ぐらゐるしか會はない人は、ある人

は、僕のことを非常に眞面目な男だといふかと思ふと、或る人は又、あんな出鱈目な不眞面目な男はないと云ふし、或る藝者はあの人は氣がさつくりしてゐていいと云ふかと思ふと、或る女はでれでれしてゐて氣障きざな奴だといふし、それでみんなの云ふことが、それぞれ本當だから驚くぢやありませんか。だが、僕にはそれがちつとも不思議ぢやないんです。ね、同じ人間ですもの、人のすることにも何でも出来ないことはない筈だし、また人の持つてゐるものなら、善人の心だつて、悪人の心だつて、それぞれ自分の中に這入つてゐますよ……」

さうして、釜村の話は果てしなかつたので、委ましくここにそれを敘する煩しさを避けるが、兎に角、この話に依つて本田の心持がすっかり變つたほど、彼を驚かし、彼に感銘を與へたのは事實であつた。

本田は、彼の下宿に歸る道道、(釜村は本田が歸る時まで、終に床を離れなかつた、)やつぱり元のとほり、自分が生れた時、父が附けてくれたままの本田耕右衛門を名乗らうと考へた。

すると、下宿に歸ると、思ひがけなくも、故郷の母からの手紙が彼を待つてゐた。

「ああ、取り返しのつかないことが起つたよ、」と母の手紙は冒頭に於て既に彼を驚かすに十分であつた。「私は、生れてから、まだ、こんな苦しい、こんな恐ろしい目に遭つたことがない。(死

ぬより辛いとはこれ以上のことをいふのではない。私は、この三日といふもの、一口も物を食べない、物が喉を通らないのだよ。やうやう、今思ひ切つて、この手紙をお前に書く。人目さへなければ、私は今直ぐにもお前の所へ飛んで行きたい。十里の汽車にも乗り兼ねてゐる私だが、今は汽車の中で死んでもよい。二百里が三百里でも行く。かういふうちにも隙さへ見つかれば、いつ何時お前の所へ行くかも知れないよ。

「その事件といふのはかうなのだ。」

「例の作右衛門の一件だが、委細のことを、さいはひ新家の治助が役場に出てるものだから、治助にすつかり打ち明けて、作右衛門のところから出産届が出たら、此方の改名届を出すやうにと頼んでおいたのだ。作右衛門の家は、御存じのとほり、後妻のお梅との二人ぐらしの上に、死んだ先妻には子供がなかつたし、初めての子のことであるから、さあ、女房が産氣がついたといふと、嬉しまぎれに、といつて、自分は手が離せないものだから、産婆の所への使も、役場への届も、一緒くたに甥の與吉に頼んでしまつたものだ。」

「それで、まあ、無事にお梅が安産した迄はよかつたのだが、何といつても無人で手が廻らないから無理もないのだが、とはいふものまるで手傳ひ人がないぢやなし、何と、お産があつてから三日目に、家に挨拶に来て、」

『奥様、お蔭様で、』作右衛門が云ふぢやないか。『お蔭様で無事に生れました。お蔭様で役場の方の届も何も彼もすつかり済ましまして、やつと片づきました。ところで、あの附けていただきました名前は何と申しますか、それをうかがひに参りましたので……どうも、せつかく附けていただきまして、うかがつておきませんと、不便なもので……』

「そこ迄はまだ笑ひ話なんだよ。もつとも生れたといふ事は、その晩に、小作男の勝藏から聞いてもゐたし、その前の日には役場の歸りに治助が寄つてくれて、作右衛門の出産届を子が生れた朝早く與吉が持つて來たので、昨日のうちに此方の改名届も無事に済ましましたと知らしてくれてもゐたので、私の方はすつかり承知してゐるものだから、まあ、これで流産などしなくて、お蔭でお前の名前の方も都合よく行つた、と安心してゐるんだよ。そこへ作右衛門が來て、後れ走せに、そんな呑氣な調子だもんだから、本當に大笑ひだつたんだよ。」

「ところが、お前、それからが大變なことになつたんだ。ああ、何といふことが世の中にはあるのであらう。無論お前にも想像がつくまい。そこで、私が何氣なく、本當に何氣なく、」

「『男の子、女の子、』と聞いたとお思ひ。」

「『へえ、御蔭様で、』と、持前の薄馬鹿のやうな笑ひ方をしながら、『御蔭様で女の子で……』と作右衛門が云つた。」

「『女の子だつたか、』と私はまだその時も気がつかなくつたのだよ。『まあ、しかし、どちらにしても達者なら結構だね。』」

「『で、奥様、』と作右衛門が云つた。『あの付けていただきました名前が……』」

「はつと思つた、その時の私の驚きを想像して御らん、……それから、……それから、……それから、……何も彼も滅茶苦茶だ。」

「正直な作右衛門は、おうおうと聲を上げて『私の初めての子を、私のたつた一人の子を……女の子に……耕右衛門……女の子に……耕右衛門……それは、あんまり……』と叫びつづける。」

「翌日になると、役場の治助が飛んで来て、『私は免職になりますッ。免職になつて、その上に悪くすると、懲役に行かねばなりません。』と、これも亦、私の顔を見るなり泣き出すのだ。」

「こんな騒ぎが父上に知れない譯に行かない。父上は怒つて、一時間ばかりの間といふもの、手當り次第のものを投げつけてこはされるやら、まるで氣が違つたかと心配した程だつたよ。『己の顔に泥を塗つたッ、』と叫んで、『己はもう村ぢゆうに顔向けがならない。己は、この元の起りの耕右衛門（この耕右衛門はお前のことだよ、）を東京へ行つて殺して来て、それから、お前を殺して、己も死ぬ、』さうして又『誰も彼も底の知れない程の馬鹿者共だ。耕右衛門（この耕右衛門もお前のことだよ、）の大馬鹿は云はずと知れたことだが、それに加勢するお前は勿論、男の子だか女の子だか分らない子供の名をつけてもらふ奴ももらふ奴だ。作右衛門の拔作奴めッ。また治助の奴も治助の奴だ、そんな馬鹿な改名届などを、迂闊に受附けるといふ頓馬な法があるもんかッ。』」

「かうして文字に書くと、何でもないやうだが、それはそれは父上の劍幕つたら、なかつたよ。治助には泣き込まれる。作右衛門には訴へられる。父上には怒鳴られる。さうして村では、私一人が、子の可愛さに引かされて、悪の張本人のやうに噂をする。本當に私は取りつく島がないよ。」

「ああ、この今の有様、今の私の心持を、何と現し得よう。ここに書いたのはほんのその千分の一萬分の一にも當らないのだよ。筆にも口にも盡せぬとは愚、現在この有様を見た者、現在私の心持になつた者より外には、到底、筆や口では傳へやうがない程だよ。」

「兎に角、手紙はこれで終る。私は、いつ何時、この手紙がお前の手に著かない先きにでも、隙があり次第お前の所へ逃げて行くかも知れないよ。」

本田は、この母の手紙を読みをはつて、少なからず驚いた。だが、ちよつとの間、彼はかう考へた。——却つてこれはよかつた。幸か不幸か、己は元の耕右衛門になりたいと思つてゐた所だ、それに、陽といふのは女の子の名前にもつて來いだ、今度は逆に己の名とその作右衛門の子の名とを交換すればいい。さうだ、早速さう云つてやらう。

しかし、これは少し變だぞ——と彼はすぐ氣がついた。——無論、それは變な筈であつた。さう簡

單に、一度役場に登記した名前を、交換が出来るものなら、前の時にあんな苦勞はしなかつた筈であつた。これは母が心配するのも無理はない、と彼は思ひ返した。

そのうちに、彼は、母の心配を心配するといふよりも、今にもあの白髮染で頭の地まで眞黒にした、色の黒い、一見田舎者らしい、要するに、餘り體裁のよくない、母親が玄關に現れさうな氣がして、その方が氣になつた、しかし又、あの母親が來たら、己がこの下宿で支那人と間違はれたことは取り消せる譯だな、とちよつと思つた。が又、ああ、己は支那人と間違はれた方がいい、日本の百姓の子と思はれるよりは、と思ふと、彼は、自分を生んだ母が、その母の來ることが、ひどく嫌に思へて、いらいらして來た。

そこへ、玄關に「電報ッ、」といふ聲がして、「本田耕右衛門といふ人が居りますか、」といふ聲に、彼は、ぎくりとして飛び上がった。さうして直ぐ「ああ、また久世がいたづらをして來たな、」と思つたので、ほつとして、そのまま坐つてゐるところへ、赤鼻の女中が駈け込んで來て、

「本田耕右衛門さんといふのは、」と、例のごとく赤い鼻に皺を寄せながら、「あなたでしたね、」と云つて、一通の電報をさし出した。

しかし、さすがに蟲が知らしたか、その時は赤鼻女中などは尻目にもかけず、彼は、胸に動悸させながら、震へる手でそれを開くと、「ハハキトクスダカヘレ」と讀まれた。

本田が泡食つて故郷の家に歸つて行つた時、母は、奥の十疊の間に寝てゐるが、別に大して危篤といふほど悪さうにも見えなかつた。

「もう何でもないんだよ、」と彼女は、唯それだけ云つて、苦しいといふよりは、きまり悪さうに目を閉ぢて、それ以上何にも云はなかつた。そこへ、外出してゐる父が歸つて來て、案外機嫌のいい顔をして、

「ああ、二度目の電報は見なかつたのだな、」と云つた。

——この本田にとつて、狐にでも憑かれたやうな事件は、便宜上、作者が簡単に説明すると、かういふ次第である。——

彼の母は、彼女の手紙にもあつた通り、四方八方から板挟みになつた苦しさから、東京の息子の許に逃げて行かうにも、その隙が見つからなかつたので、思ひ餘つて、その『死ぬより苦しい』といつた苦しさを、やつぱり死に遁れようとしたのであつた。言ひ換へると、彼女は廁の中で首を釣らうと試みたのであつた。

突然、次男の彌次郎が、廁の中に唯ならぬ叫び聲を聞いて、急いで駈けつけて窺いて見ると、母が、その中で窮屈さうに首を釣つて、悶搔いてゐた。それから、家中が大騒ぎになつた。父親は、